とあるキラキラしたいウマ娘

乾燥海藻類

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくあるオリ主もの。

史実とは出走レース、レース結果が異なる場合があります。

ご都合主義、独自設定、独自解釈あり。

目次

第01話　あるウマ娘との出会い　1
第02話　契約　9
第03話　覇王から学ぶもの　18
第04話　東条ハナの考察　24
第05話　葦毛のコーチ　28
第06話　葦毛のコーチたち　36
第07話　葦毛の襲撃者　43
第08話　合同練習　54
第09話　メイクデビュー　64
第10話　年が明けて　74
第11話　日本ダービー（前）　84
第12話　日本ダービー（後）　90
第13話　菊花散る　96
第14話　いざ福島　104
第15話　メジロの貴婦人　110
第16話　ネイチャと皇帝　116
第17話　チーム結成　123
第18話　激突の春　134
第19話　夏合宿　141
第20話　最後の冠　147
第21話　秋シーズン（前）　158
第22話　秋シーズン（後）　167
第23話　冬の日々　177
第24話　光の中のライバル　184

第２５話　雨が降らなければ虹は出ない
198

第01話　あるウマ娘との出会い

年に4回行われる選抜レース。それはトレーナーとウマ娘の真剣勝負だ。

トレーナーは将来性のあるウマ娘の発掘に熱意を燃やし、ウマ娘は少しでも自分を引き上げてくれる有能なトレーナーを欲している。

無論、まだデビューもしていないウマ娘たちである。色々と足りない部分は多い。むしろ足りないものの方が多いだろう。その中で何か光るものがないかと、トレーナーたちは目を皿のようにして探している。

ひとりのトレーナーが受け持てるウマ娘に制限はないが、キャパシティを超える人数を受け持てばパンクする。

基本的に新人はひとりのウマ娘に絞り、マンツーマンで指導するのが暗黙の了解のようになっていた。

気づけば午前中から行われていたレースも、すでに最終レースを残すのみになっている。この日、まだひとりもスカウトしていない新人トレーナーの西条はわずかに焦りを感じていた。

（前回は声かけすらできなかったからな。でもこういうのは焦って捕まえるものでもな

いし……）

トレセン学園に赴任して最初の選抜レースは、勝手がわからないというのもあってか、完全に見学だけで終わった。

これと思えるウマ娘に出会えなかったというのもあるが、声すらかけないのはどうかと、同僚からも呆れられた。

ただでさえ何の実績もない新人トレーナーは断られやすいというのに。

そしてこの日の最終レースがついにスタートした。

西条はハッとして顔を上げる。

レースに参加しているのは８人のウマ娘。距離は１２００メートルで、コーナーをふたつ挟む半円のコースだ。

先頭のウマ娘が最初のコーナーに入る。この時期に上手くコーナーを回れるウマ娘はそうそういない。スピードを落としたとしても、遠心力で外に膨れてしまう。当然、先頭を行くウマ娘もわずかに外へと膨らんでいった。

その隙をついて、小さな影が内に飛び込んできた。

（――速い！）

西条は内心で舌を巻いた。もちろん他のウマ娘と比べて速いというだけで、絶対的なスピードがあるわけではない。それでも、デビュー前としては破格の速さだった。

そのウマ娘はそのまま先頭に立ち、最終コーナーを回ってもスピードは落ちず、他のウマ娘を大きく離してゴールした。

拍手が巻き起こり、見学していたトレーナーたちがゴールに殺到する。

（あれはさすがに無理かな）

彼女を囲むトレーナーたちの中には中堅からベテランの顔も見えた。その中からわざわざ新人トレーナーの西条を選ぶ可能性は皆無に等しいだろう。

それよりも、西条が気になったのは3着に入ったウマ娘だった。

（最後に見せた末脚は光るものがあった）

仕掛けどころを間違えなければ、1着は無理でも2着には入れたはずだ。恐らく脚が持つか自信がなかったのだろう。だが、彼女は明らかに脚を余らせていた。

素晴らしい素質だと西条は思った。

（早くスカウトしなければ！）

見れば彼女はすでにコースから離れ始めている。誰も声をかけていないのが不思議でならなかったが、これはチャンスだと思い西条は足早に追いかけた。

「待ってくれ！」

立ち去るウマ娘の背に向かって声を掛ける。振り返った彼女と目が合い、西条は頭の中が真っ白になった。

（……スカウトって、どうやるんだっけ？）

思えばこれが最初のスカウトだった。トレーナー養成学校で、ウマ娘をスカウトする際のあれこれは頭に叩き込んだはずだが、それが一切合切吹き飛んでいた。

そしてついに飛び出したのは、とんでもない誘い文句だった。

「僕と契約してダービーウマ娘にならないか？」

そのウマ娘はポカンとした表情で西条を見つめていた。

◇

「僕と契約してダービーウマ娘にならないか？」

いきなりそんなことを言われて、ナイスネイチャは面食らった。スカウトというのはもっと段取りがあるのではないかと思ったが、実際にスカウトされるのは今回が初めてのこと。もしかしたらこれが普通なのではないかと、ネイチャは無理矢理自分を納得させた。

目の前の青年の襟元に光るのは、鉄色の真新しいトレーナーバッジ。そのピカピカの

バッジを見れば、今期に採用された新人なのだということはネイチャにも予測できた。それはともかくとして。

（ダービーときましたかぁ……）

と心の中で独りごちる。

無論、日本ダービーはすべてのウマ娘が憧れるレースだ。ネイチャとて出られるものなら出てみたいという気持ちはある。

ここでダービーで勝ちたいと思わないあたりに、ネイチャらしさの奥ゆかしさというか、自信のなさが表れていた。

「えーっと、なんでテイオーじゃなくてあたしなんですかねぇ？」

1着を取ったトウカイテイオーにトレーナーが群がっていくのはネイチャも見ていた。競争率が高そうだといって2着の子に行くなら分かるが、3着の自分をスカウトするのがちょっと分からない。

今日の最終レースだから、とりあえず唾を付けておこうと思っているのだろうかと邪推しても、それは決しておかしくないことだろう。

「あー、そうだな。テイオーじゃない理由ね」

西条は後頭部をボリボリとかいた後、深呼吸をひとつしてネイチャに向き直った。

「テイオーは、僕にとってデメリットの方が大きいからね」

「デメリット？」
　言っていることの意味が分からず、ネイチャは小首を傾げた。テイオーは遠からずＧＩレースで優勝するだろう。そうなればテイオーを担当したトレーナーは、ＧＩウマ娘を育てたトレーナーとして名が上がるはずだ。そのメリットは大きい。それよりも大きいデメリットとは何だろうか。ネイチャには見当もつかなかった。
「テイオーはクラシックレースに出走するかな？」
「そりゃしますよ。あたしテイオーとはクラスメイトなんですけど、本人は無敗でクラシック三冠取るつもりですよ」
「じゃあ、見事クラシック三冠を取ったらどうなるかな？」
「どうなるって……三冠ウマ娘ですよ。凄いことですよね」
「そうだな。凄いウマ娘だよ。たぶん誰が担当してもクラシック三冠取れたって言われるだろうね」
「え？　いや、それはどう……なんでしょう？」
　いくらトウカイテイオーが才気あふれるウマ娘だとしても、クラシック三冠が確実に取れるとは断言できない。
　クラシック三冠を確実に取ると言われるウマ娘は毎年のように現れるが、実際に三冠を取ったウマ娘は片手で足りるほどしかいない。

「では逆に、クラシック三冠を取れなかったらどうなるかな？」
「えっと、悔しい？」
　ネイチャは率直な感想を口にした。
「悔しいだろうな。じゃあその感情の矛先はどこに向かうと思う？」
　西条の何気ない言葉に、ネイチャは不機嫌をあらわにする。
「テイオーが自分のトレーナーに向かって「勝てなかったのはトレーナーのせいだ」って言うとでも？　テイオーはそんなやつじゃないわよ！」
　知らず知らずのうちに語尾が荒くなる。それを見た西条は、不謹慎にも友達思いの良い子だなと思ってしまった。
「いや、確かにテイオーはそんなこと言わないだろうな。問題は彼女のファンだったり、マスコミだったりだよ。無能な新人トレーナーが才能あるウマ娘を潰したと言うだろうね」
「……そんなことはないと思うけど」
「そんなことはあるんだよ。特にマスコミはウマ娘を叩けないからね。どうしても矛先はトレーナーに向かう。だから、僕にとってテイオーはそれほど魅力的なウマ娘じゃない」
「でもその理屈だと、あたしだと失敗してもいいって聞こえるんですけど？」

「確かにそう取られても仕方ないが、僕だって貴重な時間を無為に使うつもりはない。キミならダービーを取れると思ったからスカウトしたんだ」

真摯な態度で西条はそう言った。ネイチャは不覚にもその姿勢を好ましく思ってしまった。

「まあ、すぐに返事をくれとは言わないよ。これを渡しておく」

西条は懐から取り出した名刺入れの中の1枚をネイチャに差し出した。

「連絡先とトレーナー室の場所が書いてある。電話でもメールでもいいし、直接訪ねてくれてもいい。今日はこの辺で失礼するよ。話を聞いてくれてありがとう」

そう言って、西条はネイチャに背を向けて歩き出した。

第０２話　契約

　１日の授業が終わり、みんなが教室を離れる中で、ネイチャは机上にグデーと上半身を預けながら１枚の名刺を眺めていた。
（行くべきか、行かざるべきか、それが問題よね）
　人生で初めて、そして唯一自分をスカウト（評価）してくれた人だ。興味がないと言えば？になる。正直なところ、７割以上は受けてもいいかなと思っていた。
「あ、ネイチャも名刺（それ）貰ったんだね！」
「え？」
　肩口から覗き込んできたテイオーにビックリしつつ、別の意味でもネイチャはビックリしそうになった。
「テイオーも貰ったの？　名刺（これ）」
「うん。みてみてー。ボク１２枚も貰ったんだよー」
　そう言ってテイオーはネイチャの机に名刺を並べた。ネイチャは並べられた名刺を１枚１枚確認し、それが終わった後ホッと胸をなでおろした。
（そりゃそうよね。あの後テイオーにも声かけてたら、さすがに信用できないわよ）

「でもその名刺、ボクが持ってないってことはさ。ボクよりもネイチャを選んだってことでしょ？　理由が気になるなぁ～」

テイオーに悪気はないのだろうが、ネイチャは何となく自分が下に見られていると感じてしまった。とはいえ、現時点での競走能力を問うならばそれも仕方のないことではあるが。

そう思いそうになって、ネイチャはブンブンと首を振った。

（いかんいかん。こういうところは直さないとなぁ）

「どしたの？」

「ううん、何でもない。えと、この人があたしを選んだ理由はね……」

ネイチャは西条が語ったデメリットをそのままテイオーに伝えた。

「へぇ～、そんなことまで考えてるんだ。まあ何の根拠もなくカイチョーを超える八冠ウマ娘にしてやるって言われるよりはいいかもね」

「そんなこと言われたの？」

「うん。ボクってお調子者に見えるみたいでさ。上手く煽（おだ）てれば契約してくれると思ったんじゃないかな。ボクはそんなに単純じゃないってのにさ、失礼だよね」

「あははは」

空笑いしながら、自分もダービーウマ娘にならないかと誘われたことを思い出した。

（ダービーウマ娘になれるとかしてやるじゃなくて、ならないかってところは、誠意を感じるかも……）

「でさ、この人ってどんな人なの？」

西条の名刺をひらひらさせながらテイオーがネイチャに問う。

「どうって……悪い人じゃなさそうだけど」

「いや、そういうことじゃなくてさ。もしかして経歴とか調べてない？」

「――あっ!?」

ネイチャは慌ててスマホを取り出すと、トレセン学園のＨＰにアクセスして自分のＩＤとパスワードを打ち込んだ。

会員専用のページからトレーナー一覧に移り、西条の名前を探す。

「さ、さ、さ……あったこれね」

ネイチャのタップで、画面いっぱいに西条のプロフィールが表示された。

「お～、凄いねこの人。トレーナー養成学校を主席で卒業してる。しかもトレーナー試験も一発で合格してるよ」

トレーナーライセンスは国家資格の中でもトップクラスの難易度を誇る。３回以内に合格できれば優秀とまで言われるほどだ。

それを西条は一発で合格した。そしてトレセン学園に来た時期を考えると、在学中に

ライセンスを取得していることになる。
（そんなに凄い人だったんだ）
ネイチャの印象は、柔和な目をした腰の低い青年でしかなかったが、経歴は明らかにエリートのそれだ。
「ネイチャはこれからトレーニングでしょ。ボクも一緒に行ってもいい？」
「え？　うん、うん？」
ネイチャはいつものようにテイオーが自主トレーニングに付き合ってくれると受け取ったが、話の流れからするとどうも違うと感じた。
（あ、そっか。テイオーの中では、あたしとこの人が契約したことになってるんだ）
だが問題はない。ネイチャ自身もすでに決心がついていたからだ。

◇

ナイスネイチャを勧誘した翌日、西条は昨日のことを思い出し、トレーナー室でひとり頭を抱えていた。

「あれはない。あれはないよな。具体的なプランを何一つ語っていない。トウカイテイオーを選ばなかった理由を話しただけだ」

――ダービーウマ娘にならないか？

その言葉が頭の中でリフレインする。だがいくら悔やんでも時間は巻き戻らない。

「仕方ない。断られたなら、その時はその時だ。ひとつ勉強になったと諦めよう」

トレセン学園は基本的にウマ娘ファーストだ。しつこく迫れば理事長や生徒会長から警告や制裁を受ける可能性もある。

「もう放課後か。ん？」

昨日の今日でやって来るとは思っておらず、しばらくは緊張の日々が続くだろうと思っていた。だが、その予想は早くも裏切られることなる。

来客を告げるノックの音に返事を返すと、入ってきたのは待ち望んだ人物だった。

「こ、こんにちは～。いま大丈夫ですか？」

「あ、ああ。もちろんだよ。そこ座って。紅茶でも入れよう。ティーバッグだけどね」

「えっと、お構いなく」

と言って西条が止まるわけもなく、しばらくして紅茶が運ばれてきた。それを一口嚥下して、ネイチャは言葉を発する。

「お返事をしに来たんです」

「うん。聞かせてくれ」
「えと、未熟者ではありますが、お導きのほどよろしくお願い申し上げます」
「硬いな。まあ、こちらこそ。よろしくお願いします」
　そう言って、西条は右手を差し出す。ネイチャはにっこり笑って握り返した。
「それでですね。ひとつ訊きたいことがあるんですが……」
「うん？　ひとつと言わず何でも訊いてくれていいよ。可能な限り答えよう」
「もし、もしですよ。テイオーの方からうちのチームに入りたいって言ってきたらどうします？」
「そりゃ断るよ」
　当然のように西条は答えた。
「断るんですか!?」
「僕はキミをダービーウマ娘にならないかってスカウトしたんだよ。テイオーは当然ダービーに出るだろうし、そうしたらキミを裏切ったことになってしまうじゃないか」
「それは……確かにそうなりますね」
「だろう？　それに、テイオーは僕の指示に反発すると思う」
「……そんなにキツいトレーニングなんですか？」
「いや、負荷はそれほどでもないよ。僕は基礎を重視する性格でね。つまり地味なト

レーニングが多い。それに、今の時期に高負荷のトレーニングをすれば、テイオーは壊れてしまうかもしれない」
「それどういうことですか!?」
　ネイチャはビックリして西条に詰め寄った。西条はネイチャを宥めながら説明を続ける。
「テイオーの速さの秘密は何だと思う?」
「みんなは関節の柔らかさって言ってますね」
「うん。それと筋肉の柔軟性だね。全身がバネのようで、跳ぶように走るとはあんな感じだと思う。でも欠点もある。それはテイオーがまだ骨も固まっていない成長期だということだ。ここで無理をすれば、必ず近いうちに故障する。だから僕がテイオーのトレーナーなら、まずは今のフォームを改善させ、負荷の少ないジョギングや水泳、そして筋、腱、関節包のストレッチを重視するだろう」
「はぁ、なるほ……」
　とそこで、ウマ娘特有の聴覚が、扉の外から走り去る足音を捉えた。
「ごめん、トレーナーさん。トレーニングは明日からね」
　ネイチャはぺこりとお辞儀すると、慌てた様子でトレーナー室を出て行く。残された西条はわけもわからず、とりあえず自分で淹れた紅茶を飲み干した。

　トレーナー室を出たネイチャはテイオーの背中を見つけて追いかけて行く。
「折を見て呼ぶって言ったのに、なんで勝手に行っちゃうのよ」
「ごめん。後でメールするつもりだったんだけどね」
「チームに入れる気はないって言ってたけど、あたしが勧めればなんとかなるって」
「ううん。そうじゃなくって。確かめたくなったんだ」
　テイオーに気落ちした様子はない。むしろ面白いものを見つけたといった感じの表情だった。
「確かめるって？」
「あの人の見立てが本当かどうかってこと。ボクは今１２枚のカードを持ってるからね。それぞれのトレーナーに、ボクを指導する場合のトレーニングメニューを作ってもらうんだ。そうすればさ、あの人が言ったことが本当かどうか分かるでしょ」
「あ～、そういうこと」
　テイオーを本気でスカウトするつもりなら、過去のデータやらを集めて育成プランを練るだろう。何せライバルが多いのだから、トレーナーは必死でアピールしなければならない。
「それにさ、あの人ちゃんとネイチャのこと考えてくれてるよ。ちょっと羨ましいかも」
「そ、そうかな」

「そうだよ絶対。チーム入りのことはとりあえず置いといてよ。じゃあねネイチャ、また明日ね」

テイオーはニシシッと笑いながらスマホを取り出して去って行った。

第０３話　覇王から学ぶもの

　ネイチャが西条とトレーナー契約を交わしてから一週間が経った。基礎トレーニングを大事にするという西条の信条に従い、何とも地味なトレーニングを続けたネイチャだったが、やはり自分で考えて何となくやっていたトレーニングよりも身になっている気がする。

　そのくらいの信頼関係は出来上がっていた。

　一日の授業が終わり、今日もトレーニング頑張るかぁと席を立ったところで背後から自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ネイチャネイチャ、ついに結果発表の時間だよ！」

「テイオー？　結果発表って……何の？」

「む～、忘れちゃったの？　ネイチャんとこのトレーナーのことだよ」

「あ～、あれかぁ」

　ネイチャのトレーナーである西条がテイオーの欠点を指摘した。それが正しいかどうかをテイオー自身が動いて確かめていたのだ。

「で、どうだったのよ。１２人のトレーナーさんたちが提出したトレーニングメニュー

は」
「細かい違いはあったけど、ボクの走り方について言及した人はいなかったね」
「ん～、じゃあうちのトレーナーの考えすぎってこと？」
「それがさぁ、ここからが面白いところでね。カイチョーのチームのトレーナーにも訊いてみたんだよ。そしたらこう言ったんだ。「私が指導するなら、まずはおまえの走り方を矯正する。あの走り方では早晩脚を痛めかねない」って」
「リギルのトレーナーさんにも訊いたの!?」
　テイオーの言うカイチョーとは、生徒会長のシンボリルドルフであり、彼女の所属するチームリギルは、このトレセン学園のトップチームだ。
　メンバー全員がＧⅠウマ娘であり、彼女たちを指導する東条ハナは文句なくこのトレセン学園で最も手練れのトレーナーであろう。
　その彼女と意見が一致したということは、西条の意見も無視できないとテイオーは考えた。
「うん。確かに面白い結果になったわね。で、あんたはどうするの？　うちに来るならトレーナーさんの説得も手伝ってあげるけど」
「ううん。とりあえずリギルに入ることにしたんだ。もっと面白そうなとこが見つかったら移籍するって条件出したけど、笑いながら受け入れてくれたよ」

「天下のリギル相手によく言えたわね。やっぱあんた大物だわ」
ネイチャは呆れたように呟いた。

「――ということになったのよ」
「リギルに入ったのか。それはますます手が付けられなくなりそうだな」
ネイチャの報告を聞いて、西条はため息を零した。あの時、いくら舞い上がっていたとはいえ、ドアの向こうでテイオーが聞き耳を立てていたのに気づかなかったのは西条の失策である。
「でもなんだかんだテイオーのこと気にかけてたよね、トレーナーさんは」
ネイチャが揶揄うように薄く笑った。実際その通りで、テイオーがいつまでもトレーナーと契約しないようなら、ネイチャを通してそれとなく伝えるつもりではあった。
ライバルの故障を願うほど非道な人間ではないのだ。
「まあ、その件はもういいだろう。今日のトレーニングは、お勉強だ」
「お勉強かぁ。具体的には？」
「あるレースの映像を見てもらう。そこにはレースのすべてが詰まっている」
西条はリモコンを操作して、モニターに映像を映し出した。画面に大きく有《ｆｏｎ

ｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念の文字が映る。
　ゲート前に出走ウマ娘が集まっているのを見て、ネイチャはすぐにいつの有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念か気づいた。
「これ、オペラオー先輩が勝ったレースですよね」
「そうだ。この年のオペラオーは神がかった強さだった。年間通して無敗。ＧＩレース五つを含む重賞八連勝。その最後を飾るレースだ。またオペラオーもあの性格だからな。止められるものなら止めてみろ、というようなことを、芝居がかった口調で言ったわけだ。その結果、こうなった」
　それは、レース開始直後から始まった。
「完全に……囲まれてますね」
「オペラオーの勝ち方は、前の方でレースを進めて、最後の直線で逃げているウマ娘をかわすという、先行型の脚質（スタイル）だ。だがこのレースは後方に抑え込まれている。自分のレースをさせないことで、オペラオーを封じ込めたんだ」
　オペラオーを囲むウマ娘たちの視線は厳しい。絶対に勝たせないぞという意志が伝わってくるほどに。
「レースが動いたのは最終コーナー。ここまではオペラオーを抑えることに注力していたが、ここからは自分が勝つことを考え始める。よく見ろよ、ここからのオペラオーは、

圧巻だぞ」

オペラオーの位置は中団のやや後ろ。前にはウマ娘が固まっている。内には入れない。外にも出せない。道は消えたはずだった。

だがオペラオーはわずかな隙間をこじ開けるように進んで、先頭を走っていたメイショウドトウをハナ差捉えて勝利した。

「この時のオペラオーには”１秒先の未来”が見えていたはずだ」

「いきなりファンタジーですか？」

「観察力、洞察力、経験則。すべての感覚を研ぎ澄まして、他のウマ娘の動きを先読みしてたんだよ」

俯瞰で見てようやく分かる程度のわずかな隙間。オペラオーはまるでそこに隙間ができることを知っていたかのように飛び込んで行く。

あるいは誘いをかけ、隙間を作る。

ネイチャがごくりと唾を呑み込む。最初にこのレースを見た時は、単純に「オペラオー先輩は凄いなぁ」としか思わなかったが、解説付きで見ると改めて彼女の強さが実感できた。

「ここまで露骨になることはまずないだろうが、前を塞がれた時や妨害された場合の捌き方は頭に入れておいた方がいい」

「それは……まぁ」
「模擬レースでも位置取りは重要だろ？　本番はみんな必死に良い位置を取りに来るからな。自分だけじゃなくて、相手の動きを予測できるようになればレースが楽になる」
「なんか難しそう？」
　ネイチャが怪訝な顔で覗き込んでくる。西条はその視線を真摯に受け止めた。
「1秒……でも遅い。コンマ1秒の判断で未来を変える。一朝一夕にできることじゃないな。まあ、慣れだよ」
「言わんとしていることは分かるんですけど、このお勉強はちょっと早くないですか？　あたしまだデビューもしてないんですけど」
「レース展開を知ることは必要だ。レースはひとりでやるものじゃないからね。これは相手の思惑や作戦、仕掛けどころを見抜く「眼」を鍛えるための、いわゆるレース勘を鍛えるトレーニングだ」
　それからふたりは、何度もそのレースを見返した。

第０４話　東条ハナの考察

東条ハナがその噂を耳にしたのは偶然だった。

その日、チームリギルのリーダーであるシンボリルドルフがいつになくそわそわしていたのもので、「何かあったか？」と軽い気持ちで訊いてみた。

そうしたら、トウカイテイオーがチームの選定に東奔西走していると返ってきた。

トウカイテイオーのことは東条とて知っている。入学時はメジロマックイーンと共に双璧を成す存在と噂になった。

（マックイーンがデビューしたことで、本格的にトレーナーを探し始めたか）

東条ハナは多くのウマ娘を手掛けているが、何人かはトゥインクル・シリーズを卒業し、上位のドリーム・シリーズに進出している。トレーニング内容も確立され、人数の割に忙しさはそれほどでもない。

今なら新たに2、3人ほど面倒が見れるだろう。

トウカイテイオーは幾人かのトレーナーに、自分を指導する場合どんなトレーニングメニューを組むかと聞きまわっているようだ。

比較的自由を好むトウカイテイオーは、ガチガチの管理主義であるリギルは選ばない

と思っていた。それゆえに、東条はテイオーにはあまり気を配っていなかった。

しかし、手慰みというわけではないだろうが、東条は本気でテイオーのトレーニングメニューを考えてみるかと思い立った。

それからの彼女の行動は早かった。過去のトウカイテイオーのデータを集め、思索にふける。

（模擬レースでは差しが4割、先行が6割といったところか。単純に気分屋だな）

全力ではあるが本気ではない。そんなところだろう。実力差がはっきりしている相手でも、ぶっちぎったりはしない。ちゃんとレースをしている。それは決して舐めプなどではなく、レースを壊さないための配慮だ。

（やはり先行型で進めるべきか？　時代もそれが主流だし……）

そう考えて、東条は首を振った。つい最近それで失敗したばかりだと気づいたからだ。

（大事なのは本人がどう走りたいか、だ。トレーナー（私）の考えを押し付けるべきではない）

東条ハナが脚質（スタイル）を変えようとしたウマ娘は、明らかに納得していなかった。理解はしていたが、納得はしていなかったのだ。

納得することは覚悟することに通じ、覚悟することは全力を出せることに通ずる。

事実、彼女は勝てなくなった。東条ハナをもってしても、それほど特異な才能を持つ

ウマ娘を担当するのは初めての経験だったのだ。その愚を繰り返すつもりはない。

改めてリモコンを操作し、テイオーの映像を進めていく。東条がそれに気づいたのは、１３本目のレース映像だった。

（コーナーの回り方が独特だな）

コーナーでは直線に比べてフォームが崩れやすい。自分の中に垂直の線を意識することが重要になる。

テイオーの曲がり方は、一見するとフォームは崩れていないように見える。

（上半身の鍛え方が甘い。これでは下腿にかかる負担が大きくなる。最後の直線ではフォームのブレがそのまま残っている。それでも速いのは、さすがテイオーといったところだが……）

下腿部、とりわけ足首にかかる負担は相当なものになるだろう。疲労や負荷は蓄積されていくものである。

東条ハナほどのトレーナーでも、故障と無縁というわけにはいかない。時速６０キロ以上、一流のウマ娘ともなれば時速７０キロ以上で疾走するウマ娘は、人間の想像を超えた構造をしている。その身体は今もって未解明の部分が多く、神の創造した神秘の存在と言う者もいる。

５０戦以上走ってもピンピンしているウマ娘もいれば、わずか４戦で重度の骨折を負

うウマ娘もいる。最大限配慮しても、そういうことは起こり得るのだ。
（最初はフォームの改善と上半身の鍛錬だな。テイオーがトレーナーを決めたら、それとなく彼女のトレーナーに伝えておくか）
そう結論付けて、東条は資料をまとめた。
だが数日後、テイオー本人と会話する機会があり、東条は自分の意見を伝えた。それを聞いたテイオーは目を丸くし、笑みを浮かべた後、お礼を言って去って行った。
それからさらに数日経って、テイオーはリギルに加入したいと言ってきた。その時の条件も面白いものだったが、東条は気にするでもなくあっさりと受け入れた。
その時に、東条はひとりの男の名を知った。
（聞いたことのない名前だ。ということは新しいトレーナーか？　そういえば、最近は新人トレーナーとの交流もなくなっていたな）
そんなことを考えて、東条ハナは苦笑した。

第０５話　葦毛のコーチ

ネイチャを指導するにあたり、西条はまず２つのことを指示した。

１つ、トレーニングルームの使用禁止。

西条は基礎固め、つまり総合的な身体能力（フィジカル）のトレーニングを重視した。その際、器具を使用したトレーニングは弊害となる場合が多いのだ。それよりは腕立てや腹筋などの自重トレーニングを推奨した。

２つ、時間があれば過去のレース映像を見ること。

トレセン学園の生徒であれば、視聴覚教室に保管されている過去のトゥインクル・シリーズの映像がすべて閲覧可能だ。特にシニア期のＧⅠレースなどに出走するウマ娘は、誰もが洗練された動きであり、得られるものは多い。

ネイチャは正しくこれらを守った。トレーニングルームを使用しないことは、同級生たちに怪訝に思われたが、ネイチャは笑って誤魔化していた。

そして今日はトレーニングの中に初めて模擬レースが組み込まれていた。といっても大人数でやるものではなく、１対１のタイマンレースではあるが。

その相手を見て、ネイチャはゴクリと唾（つば）を飲み込んだ。

「今日は彼女に協力してもらう。ネイチャ、自己紹介を」
「はい！　中等部のナイスネイチャです！　よろしくお願いします、オグリキャップ先輩！」
「私のことは知っているようだな。今日はよろしく頼む」
　銀色の髪をなびかせて、オグリキャップは鷹揚に挨拶を返した。
「さあ、早速レースをしよう。ネイチャはスタート位置へ。僕はオグリキャップに指示することがあるからね」
　色々と言いたそうなネイチャをはねのけるように、西条は両手をパチンと叩いた。
「あたしには何かないんですか？　作戦とか」
「自由に走ってくれ」
　西条は素っ気なく言った。
「……さいですか。じゃあ、オグリキャップ先輩。先に行ってますね」
「ああ。……いいのか？」
　ネイチャを見送った後、オグリが西条に問う。
「今は考える力を育てているんだ。それよりキミへの指示だが、まずは後方に構えて、ネイチャに圧をかけてほしい。そして、最後の直線で思いっきり抜いてくれ」
「思いっきりか？」

「思いっきりだ」
「ふむ。了解した」
西条の指示を受けて、オグリはスタート位置へと向かった。ふたりが並んだことを確認し、西条が笛を鳴らす。
レースがスタートした。前に出たネイチャが内側の経済コースを走る。
（安定したフォームだ。基礎はしっかりと出来ているようだな）
オグリは素直に感心した。この時期のウマ娘は、それぞれが子供の頃に走っていたクセが大なり小なり残っているものだが、ネイチャのフォームは理想のそれに近かった。
第２コーナーを過ぎて向こう正面に入った瞬間、オグリが動いた。それまで軽快だった足音が、地鳴りのように大きく、響くものへと変わる。抜くぞ、抜くぞ、という気配を、ネイチャの背中にぶつける。
そのプレッシャーを受けて、ネイチャのフォームがわずかに乱れた。耳もせわしなく動いている。その圧力から逃げるようにネイチャのスピードが上がっていく。
だがその気配は背中に張り付いたように付いてくる。ふたりの距離は離れることもなく、縮まることもなく、最終コーナーを回った。
そこで、爆発音が響いた。
その一瞬後にネイチャの横を白い影が走り去った。

オグリキャップをオグリキャップたらしめる超前傾の超攻撃的フォーム。ネイチャも必死に追いすがるが、差は開く一方だった。最終的には7バ身差をつけられての決着となった。

「お疲れ様」

「ああ、ありがとう」

「ありがとう……ございます」

ゴールしたふたりに西条がタオルとドリンクを渡す。

「プレッシャーに負けてペースが乱れたな」

「そういうレベルじゃない気がしますけど」

明らかに手加減されていたのはネイチャにも分かった。抜こうと思えばいつでも抜けただろうし、スタートだってこちらの動向を窺ってのゆったりとしたものだった。

「少し休憩してもう1本いくぞ」

「私はすぐにでも構わないが?」

オグリは悪気もなく言ったのだろうが、ネイチャはブンブンと首を振った。

西条は苦笑し、15分の休憩をとった後にレースを再開した。

2度目のレースは、先ほどとは逆にオグリが前を行く形になった。そしてネイチャは困惑する。

（遅い……遅くない？）

ネイチャは西条の指導で、自分の中に時計を持っている。まだ完璧に時を刻んでくれるわけではない未熟な時計だが、これは１０００メートル６３秒くらいのペースだとネイチャは判断した。

このままのペースで進めば、ネイチャに勝ち目はない。そもそも勝つとか負けるとか、そういう次元の差ではない気はするのだが、自分の力がどこまで通用するのか確かめたい気持ちはあった。

追い抜く。そう決断して、ネイチャは外に一歩踏み出した。

その瞬間――

（――ッ!?）

目の前を塞がれた。ネイチャの踏み出しに合わせて、オグリも外へと踏み出したのだ。結果として進路を塞がれた形になる。斜行にはならない絶妙のタイミングだった。

ネイチャが内に進路を戻すと、オグリも戻す。その繰り返しが何度か続いた。

（後ろに目がついてるみたい……完全にこっちの動きを把握してる。こんなの勝てるわけないよ）

実力差をまざまざと見せつけられ、ネイチャの精神（こころ）は折れる寸前だった。

そのまま大きな動きもなくレースは進み、最後の直線でまたもコースが爆発した。

「――わぷっ!?」

オグリの後方を走っていたネイチャは、蹴り上げられたウッドチップをまともにかぶって悲鳴を上げた。それでも走ることは止めなかったが、最終的には大差をつけられてのゴールとなった。

「お疲れ様」

「ああ、ありがとう」

「……」

ゴールしたふたりに、西条は再びタオルとドリンクを渡す。だがネイチャは意志消沈して反応がない。西条は撫でるようにタオルをかけ、地面にボトルを置いた。

「ふたりはシャワーを浴びてくるといい。僕は準備をしているから、終わったらトレーナー室へ来てくれ」

西条はそう言い残して立ち去った。ネイチャはしばし茫然としていたが、オグリに腕を取られて無理矢理に立たされた。

「行くぞ。2本も走ったらお腹が空いた」

「あ、はい」

早くもスタスタと歩き始めたオグリをネイチャが追う。幸いシャワー室には二つ並んで空きがあった。

ふたりは手早く服を脱いで汗を流し始めた。しばし無言の時間が流れる。口火を切ったのはオグリだった。

「あれは、1対1だからやれたことだ。多人数で走るレースではまずやれないし、やられることもない。だが、近い形で抑え込まれるケースはある」

オグリ自身も散々やられたクチだ。オグリは器用なタイプではないため、力押しで切り抜けてきたが、ネイチャはそういうタイプではないと感じていた。

「負けて悔しいと思う気持ちは大切だ。だが私と今のおまえとでは、レベルが違い過ぎる」

これはあてこすりなどではなく、厳然たる事実だった。かたやデビュー前のウマ娘で、かたやトウインクル・シリーズよりもさらに熾烈なドリーム・シリーズで活躍する一線級のウマ娘だ。今のオグリに競り勝てるようなら、すぐにでもダービーで優勝できるだろう。

「まあなんだ。そう気落ちする必要はない」

ネイチャはオグリが不器用ながらに気を遣ってくれていることを、ようやく感じ取った。同時に、一端（いっぱし）に落ち込んでいた自分が恥ずかしくなった。

「えーっと、心配かけてすいませんでした。もう、大丈夫です」

「そうか。ではそろそろ行こう。西条（ごはん）が待っている」

オグリに急かされるように、ネイチャは髪も乾ききらないうちにシャワー室を後にした。

向かったトレーナー室からは、香ばしい肉の匂いが漂ってきた。中では西条が鉄板で肉を焼いていたところだった。

「早かったな。そっちに焼き終わったものを置いているから、どんどん食べてくれ。ごはんはセルフで頼む」

「ああ、了解だ。うん、いい匂いだ」

オグリは手ずから特盛のごはんをどんぶりに盛ると、テーブルについた。

いただきますの挨拶を終えると、積まれていた肉がどんどん彼女の胃袋へと消えていく。

（こういう契約かぁ）

オグリの健啖ぶりは学内でも有名だった。西条は彼女の脚を肉で買ったのだ。

「ネイチャ、早くしないと食べ損なうぞ」

「え？　ああ、うん。すぐ行きま～す」

そうして三人で（というかほぼオグリ一人で）、１０ｋｇの牛肉、３ｋｇの野菜類、５合のごはん、そして西条が冗談半分で用意したバケツプリンも綺麗に平らげて、オグリはお腹をさすりながら帰って行った。

第０６話　葦毛のコーチたち

オグリを見送った後、西条は片付けもそこそこにネイチャの正面に腰かけた。
「なんでこんなことを？　って顔だな」
「そうですね。まずは、いま必要だったのかってこと」
必要な訓練だったことは否定しない。だが今である必要が分からなかった。
「メイクデビューをどう考える？」
「スペシャルな明日につながる……最初の一歩？」
当然のようにネイチャは答えたが、西条はわずかに首を振った。
「全員がね。だが次のステージに進めるのはたった一人だ。それ以外のウマ娘たちは、厳しく不安な日々を過ごすことになる」
負けた者たちは未勝利戦で戦うことになる。それだっていつまでも続けられるわけではない。
毎年６月にデビュー戦が開始され、翌年の８月に未勝利戦が終了するまでの約１５ヶ月の間に１回は勝たないと、出られるレースがなくなるのだ。
その先の進路は３つ。格上挑戦するか、地方に移籍するか、レースの世界から身を引

くかである。

それまで勝てなかったウマ娘が格上挑戦したところで結果は知れたもの。結局は二択になる。

だからこそ皆が必死に勝ちにくる。レースという世界を真剣に考えている者ほど、死に物狂いで勝ちにくる。メイクデビューとはそういう場なのだ。

「勝つことは偶然じゃない。たまにまぐれ勝ち(フロック)などと宣(のたま)う輩がいるが、そんなものじゃないんだ。勝つ者は勝つために必死に努力し、勝つべくして勝っている。無論、枠順やバ場の状態、避けられないコンディションの変化など、運の要素もある。だが勝つということは必然に近いということを、まずは知ってほしかった」

勝つということを漠然としか考えていなかったネイチャと、勝つことは積み重ねだと考える西条には大きな乖離があった。

「オグリキャップ(彼女)ほどのプレッシャーを放てる者は、ジュニアクラスにはそういないだろうが、そういうものを体験しておくことは、いざそういった局面に出会った時、役立つはずだ。自分のレースをすると、言うのは簡単だが、それをしっかりと実践できているウマ娘は驚くほど少ない。特にジュニアクラスでは。だからこそ今は、自分というものを知り、確立させる期間だと僕は思っている」

ネイチャは気圧されたように押し黙った。西条が本気でダービーを狙っていると理

解したからだ。ただの誘い文句でもなく、おだてでもなく、ネイチャがダービーで優勝できると、本気で考えている。

それを理解して、ネイチャは途端に恥ずかしくなった。ダービーで勝つ、テイオーに勝つということが、自分でも懐疑的だったからだ。

ネイチャはあまり目立たない子供だった。ウマ娘らしく、走ることは好きで得意でもあったが、評価は”そこそこ速い”にとどまる程度。クラスで一番にはなれても、学年で一番にはなれない。そんなウマ娘だった。

レースで例えるならば、ＧⅢやＧⅡでは勝てても、ＧⅠでは勝てない。といった感じだろう。

本人もそれが分かっているから、一度だけでもＧⅠレースで勝てたらいいな。一度くらいなら、まぐれで勝てることもあるだろうと考えていたが、今この瞬間、鈍器で頭を殴られたような衝撃に見舞われた。

勝利というものを真剣に考え、真摯に向き合い、勝つ為のルートを模索する。勝つべくして勝つ。必然として勝つ。

今までは流されていたというか踊らされていたというか、トレーニング自体は真剣ではあったが、どこか曖昧気味だった気持ちが引き締まっていく。

ようやくネイチャは本気でダービーを目指し始めた。

◇

「今日は葦毛三銃士に来てもらった」
　オグリキャップの来訪からちょうど一週間後。今度は三人のウマ娘がやってきた。
一人はネイチャも知っている顔だ。いや、知っているといえば、全員を知ってはいた。
「オグリキャップだ」
「タマモクロスや」
「イナリワン――って、アタシは葦毛じゃねぇ！　アンタ失礼じゃねぇかい!?」
　と、小柄な鹿毛のウマ娘が西条に向かって声を荒げた。
「いや、これがキミらの持ちネタじゃないのか？　タマモクロスからこう振るように言われたんだが」
「やっぱアンタの差し金か！　アタシをオチに使うんじゃねぇっていっつも言ってんだろ！」
「しゃーないやろ。クリークはちゃんとオトしてくれんのやし」

「そういやクリーク先輩はいねぇのかい？」
「あいつは甘やかしいやからな。ウチらの指導方針とは噛み合わんのや」
　スーパークリークは母性のかたまりのようなウマ娘で、あまり相手を叱ったりはしない。褒めて伸ばす育成法もあるが、闇雲に褒めているだけでは上手くいかない場合が多い。要するに相手を見極める必要があるということだ。
　それに万が一、クリークに依存されては困ると思い、タマモクロスはクリークではなくイナリワンを選んだ。
「そもそもアタシが来る必要あったか？」
「三人おれへんとあのネタが出来んやないか」
「完全にオチ要因じゃねぇか！」
　イナリワンが怒りをあらわにして地団駄を踏んだ。
　西条が誘ったのはオグリキャップだけであったが、それを隣で聞いていたタマモクロスが面白がってついてきた。イナリワンも連れてきたのは、あのネタをやるためだろう。
「おまえたち、じゃれ合ってないで早くトレーニングを始めるぞ」
「おぅ、すまんすまん。ほれみぃ、アンタのせいでオグリんに怒られたやないか」
「アタシのせいか!?」

「あはははっ、よ、よろしくお願いしま～す」

こうして四人はトレーニングを始めた。メニューは西条の要望通り、いつもオグリたちが行っているものだった。

（特に奇抜なものはないな。基本通りというか、しかし量が段違いだ。ネイチャはよくついていっている）

だが成長途中であるネイチャに、このトレーニング量を毎日こなすのは無理がすぎる。故障のリスクを常に抱えなければならない。

（クラシックの後期くらいからだな）

その間にも、西条は三人のウマ娘をつぶさに観察していた。トレーニングのシメに行われた四人立ての模擬レース。特に指示は出していない。

（さすがに巧いな。コース取りやコーナーを攻める技術は、どれだけ実戦にもまれたかがものをいう。レース映像を見るだけでは、この空気は分からない。少しでも学んで、盗んでくれればいいが）

西条の期待を背負ったネイチャは4着でゴールを通過した。その後は、前回と同じように全員がトレーナー室に集った。

最初はインパクトを与えるために焼き肉を選んだが、今回はタマモクロスのリクエストもありお好み焼き&たこ焼きパーティーとなった。

小食のタマモクロスも焼き役に回ってくれたため。前回よりは余裕があるが――

「まるで無間地獄だな」

西条がぼそりとつぶやく。焼いても焼いても終わらない。お好み焼きとたこ焼きが、焼いた先からどんどん消えていくのだ。前回はネイチャが恐縮していたため、ほとんどオグリの独壇場だったが、今回はイナリワンも張り切っている。それに触発されてオグリのスピードも上がる。

（焼き肉にしろお好み焼きにしろ、調理と食事が同時工程というのがいかん。オグリキャップのスピードについていけてない。今度はカレーあたりにしとくか）

数時間後には、用意したお好み焼き粉とたこ焼き粉は綺麗になくなっていた。

第07話　葦毛の襲撃者

西条はネイチャの待つトラックに向かいながら、今後のメニューを考えていた。
（土台は大体出来上がってきた。これからは模擬レースも増やしていきたいが、相手がな）
最初の頃はネイチャに野良の模擬レースを推奨していたが、今は禁止している。あれはあくまで相手を観察し、レース勘を養うことが目的だったからだ。本気ではあるが全力ではない。
いま必要なのは、もっとレベルの高い模擬レースだ。となれば相手も厳選したい。今のように同じ相手とばかりでは、得られるものも限界がある。また変なクセもつきかねない。だが新人の西条では新しい相手を探すことも難しい。
（もう少し他のトレーナーと交流しておくべ――ッ!?）
思考の最中に、ぞわりとした悪寒を感じて西条は反射的に身を屈めた。その頭上を白い影が過ぎ去っていく。
「アタシのパターダ・ボラドーラを躱しただと!?」
葦毛の襲撃者は必殺の一撃を躱されたことに驚きを隠せない様子だが、それでもきっ

ちりと着地して目の前の西条と相対した。
西条も態勢を整えながら眼前のウマ娘を観察する。
（サングラスとマスクで顔を隠してはいるが、ウマ娘特有の耳と尻尾はそのままか。ただの不審者なら適当にボコって理事長にでも突き出すところだが、相手がウマ娘ではな。怪我をさせるわけにもいかん）
背後から土を踏む音が聞こえてきた。挟み撃ちにされたと気づく。
（おそらくは二人……確認したいが、目を切った瞬間に襲い掛かってきそうだ）
ウマ娘の手には、人間一人がすっぽり入るサイズのズタ袋が握られていた。初撃でダメージを与え、その隙に詰め込むつもりだったのだろう。
（襲われる理由は後から考えればいい。まずはこの状況をどう乗り切るかだ）
葦毛のウマ娘は無形の位（くらい）にてこちらをけん制している。無形の位とは攻防一体の型無き型。一見無防備に見えるが、あの構えの要諦は後の先を取ることにある。下手に手を出せば簡単に返り討ちにあうだろう。
かといって動かなければ、背後のウマ娘たちが襲い掛かってくるに違いない。
しかし眼前のウマ娘は、西条の思惑を嘲笑うようにあっさりとその利を捨てた。
「スカーレット！　ウオッカ！　ジョットストリームアタックをかけるぞ！」
「はい！」

「了解だぜ！」
葦毛のウマ娘が、申し訳程度の裏声で指示を出す。
大地を蹴る音は三つ。その一瞬後に、西条は前へと飛び出した。
「――ッ!?」
葦毛のウマ娘が目を見開く。だが反応は早かった。そして拳も速かった。
（これは躱せない。受けるしか、ない！）
狙いすました拳が西条の腹部に突き刺さる。その瞬間、西条の右足と大地の接地部分が、ドゴッとへこんだ。
「発勁を――流した!?」
大技を放った直後の硬直、その一瞬の隙をついて相手の腰を掴んで身体を引き寄せる。
「なぬっ!?」
葦毛のウマ娘は慌てて距離を取ろうとするが、すでに技は入っている。合気の要領で、逃げる相手の身体を抱え込むようにして半回転させ、後方へと投げ渡す。
「――きゃっ、とと！」
「ちょっ！　大丈夫かよゴールドシップ先輩！」
後ろの二人が無事キャッチしたことを確認すると、西条は全力でその場を離脱した。

トラックまで行けば大勢のウマ娘がいる。さすがに衆人環視の中で強行はしないだろう。

果たしてそれは正解だったのか、ウマ娘たちが追ってくることはなかった。

追手を振り切ったことが確認できると、西条は小さくため息を零した。

最後の瞬間、密着した状態からあのウマ娘は反撃に転じようとしていた。

発勁の技法のひとつに寸勁と呼ばれるものがある。文字通り至近距離から相手に勁を作用させる技術だ。

俗にワンインチパンチとも呼ばれている。

（しかし……勁か。これは使える……かもしれんな）

西条にも勁の心得はある。先ほど行った勁流しもその応用のひとつだ。

勁には様々な流派、門派が存在するが、根本的なところはほとんど同じだ。呼吸法や重心移動、身体内部の操作、意識のコントロール等を複合的に用いて、最小動作で最大の威力を出すことを目的とする。

だが勁道を開くのは容易ではない。勁道を開けなければ、発勁できないのは勿論のこと、正確な運勁もできない。

（さすがにゼロベースから教えるのは無理だ。ネイチャに適正があったとしても時間が足りない。だが骨子だけを叩き込めば、疲れにくくなる呼吸法やコーナーを攻める際の

重心移動など、レースに活用できる部分はある）

頭の中でトレーニングメニューを再構築していく。予想外に得るものは多かった。

（かといって礼を言う気にはなれんな。あれがチームスピカの白いのか。噂通り、いや噂以上の破天荒だ。あまり関わりたくはないな）

二度と出会わないことを三女神に祈りながら、西条はネイチャの待つ場所へと急いだ。

◇

時間は少し巻き戻る。

その日、ゴールドシップがその現場を目撃したのは偶然だった。昼食を終えた昼休み、芝生にゴロンと寝転んでいると、電話している男の声が聞こえてきた。

盗み聞くつもりはなかったが、ウマ娘の聴覚は容易く男の声を拾ってしまう。どうやら男はトレーナーで、電話の相手はトウカイテイオーらしかった。

トウカイテイオーといえば、メジロマックイーンと共に世代の双璧を成す存在であ

り、周囲の評価は高い。片方は早々に捕獲したが、テイオーはシンボリルド(皇)フ(帝)が目をかけているだけあって、なかなか手が出しづらい。

　どうやら通話は終わったらしい。ゴールドシップはすぐに動き出した。

「なぁ兄ちゃん。あんたトレーナーだよな」

「げぇっ!?　ゴールドシップ!?」

　いきなり肩を組まれて当惑したトレーナーはすぐに脱出を試みるが、ウマ娘の膂力に普通の人間が抗えるはずもない。

　男の脳内でジャーン！　ジャーン！　ジャーン！　と警告の銅鑼が鳴る。

「か、金ならないぞ」

「いるかよ。アタシがいくら稼いでるか知ってんのか？　それよりもよ、電話の相手、トウカイテイオーだったんだろ？　なに話してたんだ？」

「た、大したことじゃない。トレーナー契約した場合、どんなトレーニングメニューを組むかって話だ」

「ふ～ん。それってあんたにだけか？」

「……いや、みんなにじゃないかな。テイオーをスカウトしたトレーナーは大勢いたし」

「例えば？」

「え？　○○さんとか×××さんとか、△△さんもいたな。あとは――」

男はその場にいたトレーナーを思い出せる限り答えた。そしてようやくゴールドシップから解放された。

「なぁんか面白れぇことの予感がすんな。こりゃゴルシちゃんもうかうかしちゃいられねぇ」

ゴールドシップの行動は早かった。トレーナーの名前が分かれば学園のホームページから詳細が分かる。

数日のうちに、ゴールドシップは全容を把握した。

そしてある日の放課後、ゴールドシップはふたりのウマ娘と共にある男を追っていた。

「まさかまたこのカッコするとはなぁ」

「ププッ、似合ってるわよ。ウオッカ」

マスクとサングラス姿でため息を零すウオッカに、同じ格好をしたダイワスカーレットが揶揄うように指をさす。

ウオッカはスカーレットをジト目で睨み付け、もうひとつ溜め息を零した。

「いいかおまえら。アタシが背後から一発ケリいれて、その隙に詰め込むから、それ持って部室まで行くぞ」

「ちょ、ちょっと待った！　蹴る必要あるか？」

ウオッカが攻撃することに躊躇いを見せるが、ゴールドシップは落ち着き払った様子で男の背中を指さした。
「あの隙のねぇ歩き方を見ろ。ありゃ相当功夫（クンフー）を積んでるぜ」
そう言われて、ウオッカは男の歩き方を観察するが、別段変わったところは見られない。そもそも人間とウマ娘では身体能力に差がありすぎる。ウオッカはゴールドシップが警戒していることをいつものボケとしか思っていなかった。だが若いウオッカは知らない。身体能力の差が戦力の決定的差ではないということを。
「むしろいきなりズタ袋かぶせる方がやべぇぜ」
「あん？　それってどういう……」
「要するに、ウマ娘だってことは見せた方がいいんでしょ」
困惑するウオッカに対して、スカーレットが告げる。ゴールドシップは、あの男は視界を塞がれた状態で、かつ相手が何者か分からない状態ならば、本気で反撃してくる可能性があると言っているのだ。
「まあ蹴るっつっても背筋の辺りだ。大したダメージにはならねぇよ。行くぜ」
足音を消してゴールドシップが走り出す。そしてターゲットに向かって跳躍した瞬間、その目標が消失した。
「アタシのパターダ・ボラドーラを躱しただと!?」

たった一跳びではあったが、完全なる無音行動だった。気配も完璧に消していた。にもかかわらず、この男は反応した。

その事実に、ゴールドシップはさらに警戒を強めた。男はそのまま右足をわずかに引いた。それが戦闘態勢であることをゴールドシップは瞬時に悟る。

その後ろからドタドタとウオッカとスカーレットが追ってきた。

（せっかく背後取ってんのに音出してどうすんだ。あいつらもまだまだだな）

とはいえ、初撃をミスった自分にも責任はある。ゴールドシップは改めて目の前の男を睨みつけた。

（あの闘気、練り上げられている。至高の領域に近い。何者（ナニモン）だ？　こいつ）

即座に臨戦態勢に移行したことに驚きつつ、ゴールドシップはすぐさまふたりに指示を出す。

「スカーレット！　ウオッカ！　ジョットストリームアタックをかけるぞ！」

「はい！」

「了解だぜ！」

背後のふたりの飛び出しに合わせて、ゴールドシップも前に出た。その一瞬後に、男も前へと飛び出す。このままでは正面衝突だ。

そこで男はフェイントを入れた。それにつられたゴールドシップの脇をすり抜ける

つもりだったのだろうが――

（そんなモンにひっかかるかよ。まずは動きを止める――ここだッ！）

ゴールドシップの拳が男の腹部に突き刺さる。その瞬間、ゴールドシップは信じられないものを目撃した。

「発勁を――流した!?」

理論上は可能である。しかし実戦で使えるかというのは別問題だ。だが男は実際にやってのけた。

大技を放った直後の硬直、その一瞬の隙をつかれて、ゴールドシップは腰を掴まれた。

「なぬっ!?」

思わず声が漏れる。ゴールドシップは慌てて後方へと飛び退った。だが相手も追随して距離を離さない。

（マズいな、浮かされてるから力が入らねぇ。なら仕方ねぇ――な！）

すでに技は入っていた。振りほどくのが不可能となれば、反撃するしかない。ゴールドシップは気勢を高めて隙を窺うが、男の方が動くのは早かった。

（反応が速ぇ！）

ゴールドシップの身体は半回転させられ、後方へと投げ飛ばされた。

「――きやっ、とと！」

「ちょっ！　大丈夫かよゴールドシップ先輩！」
ゴールドシップを受け止めたスカーレットとウオッカが思わずよろめく。
「ちっ、してやられたぜ」
視線を前に戻すが、男の姿はどこにも見えなかった。
手加減はしていたが、油断していたわけではない。ゴールドシップは遊びに真面目なタイプなのだ。
そして相手も手加減をしていた。狙い通りこちらがウマ娘だと判明して、明らかに気勢が下がった。
互いに本気だったらどうだっただろうか。ゴールドシップの一撃は、まともに当たれば人間の骨など軽く粉砕し、臓器に痛撃を与える。
だが勝敗を決定づけるのは速さや威力だけではない。ウマ娘といえども、身体の基本構造自体は人間とそう大差はない。死角はあるし、可動域にも限界はある。
「面白れーヤツ」
ゴールドシップは指を鳴らして、にやりと笑った。

第０８話　合同練習

今日は珍客があった。西条がトラックでネイチャの指導をしていると、３人のウマ娘を連れたトレーナーらしき男が近づいてきた。

男の顔には見覚えがないものの、その後ろにいるウマ娘たちは察しがついた。毛色からして先日の襲撃者であろう。つまりチームスピカのメンバーだ。

「あ～、突然失礼。アンタが西条くん？」

「ええ、そうですが」

「うちのウマ娘たちがすまない。この通り謝罪する」

全員が頭を下げて謝罪の言葉を口にした。とりわけ主犯であったゴールドシップは反省の色が濃いのか腰を１８０度曲げて頭を下げていた。

とりあえず西条は襲撃した理由を求め、そのトレーナーは要求に答えた。

曰く、トウカイテイオーの一連の騒動を小耳にはさんだゴールドシップが、直接話を聞こうと西条を拉致しようとしたとのことだ。

「話が聞きたいだけならそう言えばいいだろう」

「それじゃつまんないだろ」

「つまるつまらんの問題じゃない」
「なんだよ、このゴルシちゃんが素直に謝罪したってのにまだ怒ってんのか？　男なら広い心で許してやれよ」
　このやり取りには、スピカのトレーナーも苦笑いだった。実害はなかったのでそのまま許してもよかったのだが、せっかくだからと西条はスピカのトレーナーに向き直った。
「そちらのチーム練習に、うちのウマ娘を参加させてもらえませんか？　それでチャラということにしましょう。できれば併走や模擬レースもお願いしたい」
　その要求に、スピカのトレーナーは快く応じてくれた。
　そして場所はスピカの練習場へと移る。ネイチャは少し緊張した様子でスピカの面々と挨拶をかわしていた。
　西条もスピカのメンバーに挨拶していくが、そこで一悶着あった。
「ウォッカじゃねぇ！　ウオッカだ！」
　西条に詰め寄っていたのはスピカメンバーのひとり、西条を襲撃したボーイッシュなウマ娘だった。
　対する西条はどうも要領を得ない様子だ。
「いっつも思うんだけど、あんたよく発音だけで相手が間違えてるって分かるわね。字

面ならともかく」
「今まで散々間違われたからな。なんとなく分かるんだよ」
「つまり……どういうことだ。違う……とは？」
「だからこういうことだよ。こうじゃなくて、こうな」
　ウオッカは地面に不正解と正解とを並べて書いた。そうしてようやく西条はウオッカが憤っている理由を理解した。
「なるほど。捨て仮名ではないのか。すまない、勘違いしていたようだ」
「おう。分かってくれりゃいいぜ」
　誤解が解けたところで、ウオッカとスカーレットはトレーニングコースへと戻って行った。
　そして西条はコースから移動しようとしたところで、白い影に捕まった。
　西条とゴールドシップの間にあるのは木製の立派な将棋盤だ。相手をしろということだろう。
　とりあえずきちんと正座をして向き合っているあたり、このウマ娘は真面目にふざけているのだろう。西条は頭を抱えながらも、さっさと終わらせることにした。
「お願いします」
「お願いします」

将棋には定跡がある。例えば矢倉や四間飛車など。まず定跡があって、そこから打ち手の個性が表れる。

だが――

（コイツ――直感（カン）で指してやがる！　しかも強い。奨励会クラスはある）

制限時間を決めたわけではないが、ゴールドシップはほぼノータイムで指してくる。それを受けて西条の手も早くなる。

（殴り合いが望みか。なら受けてやるよ！）

バチンバチンと駒を打ち合う音がトラックに響く。それはある種異様な光景でもあった。

次第に衆目を集め始めた頃、ゴールドシップが西条の陣深くに飛車を打ち込んだ。

（決めにきたか。だがこれを受け切れば――）

ゴールドシップの攻めを巧みに躱し、今度は西条が桂（けい）を楔に攻め始めた。

持ち駒を躊躇なく吐き出し、ゴールドシップを追い詰める。

「これで――」

バチン！　と小気味よい音が響く。

「――詰みだ」

ゴールドシップの柳眉がピクリと動く。沈黙すること約3秒。

「……ありません。ちっ、少し遊び過ぎたか。なら次はこっちで勝負だ。懺悔の用意はできてんだろうなぁ！」

ゴールドシップが懐から真紅のデッキケースを取り出す。だが西条の反応は冷めたものだった。

「悪いが俺はデュエリストじゃなくてトレーナーだ」

「ほう、ちったぁ素顔が見えてきたじゃねぇか」

「……おまえ」

「ナイスネイチャだっけか？　言葉遣いくれぇでビビるタマには見えねぇぜ」

このウマ娘が散々からんできたのは、こちらの「素（す）」を引き出すためなのだと、西条は遅まきながらに気づいた。

「随分と気にかけてくれるんだな」

「あったりまえだろ。このゴルシちゃんはトーセンジョーダン以外のウマ娘には優しいんだぜ」

何故トーセンジョーダンだけが例外なのか。それともこのくだりまで含めて、ゴールドシップ流の諧謔（かいぎゃく）なのか判断に迷ったが、わざわざ藪をつつくことはないと西条は口を噤んだ。

「不必要に威圧感を与える必要はあるまい。トレーナーとウマ娘は対等な関係なんだ」

指導する者と教わる者という関係上、勘違いして高圧的になる指導者は少なからずいる。トレーナーとウマ娘はあくまで対等の関係であり、両者の合意のもとでトレーナー契約は成立するのだ。

「ふ～ん。ま、トレーナーとウマ娘の関係なんざ様々だからな。うちみてーに自由なとこもありゃ、リギルみてーにキッチリ管理するとこもある。アンタがちゃんとトレーナーやってるなら、これ以上アタシが言うことはねぇや」

「……忠告は受け取っておこう」

「おう、次来るときはちゃんとデッキ持ってこいよ」

ゴールドシップは優雅に手を振ると、自身のトレーナーの元へと歩いていった。その背を見送りながら、西条は小さくかぶりを振った。

◇

「で、どうだった？　スピカとの合同練習は」

「準備運動と整理運動はみんなでやるみたいだけど、決まったメニューはないようでし

たよ。相談したらのってくれるだけで、基本は自分に足りないところを鍛えるって感じかな」
「なるほど。自主性を重んじるわけだな」
　スケジュール帳がビッシリ埋まっていることに安心するウマ娘もいれば、それをストレスに感じるウマ娘もいる。トレーナーとしての育成方針やチームの雰囲気などは、リギルとは正反対だろう。
「だが所属するウマ娘は全員が一級品だったな」
「うん。スペさんやマックイーン、ウオッカやスカーレットもキラキラしてた。ゴールドシップさんは……クラシック二冠のウマ娘なんですよね？」
　いまいち信じられないといった様子でネイチャが西条に問いかけた。結局、西条と対局した後のゴールドシップは、意味不明の言葉でメンバーにアドバイスしたり激励したりと、トレーニングらしいトレーニングはしていなかった。
「同じだけの筋トレをしても、その成果には違いが出る。生まれつき筋肉がつきやすい体質と筋肉がつきにくい体質がある。聞いたことがないか？」
「あ～、聞いたことあるかも」
「それにはミオスタチン遺伝子というものが関係している。これは僕の推測にすぎないがゴールドシップはトレーニングをすればするだけパワーアップしてしまう体質なん

だと思う」

「……してしまう?」

ネイチャが目を細める。西条もそれほど詳しいわけではないが自身の推論を続けた。

「実は良い事ばかりじゃないんだ。筋肉がつき過ぎれば関節の動きが阻害され、敏捷性(アジリティー)が失われる。バランスの問題だよ。レースで勝つにはパワーだけじゃだめだ。総合的(フィジカル)な身体能力が高くなくては駄目なんだ」

「世の中そうそううまい話はないってことかぁ」

画一的なトレーニングではゴールシップの強みが消されてしまう。このシビアで繊細な調整は本人にしかできないのだろう。

極端な話、ただ歩いているだけでも筋肉がつく。彼女が普段セグウェイに乗っているのも調整のためだろうと西条は考えた。

「ゴールドシップはかなり希少なタイプのウマ娘だ。彼女のトレーニングメニューを組めるトレーナーはほぼ存在しないだろう。それで、さっき話したミオスタチン遺伝子なんだが、面白い考察もあってね。この遺伝子が、生まれながらにウマ娘の適正距離を決定しているという説だ」

「う〜ん? それって努力の否定になりません?」

「ある程度は努力によって補強できるだろうが、生まれながらに長距離が得意なウマ娘

と、トレーニングでスタミナをつけて長距離を走れるようになったウマ娘では、やはり違いが出た」

「救いはないの？」

「努力が才能を上回る場合も、もちろんある。メジロ家は春の天皇賞（超長距離）を勝つ為の特別なトレーニングを幼少期から積んでいるらしいからな。その集大成がマックイーンなのだろう」

「マックイーンかぁ。確かに春の楯は絶対に取ると豪語してましたね」

余談だが、トレセン学園中等部には学年以外にクラスというものがある。Ａ～Ｃまでの３クラスあり、ＡＢクラスはトレーニング期間、Ｃクラスがデビューを許可されたクラスになる。

しかしデビューを許されたからといって、すぐさまデビューするわけではない。大抵のウマ娘は２年間しっかりとトレーニングを行ってからデビューに至る。

だがマックイーンは２年時にデビューしている。これはシニア期にしか出走できない春の天皇賞が関係しているのだろう。しかしその焦りが災いしたのか、骨膜炎を発症してジュニア期のほとんどをふいにしてしまった。デビューを取りやめようにも、一度提出した出走届を取り下げることはできないのだ。

つまりネイチャ、テイオー、マックイーンは同期だが同級ではない。

ネイチャ、テイオーは中等部3年ジュニア級で、マックイーンは中等部3年クラシック級となる。

閑話休題。

「まあ、この理論は学会でもまだ疑問視する声が多いからな。検証の余地はあるだろうね」

そう言って、西条はクスリと笑った。

第０９話　メイクデビュー

スピカとの合同練習を切っ掛けに、ネイチャは度々彼女たちと共に練習を行うことになった。

こちらが出向くことが多かったが、相手の方が足を運んでくれることもある。そしてその度にゴールドシップは西条に絡んできた。

将棋、囲碁、チェス、オセロの定番ものから、花札、野球盤、バックギャモン、カードゲームまで。その挑戦に西条は毎度律義に付き合っている。

「それを認めるにはデータが少なすぎる。再現性だって乏しい」

「そりゃ仕方ねぇだろ。同じウマ娘なんていねぇわけだし。むしろ数少ないデータで結論を導き出したことを評価すべきだ」

「本人だって「可能性の一つ」と言って明言を避けただろう」

「ありゃ周りがうるせぇからだろ。博士の中には確固とした答えがあるんだよ。これだから理屈ばっかりでロマンの無い連中はよ」

そう吐き捨てて、ゴールドシップは自前のクーラーボックスから瓶ビールを取り出してラッパ飲みを始めた。

さすがに西条がとめにかかるが、よく見ると瓶には「ポニービール」のラベルが貼られていた。つまり炭酸リンゴジュース（はちみつ入り）である。

未だ未解明部分の多いウマムスコンドリアについての論文にも目を通しているあたり、このウマ娘のアンテナと知能は相当高いと西条はうなった。

頭と喉を使ったせいか、西条も渇きを覚えてクーラーボックスに手を伸ばす。

「ひとつ貰うぞ」

「１２０億な」

「ちょっと持ち合わせがないな。これで勘弁してくれ」

空色の缶を1本選んだ西条は、財布から取り出した硬貨を3枚弾いてゴールドシップに投げ渡した。

コースの方に目を向ければ、ちょうどネイチャが3着でゴールしたところだった。

（さすがにダービーウマ娘のスペシャルウィークとすでに実戦を経験しているメジロマックイーンでは分が悪いか）

西条も現段階でネイチャが太刀打ちできるとは思っていない。あのふたりから盗めるものを盗めるだけ盗めればいい。追い上げてきているウオッカやダイワスカーレットも良い刺激になるだろう。

気づけばそろそろメイクデビューを考える時期になっていた。

◇

デビュー前から注目を集めていたトウカイテイオーは紅葉の季節にデビューを果たし、当然のように1着を飾った。

勝利後のインタビューで、１２月に行われるＧ1レース、朝日杯フューチュリティステークスを取ると宣言した。

その翌週、ついにネイチャがデビューする。

「やっぱり緊張するか？」

「そりゃ、さすがにね。最初に躓くわけにはいかないじゃない？」

「あまり気負わなくていい。スタートが上手くいけば先行で、出遅れたら差しに構えればいい。重要なのは、自分を見失わないこと。自分のレースをすることだ」

西条は差し一辺倒だったネイチャの脚質（スタイル）を自在型に変えた。これはレースの展開次第で先行、差しのどちらにでも切り替えられる脚質だ。身近にスペシャルウィークという好例がいたために習得は早かった。

「かからないおまじないも教えただろう。キミなら”大丈夫”だよ」
「うん。あたしは”大丈夫”。ちゃんと走れる」
　これはいわゆるルーティンと呼ばれるもので、感情のコントロール術である。特定の所作、特定の言葉などを用いて、自己暗示、精神制御（マインドセット）を行う。
「よし！　じゃあ行ってくるね」
「ああ、楽しんでこい」
　ハイタッチを交わし、西条はネイチャを送り出した。
　結論から言えば、ネイチャは勝った。
　綺麗なスタートを切ったネイチャは中団前目の位置でレースを進めたが、逃げるウマ娘がいなかったために押されるように先頭に立った。
　余力を残しつつそのままレースを進め、最後の直線でさらに伸びて1着でゴールした。
　地味だが安定性のある勝ち方だった。だが派手な勝ち方ではなかったためか、各紙の扱いはテイオーより下であった。

◇

『トウカイテイオー、メイクデビューを快勝！　朝日杯フューチュリティステークスでＧＩ勝利を目指す！』

月刊「優駿ウマ娘」の表紙を飾り、特集まで組まれたテイオーに比べ、ネイチャの記事は小さいものだった。

「まぁこんなもんだよね。主人公とモブの違いを見せつけられた感じですなぁ」

「何ブツブツ言ってんのネイチャ～。それよりこの写真なんだけどさ、ちょっといまいちだと思わない？　ボクとしては左からの方が見映えが良い気がするんだよね」

「ソーデスネー」

同じ雑誌を手にして近づいてきたテイオーに、ネイチャは軽口で返した。

「ネイチャも朝日杯を目指したりする？」

ワクワクした様子で訊いてくるテイオーに、ネイチャはわずかに困惑する。

「う～ん、実はあたしも聞かされてないんだよね。目の前のことに集中しろって感じで」

「そーなんだ。一緒に走れるといいね」

「そうね。それもアリかな」

まんざらでもない様子でネイチャはそう返答した。

そして放課後、西条に今後の予定を質問してみたが――

「次？　次はベゴニア賞に出ようと思っているが」

「あ～、やっぱそのあたりっすよね～」

テイオーに訊かれた時も、内心朝日杯(重賞)はないでしょと思っていたネイチャであったが、西条が普通に1勝クラスのレースを口にしたので逆に安心してしまった。

「他に出たいレースがあるのか？」

「朝日杯はなし？」

そうネイチャが口にすると、西条は困ったように眉根を寄せた。

「……正直、テイオーと戦うにはまだ早いと思っている。もう少し待ってほしい」

「やっぱ勝てないかな？」

トレーニングを重ねて、自分が速く、強くなったことは実感として確かにある。メイクデビューを勝利で飾れたことも、小さな自信となっていた。もしかしたら……という気持ちは少しだけある。

「勝てないとは言わない。だが、分が悪いことも否定はしない。トレーナーとしては、やはり勝てる可能性の高いレースに出してあげたいからな。重賞レースは来年からだな」

「弥生賞？」

弥生賞は皐月賞トライアルレースのひとつで、レース場、距離ともに皐月賞と同じの

ため、皐月賞の出走条件を満たしているウマ娘でも予行演習として出走する場合がある。

テイオーが朝日杯を優勝すれば、弥生賞に出なくとも皐月賞には出走できるだろうが、出てくるかどうかは本人次第だろう。

「それも候補のひとつかな。別のトライアルに出る可能性もあるよ」

「そっか。まあ、とりあえずは目の前のレースからだね」

「そういうことだ。だから勝つ為にトレーニングを始めよう」

「りょ～かいです！」

ネイチャがビシッと敬礼する。ふたりは笑いあって練習場へと向かった。

そこにはすでにスピカのメンバーが集まっていた。ネイチャをコースへと送り出し、西条はスピカのトレーナーとトレーニングメニューについて確認を始める。

西条はハードトレーニングについては否定的だった。あるトレーナーの言った「スピードは天性のもの、スタミナはトレーニングの賜物」という言葉も、最初はそういうものかと思っていたが、近年発表された「ウマ娘の適正距離は先天的に決まっている」という理論と、先に挙げたトレーナーが成功したウマ娘の影で、多くのウマ娘を壊していたことを知ってからは、ハードトレーニングに慎重になった。

とはいえ、ハードトレーニングが悪いというわけではない。準備運動と整理運動を

しっかりと行えば、リスクを抑えて最大の効果を得ることができる。
「はぁ……はぁ……キッツい」
「がんばって！　でも無理はしないでね」
弱音を吐くネイチャに、スペシャルウィークが活を入れる。その後ろではダイワスカーレットとウオッカが汗だくでついてきていた。
「ネイチャ！　急走と休息を意識しろ！　休みながら走るんだ！」
「りょーかいでーす」
坂路コースは新人トレーナーの西条が頻繁に利用できる場所ではない。今日はスピカのトレーニングに便乗させてもらっている。
「おし、じゃあこっちも始めるか」
坂路トレーニングには参加していないゴールドシップが手中のカードを眺めて不敵に笑う。スピカの練習に参加する条件として、西条がゴールドシップの相手をすることがいつの間にか常態化していた。
「俺は《砂漠の狼》をプレイして、スペシャルスキル《狼牙風風拳》を発動。《おさげの女》に攻撃する」
「させっかよ！　カウンタースキル《飛竜昇天破》を発動だ。これで返り討ちだぜ！」
「ならば！　サポートカード《プーアルの変化術》を発動。《砂漠の狼》の攻撃力を――」

「サポートカウンター《幼馴染みの鉄板返し》を発動。相手が発動したサポートカードの発動を無効にして破壊する」
「くっ、俺の負けか」
　西条は敗北を宣言して残りの手札を場に落とした。トラックに視線を戻すと、自分の担当ウマ娘が汗だくで走っている。
　西条はなんとなく罪悪感と徒労感を覚えた。
「おう、そっちも一段落ついたか？　ならゴルシ、スタートの合図を頼む」
「んん？　しゃーねぇなぁ」
　スピカのトレーナーから投げ渡された笛を受け取り、ゴールドシップはスタート位置に目を向けた。そこには５人のウマ娘が気合の入った目でレースの準備をしているところだった。
（今日のシメの模擬レースか）
「どう見る？」
「……まだ厳しいでしょうね」
　模擬レースの距離は１６００メートル。
　下級生のウオッカとスカーレットは何とかなるだろう。
　距離的要素に分があるマックイーンには多少有利か。

スペシャルウィークはかなり厳しい。
５人の準備が整った。模擬レースだというのに、その目は真剣そのものだ。
ゴールドシップが大きく息を吸い込む。
「パーパパパーパパパーパッパッパー、パーパパパーパパパーパッパッパー」
（ファンファーレから!?）
全員の心がひとつとなった。
「パパパーパパパッパ、パパパーパパパッパ、パパパーパッパッパッパッパッパッパァァァーーーー」
（これは……宝塚記念だな。というか、どこから音を出してるんだ?）
西条はゴールドシップの奇妙な特技に舌を巻いた。
それは、声というには、あまりに美しすぎた。
荘厳で、重厚で、清廉で、そして明澄すぎた。
それは、まさに、トランペットの音色だった。
「――ガシャコン！」
（笛は!?）
再び、全員の心がひとつとなった。

第１０話　年が明けて

秋も深まり、師走の顔が見え始めた頃。ネイチャは第2戦、ベゴニア賞に挑んだ。初戦を勝利で飾ったことにより、精神的にも成長したネイチャは思いのほか落ち着いていた。

自分のペースを見失うなという西条の指示に従い、ネイチャは本来の脚質（スタイル）である差しに構えて、その末脚を遺憾なく発揮し、危なげなく勝利を飾った。

その翌月に開催された朝日杯フューチュリティステークスは、大多数の予想通りにトウカイテイオーが強さを見せつける結果となった。

そして年が明けて、改めてネイチャとローテーションについて話し合うべく、ふたりはトレーナー室で膝を突き合わせていた。

「まずは、明けましておめでとう」

「おめでとうございます。今年も一年よろしくお願いしますね」

「こちらこそ。じゃあ今後のローテーションについて決めよう」

ローテーションとは、一言で言えば大目標に向けたスケジュールだ。これは個人差が大きく、間隔が空いてもレース感が鈍らないウマ娘もいれば、明らかに動きが悪くなる

ウマ娘もいる。

一般的には中3～5週くらいが良いとされている。

「候補としてはこんなところか。弥生賞はテイオーが出てくる可能性が高い。トレーナーとしては、テイオーとの対決は、やはり皐月賞までとっておきたい」

ホワイトボードに出走できそうなレースを書き並べ、視線をネイチャへと戻す。

ネイチャとテイオーの勝敗が及ぼす結果を、西条は予想ができなかった。負ければ苦手意識を持ってしまうかもしれないし、勝ったとしても、それが自信に繋がれば良いが、隙になってしまう可能性もある。

スペシャルウィークがまさにそれだった。スペシャルウィークは弥生賞を勝ったが、そのレースで競り合ったセイウンスカイの策に嵌まった。

セイウンスカイは自分の限界点を敢えて低く見せることで、実力を誤認させたのだ。ウマ娘ならば出走するレースは全て勝ちたいのは当然のこと。だがセイウンスカイは皐月賞（大魚）を得るための撒き餌として弥生賞を使った。

そしてセイウンスカイはうまうまと大魚を釣り上げたのだ。

「てか重賞レースばっかりなんですけど？」

「先のベゴニア賞で分かったが、重賞は最低ラインだ。こういうと他のウマ娘に失礼かもしれないが、楽に勝つことは覚えない方がいい」

「じゃあ、トレーナーさんのおすすめは？」
「２月の共同通信杯かな。東京レース場だから、キミの末脚が活かせる」
「なるほどなるほど。じゃあそれにしときますか」
ネイチャはあっさりと了承し、ローテーションはそういうことになった。

◇

『ナイスネイチャ、無傷の３連勝で皐月賞へ準備万端！』
東京レース場で１４人によって争われた共同通信杯を、３番人気のナイスネイチャが４バ身差をつけてデビュー３連勝を飾った。トレーナーの西条氏は「ネイチャらしいレースができてよかった」と語る。
レース序盤は中団よりやや後ろに位置取ったナイスネイチャは徐々に位置を押し上げ、最終コーナーでは３番手の好位につけた。最後は東京レース場の長い直線を、自慢の末脚で並ぶ間もなく前方の二人を抜き去り存在感をアピールした。
世代の頂点とも噂されるトウカイテイオーとの対決は目が離せない。直接対決はク

ラシック1戦目、皐月賞か!?

「いい記事を書いてくれたな、月刊トゥインクルさんは」

「それだけに申し訳ないっていうか。あはは……ごめんね」

「ごめんは禁止だと言っただろう」

渇いた笑いを零すネイチャの髪を撫でながら西条は優しく微笑んだ。

異変に気づいたのは共同通信杯を終えた翌日のトレーニングだった。レース後ということもあって軽めに流す程度のものだったが、西条はなんとなくネイチャの動きに違和感を覚えた。

疑惑が確信へと変わったのは、トレーニング後のマッサージを行(おこな)っていた時だ。

本人は筋肉痛だと楽観的だったが、西条はすぐにトレセン学園が提携している病院に予約を取り、翌日に検査を行(おこな)った。

結果は脛骨過労性骨膜炎(シンスプリント)。

シンスプリントは下腿内側に位置する脛骨の下方に痛みが発生する症状で、骨折した時のような激しい痛みではなく、鈍痛なのが特徴である。そして散発的なものであるため、本人は大したことがないと思い込みやすい。

治療法は脚を長期間休めることであるが、今回は早期発見だったため、それほど重篤

ではない。
それでも、皐月賞は回避することになった。無理をすれば出られなくはないが、仕上がってもいない中途半端な状態でテイオーと戦うのは、相手にとっても失礼であろう。
「逆に考えよう。ダービー前でなくて良かったと、そう考えるんだ」
「……うん。そうだね。ふさぎ込んでても仕方ないし。ダービーでは絶対テイオーに勝つ！」
新たに決意を表明し、ネイチャは拳を握った。

◇

ネイチャはしばらくの休養を挟んだ後、水泳やウッドチップコースでのランニングなどの、負荷の少ないトレーニングを開始した。
トレーニング後は入念なストレッチをし、アイシングやアイスマッサージも行った。
次第にネイチャの動きも良くなっていき、ダービーのトライアルレースである青葉賞への出走を決めた。

そこで弾みをつける予定であったが、ネイチャは直線で伸びきれずに2着で終わった。

また優勝したリオナタールの勝ち方が印象的だった。出遅れのため4コーナーまでほぼ最後方だったが、そこから強烈な末脚を爆発させ、一気に差し切って1着となった。ネイチャの得意である末脚を抑え込んでの1着だ。リオナタールは一躍注目の的となり、テイオーの対抗ウマ娘に躍り出ることになった。

「痛みが出たか?」

「そんなことは……ないはずだけど」

なら精神的なものか、と西条は胸中で独りごちた。

肉体的な怪我と違い、精神的な怪我はケアが難しい。扱いを間違えれば、ネイチャはこのまま勝ちきれないウマ娘になってしまう可能性があった。

それからしばらくは、ごくごく平凡なトレーニングを行った。

読みの深さや判断力などを伴うレース勘は向上しているように思える。だがそれは逆に言えば神経が過敏になっているのではないかと西条を不安にさせた。

(怪我は間違いなく治っている。医師も太鼓判を押した。だとすれば、やはり精神的なものか)

フロイト曰く、心とは3つの領域から作られている。

すなわち自我（エゴ）、超自我（スーパーエゴ）、第３者（イド）。今回の問題はイドに関係する。
イドとは心の中にありながら、自分の思い通りにならない存在、意志によるコントロールができない心の領域である。
（意志によるコントロールができない、か……厄介な問題を抱えてしまったな）
スピカのメンバーや、オグリキャップらの協力で、何度か模擬レースを走らせてみたが、やはり伸びが足りないと判断できた。
気づけばダービーは目前まで迫っていた。

◇

「今日は特別なトレーニングを行う」
トレーナー室の裏手に設置された、膝の高さほどの二つの台座。その間には二振りの日本刀が、橋のように架けられていた。
「これを素足で渡ってもらう」
「す、素足で……？」

真意を測りかねたネイチャは思わず西条と日本刀を視線で往復させた。
「まずはお手本を見せよう」
そう言って西条は台座に上がると、躊躇なく一歩目を踏み出した。
「――ちょっ!?」
咄嗟にネイチャが悲鳴を上げるが、西条は片手を上げてそれを制止した。
「刀は引かなければ斬れない。乗っただけでは斬れないんだ」
西条は二歩目を踏み出した。完全に刃の上に体重がかかっているが、西条は平然としている。
そのまま横断歩道でも渡るように、西条は白刃の橋を渡り切った。血は一滴も流れていない。
「これは覚悟を問うトレーニングだ。怪我のことなど些細な問題にすぎない。キミは今、自分が信じられなくなっている」
「それが……これで治るっていうの?」
「……正直、効果があるかどうかは分からない。だから、キミはこのトレーニングを拒否しても構わない」
西条は敢えて突き放すような物言いをした。ネイチャは一瞬当惑したものの、無言で台座に上がった。

一歩目を踏み出すまでにはかなりの時間がかかったが、西条は黙したままじっと待った。

ネイチャがゆっくりと一歩目の脚に体重を移していく。これまでのトレーニングで硬くなった足裏の皮は、白刃に晒されてもなお裂ける様子はなかった。

そこからさらに幾ばくかの時間が経った。未だ二歩目は踏み出されない。ネイチャは幻視していたのだ。足を滑らせて、血に塗れる自分の姿を。

額に冷たい汗が流れた。

「そんな未来はこない。雑念を捨てろ。意識を集中しろ。自分の身体を意識の支配下に置くんだ。自分を信じろ。キミなら必ず渡りきれる」

西条とて必死だった。ネイチャが少しでもバランスを崩した瞬間に飛び出せる用意をしている。ネイチャの一挙手一投足に気を配っていたのだ。

ネイチャは意を決して二歩目を踏み出した。後はもう勢いだった。この寒気のする地獄から逃れようと、ネイチャは一気に白刃の橋を渡りきった。

「……はぁ……はぁ……渡ったよ……トレーナーさん」

「ああ、よくやった。頑張ったな、ネイチャ」

ネイチャは腰が抜けたように、西条に身体を預けた。西条はネイチャを優しく受け止め、その努力を称賛した。

「キミは今、自分の身体を１００％制御したんだ。もうキミを妨げるものは何もない。胸を張って、テイオーの前に立つといい」

ネイチャは薄く笑って、意識を手放した。

第11話　日本ダービー（前）

西条は子供の頃からコツを掴むのが上手かった。全体の中から要点だけを見つけたり、逆に歪（いびつ）なところを見つけることが得意だった。

何をやっても人より上達が早く、そしてある一定のライン以上には達することが出来なかった。それは超一流の選手だけが持つ、言葉では言い表せない感覚的なものを西条は体得できなかったからだ。

様々なスポーツや格闘技に手を出し、見切りをつけていった。自然と西条の興味は学問へと移る。

学問であれば、すべてが言葉で説明できる。感覚的なものは必要ない。

と思っていたが、ここでも生来の飽き性が災いした。どの分野も長続きせず、ある部分まで知ってしまうと他へと興味が移ってしまう。その繰り返しだった。次第に西条はすべてのことに対して冷めていった。

転機が訪れたのは高校生の頃、友人に誘われてトウインクル・シリーズを見に行ったことで西条の人生は変わった。

西条とて国民的スポーツエンターテインメントであるトウインクル・シリーズは知っ

ている。テレビで大レースが中継されていれば、そのまま眺めるくらいの興味はあった。だがレース場に足を運ぶのは初めてのことだった。

そこはある種、日常とはかけ離れた場所だった。

熱気と熱狂に支配された空間。人々の手にはそれぞれが贔屓にしているウマ娘のファングッズが握られている。西条には贔屓のウマ娘などいなかったが、それでも引き込まれるようにレースに魅入った。

まだそういった知識に疎かった西条にはレースの駆け引きなどは理解できなかったが、最後の直線、ほんの数メートル先でウマ娘たちが懸命になって駆け抜ける姿には胸が熱くなった。

これほどの興奮を覚えたのはいつぶりだろうか。子供の頃、自分の特性に気づいていなかった頃に、サッカーの試合で初めてシュートを決めた時以来だった。それほど記憶を遡らなければならなかった。

人間と同じような容姿でありながら、人間には不可能な速度で走る。それも、ただ走っているのではない。彼女たちはただひたすらに勝利だけを目指して走っていた。

画面越しでは伝わってこなかった熱が、肌を突き抜けてくる。彼女たちのその姿が、西条には光り輝いて見えた。

胸の高鳴りを抑えきれなかった。達観したような自分の考えがひどく枯れたものだ

と思った。自分の存在がひどく矮小に思えた。
色を失いかけていた自分の世界に、少しだけ色彩が戻った。
この瞬間に、西条の進路は決まった。

◇

彼女と出会ったのは、トレセン学園の風習や環境にも慣れ始めた、２度目の選抜レースだった。
ゴール付近では、たったいま行われたレースで１着を取ったウマ娘にトレーナーたちが群がっている。
（確かに凄いウマ娘だ。だがフォームの改善には時間がかかるだろうな）
西条は一目でそのウマ娘の歪みに気づいた。
（全身がバネのような柔軟な筋肉。それに加えて、膝と足首の柔らかさがあの速さを生み出している。あれは天与のものだろう。そして、才能に頼った走り方だ。それが速さと同時に歪みをも生み出している。まあ、あれほど分かりやすい歪みなら、他のトレー

ナーも気づくだろう。それよりも……）

西条はすぐに思考を切り替え、自分を選ぶはずのないウマ娘のことは頭の隅に押しやった。

（2着の子も悪くなかったが、伸びしろは3着の子の方がありそうだ。あの末脚はじっくり育てれば十分武器になる）

西条は手元の資料に視線を落とし、そのウマ娘の名前を確認する。

（名前もいい。俺が欲しいのは帝王より素質だ。彼女ならＧＩレースだって……いや、ダービーだって視野に入るぞ！）

西条は意気揚々と、コースから立ち去ろうとしているウマ娘の背中を追いかけた。

◇

「――さん！　トレーナーさん！」

「……ああ、すまない。少し昔を思い出していた」

今日は日本ダービーの当日。その控え室で、西条とネイチャは最後のブリーフィング

を行っていた。

「昔のこと？　それって選抜レースの頃？　それとももっと昔の、トレーナーさんの子供時代とか？　ちょっと興味あるかも」

「どこにでもいるこまっしゃくれた子供だったよ。それよりも、指示はちゃんと覚えてるね？」

西条に問われて、ネイチャはにっこり笑って人差し指をピンと立てた。

「１つ、テイオーより前でレースをすること」

「うん。これは問題ないだろう。大波乱でも起こらなければ、テイオーは後方に構えるしかない。ネイチャはその位置をキープしていればいい」

テイオーの枠順は最大外の８枠１８番。対してネイチャは２枠３番という好位置からスタートできる。レースが自然に流れて行けば、ネイチャは前目の位置を取れるだろう。

運はネイチャに向いている。だが運だけで勝てるほど甘い相手ではない。

続けてネイチャが中指を立て、ピースサインを作る。

「２つ、テイオーに合わせてスパートをかけること」

「これは、かなり難しいだろう。後方を視ながら走るのは高い技術と繊細な感覚が必要だからね。だが同じタイミングでスパートすれば、前にいるネイチャが勝つのは道理

だ。その末脚は、テイオーにだって負けてないよ」
「ん～、たぶん大丈夫だと思いますよ。テイオーのリズムは何度も聞いてるし。と言ったところで、本番で一緒に走ったことはないんですけどね～」
ネイチャがにへらっと笑う。過度な緊張はないようで西条は少し安心した。
「あの日、あの選抜レースでキミを見た時、僕にはテイオーよりもキミの方か光って見えたんだ。本当だよ。あの時、僕は心の底からワクワクしたんだ。だから今度は――」
そこで一度呼吸を整えて、西条はネイチャの目を真っ直ぐに見据えた。
「俺をドキドキさせてくれ」
日本ダービーが、始まる。

第１２話　日本ダービー（後）

――俺をドキドキさせてくれ

ゲート前、つい先ほど控え室で言われた言葉を、ネイチャは心の中で反芻した。

（あたしをドキドキさせてどうすんだっての！）

身体の熱さを振り切るように、ネイチャは両の手のひらで頬をパンパンと叩いた。

「おっ、気合入ってるね、ネイチャ」

「……テイオー、知ってる？　ダービーを８枠から勝ったウマ娘はいないんだって」

「およよ？　揺さぶりかなぁ～。でもワガハイは逆に闘志が出るタイプなのだ。勝つのはボクだよ」

「ふふっ、そういやあんたはそういうやつだったわよね。でもね、勝つのはあたしだから」

「じゃあ勝負だね！」

テイオーはビッと親指を立てて、自分のゲートへと歩いていった。ネイチャもテイオーとは反対の、内側のゲートへと歩いていく。

レース前ともなれば、少なくないプレッシャーに晒されるものだが、今のネイチャは

背中に翼が生えたのではないかと思えるくらい、身体の軽さを実感していた。
いつもならば繰り返し口にしていた呪文すらも、思考の外に押し出されている。
ありていに言えば、今のネイチャはかつないほどに”絶好調”だった。

『――さぁ、最後のトウカイテイオーが、毅然とした表情でゲートに入ります。無敗の三冠ウマ娘が期待されているトウカイテイオー、皐月賞に続きこの二冠目のレースを制することができるのか?』
スポーツ紙はこぞってトウカイテイオーが日本ダービーを勝つことが既成事実のように報じた。そしてスタンドを満たしている観客の多くがそれを期待しているだろうことは、ネイチャも分かっている。
(残念ながら皆さんの期待通りにはならないかも、ですよ)
スタート前の静寂が訪れる。荘厳で静謐な空気が満たされていく。
『栄光の日本ダービーが――今スタートしました! 各ウマ娘がすーっと内に切り込んで第1コーナーに向かいます。トウカイテイオーは7番、いや8番手。外目8番手で第1コーナーにかかります』
(テイオーのスタートがいい! 早めに前に来てる。でも引くわけにはいかない!)
『第1コーナーを回って先頭はビフォーユウ、続いてフォレストケート、3番手にナイス

ネイチャ、トウカイテイオーは現在６番手。第２コーナーを回って向こう正面に入ります』

（大勢は落ち着いてきた。ここでの動きはあまりないはず。ペースはそこまで速くない。みんな内を走るから、たぶんテイオーは外を走らされている。今のところ想定通り）

ネイチャの想像通り、テイオーは外を走らされていた。それでもテイオーの表情には余裕がある。

『向こう正面から第３コーナーへ、外からトウカイテイオーが上がってきているぞ。リオナタールも虎視眈々と機を窺っている。第４コーナーを回ってシガーブレイドが内に入ってくる。トウカイテイオーが良い位置にいる。現在５番手！』

最終コーナーを抜けて最後の直線に入り、歓声がいっそう強くなった。それぞれのファンが贔屓のウマ娘の名前を叫んでいるのだ。その中に自分の名前があることが、いま間違いなくダービーを走っているのだということを強く実感させた。

この怒号のような大歓声の中から、ひとりの声を聞き分けるのは不可能だろう。だがネイチャの耳にははっきりとその声がとどいた。

彼はこれまで「頑張れ」と言ったことはなかった。「頑張ったな」と言われたことはあったが、「頑張れ」と言われたことはなかったのだ。

だからこそネイチャは心を震わせた。
（あたしはまだ――頑張れるッ！）
そう決意した瞬間、不思議な感覚がネイチャを包み込んだ。視界がひらけ、意識が拡がっていく。ネイチャは生まれて初めて、見えないものが見えた気がした。
（なんだろう……この感じ。２０００メートル走った後とは思えないくらい、脚が軽い。身体が今までにないくらい、最高にキレてる。先頭との差は5バ身……追いつける。追い抜ける）
『最後の直線残り４００メートル！　先頭はビフォーユウ！　5バ身離れて内からリオナタール、ナイスネイチャ、グッドジュピターがほぼ横並び！　ナイスネイチャだ！　ナイスネイチャが伸びる！　ビフォーユウを捉えた！　並ぶ間もなくビフォーユウをかわす！　先頭はナイスネイチャ！』
（テイオーが来てる。4バ身……3バ身……どんどん迫ってくる。さすがテイオーね。でも大丈夫。頭ひとつ分、とどかない）
『トウカイテイオーが来た！　トウカイテイオーが真ん中から突っ込んで来た！　ビフォーユウをかわしてナイスネイチャに迫る！　逃げ切れるかナイスネイチャ！　追いつけるかトウカイテイオー！　ナイスネイチャ！　トウカイテイオー！　ナイスネイチャ！　トウカイテイオー！　トウカイテイオーわずかにとどかない！　ナイスネ

イチャが1着でゴーーール！　栄光のダービーを制したのはナイスネイチャ！　ナイスネイチャ優勝です！』

激闘が終わり、ターフに紙吹雪が舞う。ネイチャはまずゴール近くの関係者ゾーンにいる西条に手を振り、続けてスタンドのファンに手を振った。テイオーファンを裏切った結果になってしまったが、予想よりも拍手は多かった。

「ネイチャ……ダービー優勝、おめでとう」

テイオーは強く握った拳を後ろに隠して、ネイチャに祝福の言葉を贈った。

「ありがとう。でもね、テイオーのおかげだよ。いつも天才がそばにいたから、あたしはいつだって必死になれた。あんたがずっと走り続けてくれたから、あたしも止まらないでここまでこれた。だから、ありがとう。テイオー」

感極まって、ネイチャはテイオーを抱きしめた。テイオーもまた、その抱擁に応えて力を込めた。

「今日は負けを認めてあげる。でも、まだ一冠ずつで引き分けだから。無敗も三冠もなくなっちゃったけど、菊花賞はボクが勝つからね。にししっ」

「それはどうかな～。菊花賞もあたしが取って二冠のウマ娘になっちゃうんだから」

お互いに睨み合い、破顔した。そして――

『次は菊花賞で――勝負だッ!!』

――天高く腕を掲げ、その拳をぶつけ合った。

第１３話　菊花散る

ナイスネイチャが日本ダービーで優勝してから約５ヵ月後。クラシック最終戦の菊花賞が開催された。

１番人気はトウカイテイオー。ダービーでは２着に敗れたものの、僅差の敗北であり、皐月賞ウマ娘である。今度こそはと思うファンが多いのだろう。

２番人気はナイスネイチャ。ダービーに続いて２冠目を期待されている。

２強対決とも言われたが、結果はトウカイテイオーの圧勝であった。ダービーの熱戦が夢だったかのように、ネイチャは最後の直線でも伸びを欠いて、終始テイオーを捉えることはできなかった。

「あの感覚に頼ろうとしたな？」

「……」

ネイチャは答えなかった。だがその沈黙が答えだった。

「あれは、入ろうと思って入れるものじゃない。むしろ入ろうと思えば思うほど入れなくなる。偶発的に入る１回目と違ってね。だから、ダービーのことは忘れろと言ったはずだ」

「――――っ」

ネイチャは何かを反駁(はんばく)しかけて、しかし何も言えなかった。

（やはりこの子は、精神的に脆いところがあるな）

それは言葉にはせずに、西条は優しくネイチャの髪を撫でた。

◇

翌週、テイオーは菊花賞からの連闘で秋の天皇賞に出走した。

「東条トレーナーはよくこんな無茶なローテーションを許したな」

「マックイーンとの対決だからね。テイオーのやる気を尊重したんでしょ」

「焦らなくてもジャパンカップも有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念もあるのにな」

西条はそう言ったが、テイオーが好調であることと、この夏に大きく成長したことも無関係ではないと思っていた。

ウマ娘の成長曲線はなだらかに上昇するパターンばかりではない。ある日突然、何か

に目覚めたように急成長する場合もある。
いわゆる『本格化』である。
（悔しいが、菊花賞では大した疲労もなかったということだろう）
西条は小さく臍を噛んだ。改めて、敵（ライバル）の大きさを知る。
（とはいえ、ＧＩレースの連闘はな……どうかと思うが）
疲労は少なかったとはいえ、テイオーはそこまで頑丈なウマ娘ではない。ネイチャの手前言葉にはしなかったが、西条ははっきりとこれはクソローテだと思っていた。例えるなら偉大な三冠ウマ娘に超長距離ＧＩを走らせ、間を置かず短距離ＧＩに出走させるような。
そこまで酷くないにしても、もし新人トレーナー（自分）がこれを敢行すれば非難轟々であろう。場合によっては理事長あたりが「狂気ッ！　気でも狂ったのかーーッ!?」と怒鳴り込んでくるレベルの采配である。
このレースでテイオーが惨敗するようなことがあれば、東条ハナはマスコミから吊し上げを食らうだろう。その程度が予想できないとも思えない。
西条は東条ハナを尊敬しているし、トレーナーとしての手腕は天と地ほどの差があると思っている。それを埋めようと必死で努力しているわけだが、経験という差はそう簡単に埋まるものではない。

（よほどの勝算があるのか。それとも距離的な不安のためか）

俗に秋シニア三冠と呼ばれるレース。マックイーンはすべて出走してくるだろう。とはいえ、天性の長距離走者（ステイヤー）であるマックイーンが相手では距離が延びれば延びるほどテイオーは分が悪くなる。

それ故の判断かもしれない。

西条とネイチャはスタンドの後方からターフを眺めている。東京レース場は朝からの激しい雨でバ場は荒れに荒れていた。

この不良バ場ではスピードがウリのテイオーはやや不利。しかし距離は２０００メートルとテイオーの得意距離だ。

東京芝２０００メートルはスタートしてからすぐにコーナーへ入るため、枠が外になればなるほど不利になる。マックイーンは１８人中１３番。大外ではないが、なかなかに不利な番号である。

対してテイオーは最も有利な１枠１番。それでも１番人気を譲ったのは、やはり春秋連覇という記録がかかっているからだろうか。

『注目は春秋連覇のかかったメジロマックイーン、そして今年の二冠ウマ娘のトウカイテイオーでしょう。さあ、ゲート入りが完了し、秋の天皇賞レース、今スタートしまし

た』

　スタートは綺麗な横一線。わずかにマックイーンが遅れたが、微差の範囲だ。

『2コーナーまでの先陣争いですが、外からメジロマックイーンが行った！　外からメジロマックイーンが一気に来た！』

　アナウンサーが興奮気味に捲し立てる。だが西条はスタート直後の攻防に眉根を寄せた。

「……今の、おかしくなかったか？」

「え？　どこ？」

「いや、遠目だったしな。見間違いかもしれん」

　西条はそう言ったが、掲示板には審議の青いランプが灯っていた。しかしそれでもレースは続く。

『先頭はプリクラースナ、2番手にヴァイスストーン、メジロマックイーンは3番手に落ち着きました。それを見るようにしてトウカイテイオーが続きます』

先頭（ハナ）を取ったプリクラースナが軽快に走る。かかっている様子はない。だがそれでも彼女の表情には焦りが見えていた。

『最終コーナーを回って最後の直線に入ります。先頭は依然としてプリクラースナ。2バ身離れてメジロマックイーン。さらに2バ身離れてトウカイテイオーが迫ります！』

プリクラースナも懸命に走ってはいるが、相手が悪かったとしか言えないだろう。内から来たメジロマックイーンに抜かれ、外から来たトウカイテイオーにも、並ぶ間もなく抜かされた。

（ここで……踏み込むのか！）

西条はテイオーの変化に目を見張った。菊花賞で兆しを見せていたとはいえ、次走で踏み込んでくるとは予想だにしていなかった。

（ネイチャが再現に四苦八苦しているというのに、テイオーはすでに要諦を掴みかけている）

ダービーでネイチャが”入った”ことに触発されたのだ。テイオーはすぐ間近で視ていたのだから、何かを感じ取っていても不思議はない。

（トウカイテイオー……やはり天才か）

テイオーの天才性の根幹をなすものは、身体的な性能もさることながら、その直観力にある。

シンボリルドルフが理性と威圧でレースを支配するのなら、テイオーは共感と直観によってレースを看破する。

シンボリルドルフがその威圧によって他者を畏怖（デバフ）させるのに対し、テイオーは他者の思惑を直観で読み取り、かわすことで己を鼓舞（バフ）する。

似て非なるもの。テイオーは皇帝とは別ベクトルの天才性を有していた。

『メジロマックイーンが先頭！　残り１００メートル！　しかし後ろからトウカイテイオーが来ている。トウカイテイオーが伸びる！　マックイーン粘れるか！　テイオーが来た！　テイオーが来た！　テイオーが今、マックイーンをかわしてゴーーールイン！』

最後の１００メートル、さらに加速したテイオーは計ったようにゴール直前でマックイーンをかわして優勝した。

これでテイオーは４つ目のＧＩ制覇。シンボリルドルフに並ぶ七冠が現実味を帯びてきた。

しかしスタンドがざわめいている理由は、それだけではなかった。

電光掲示板に灯る着順判定が、いつまでたっても確定にならない。

そして、電光掲示板からマックイーン[13番]の番号が消えた。

「え？　え？　これってどういうこと？」

「……え？」

わけもわからず困惑するテイオー。同じくわけもわからず混乱するマックイーン。

ざわめきが治まらない中で、アナウンスとともに中央のモニターにパトロールＶＴＲが流された。それは衝撃的な映像だった。

スタート直後のマックイーンが外枠ロスを抑えるために、内側に切れ込むようにして斜行、他のウマ娘たちを妨害していた。特に妨害の影響が大きかったハニーフィッツは転倒寸前で、一歩間違えば大惨事であった。

意図したことではなかったのだろう。その映像を見たマックイーンの顔色は血の気が引き、蒼白となっていた。

「――ちょっ!?　マックイーン大丈夫!?　マックイーンってばぁ!?」

事実を受け止め切れなかったマックイーンの脳はパンクし、倒れるように失神した。

第１４話　いざ福島

『波乱の天皇賞！』
『異例のウイニングライブ中止！』
『なんとびっくりマックイーン!?　まさかまさかの大降着!!』
などと、新聞各紙は好き勝手に書き並べた。
秋の天皇賞で走行妨害（斜行）を行ったマックイーンの処分は、罰金と6ヵ月間の出走停止だった。
これに対してマックイーン及びメジロ家からの異議申し立てはなく、むしろ「公正な判断に感謝します」とメジロ家当主は言ったそうだ。
レース後、マックイーンは出走した全てのウマ娘に謝罪して回った。特に斜行によって大きな影響を与え、最下位となったハニーフィッツには優勝賞金と同等の金額を賠償金として支払うと言ったが、ハニーフィッツはこれを拒否した。
「彼女にもプライドがある。正直あのメンバーでは、優勝は難しかっただろうしな」
「そうね。あたしが彼女の立場でも、受け取らないでしょうね」
西条の言葉に、ネイチャは静かに同意した。

「思えば、マックイーンはレース前からかかっていたのかもしれないな。春秋連覇（1番人気）の期待。ライバル（テイオー）との対決。あと1秒、内に寄るのを我慢していたら斜行にはならなかったかもしれない。焦っていたんだな」

「その気持ち、少し分かるかも」

ネイチャもテイオーとの対決は気分が高揚した。ダービーの時はそれが良い方に作用し、菊花賞の時は悪い方に作用した。

「マックイーンは元気でやってるのかな？　テイオーもあんなんなっちゃったし」

「大丈夫だろう。テイオーも大した怪我じゃなさそうだ」

マックイーンは本家から自宅謹慎を命じられた。テイオーも、あのレースの影響で集中力を欠いたのか、練習中に足首を捻挫して年内一杯の休養を発表している。

「それよりも、自分のことだろ？　とりあえず調子を戻そう。いまレース勘が少し狂ってるだろうからな。気分を変えて福島あたりに行ってみるか？」

「あいあい。りょ～かいです。んじゃまあ、頑張りますか！」

ネイチャは軽く伸びをして、気合を入れなおした。

◇

１１月中旬に開催される福島記念は、名前の通り福島レース場で開催される。ネイチャは西条の運転する車の助手席に座り、コースの最終確認を行っていた。

「コース全体の高低差は１．９メートルか。スタミナ配分には注意しないとね」

「特に注意するのは、ラジオＮＩＫＫＥＩ賞で逃げ切り優勝したツインターボだな。福島の走り方を知っているだろう。たしか前走のセントライト記念でも２着だったはずだ。逃げにつられないようにな」

「ああ、うん。あの子ね」

「知ってるのか？」

「クラスメイトなのよ」

ネイチャは何とも微妙な表情で返事を返す。ツインターボは後先考えない大逃げのレースを繰り返してきており、それによってファンもつき始めている。だが相手にするには面倒なウマ娘だった。

ハイペースだと思って油断したらそのまま残って優勝したり、逃がすまいとついていったら途中で逆噴射（パテ）して諸共に撃沈したりと、見る分には面白いレースなのだが、一緒に走るとなれば警戒するに足るウマ娘だった。

ネイチャがそういった総評を口にすると、西条は小さく笑った。
「なかなか面白そうなウマ娘だな。まあ、自分のペースを守って走れば勝てない相手じゃない」
そんな、世間話ともブリーフィングともとれない会話を続けながら、気づけば福島レース場は目の前に迫っていた。

『本日はあいにくの曇り模様ですが、バ場状態は良との発表です。各ウマ娘ゲート入りが完了したようです。さあ福島記念GⅢ、今スタートしました。1コーナーまでの500メートル、先頭争いですが、やはり飛び出してきたツインターボ。抜群のスタートでぐんぐん逃げる。メインスタンド前を軽やかに疾走していきます』
(やっぱ加速力は凄いなぁ、GⅠ並みだよ)
逃げはスタートが命だ。出遅れは逃げウマ娘にとって致命的なダメージになってしまう。ツインターボはきっちりと綺麗なスタートを決めてきた。
それを追って何人かのウマ娘が前へと出る。ネイチャは中団あたりに付けていたが、1コーナーを曲がって考え始めた。
(思っていたほど早いペースじゃない？　ターボのやつ調子悪いのかな。抑えるような性格でもないしな～)

『さあ１０００メートルを通過してタイムは５９秒２。隊列は縦長になっています。先頭はツインターボ。ツインターボが逃げて向こう正面を通過。３コーナーにかかります』

その間にもネイチャはスルスルと位置を上げていた。ペースを上げたわけではない。無理に先行していたウマ娘が落ちてきたのだ。

（肩が落ちた。こっちに来るから、あたしはこう！　うん、見えてきた見えてきた）

西条に言われた通り、自分のペースを保ちながら、他のウマ娘を観察する。今回のネイチャは良く見えていた。やはりＧＩレースに出走するウマ娘と比べれば、幾分か分かりやすい動きだ。

『最終コーナーを回ってツインターボが先頭で最後の直線に入ります。このまま逃げ切るかツインターボ！』

（そうはいかない、よっと！）

『１番人気のダービーウマ娘ナイスネイチャが２番手で直線に入ります。残り２００メートル余り。逃げるツインターボ！　追うナイスネイチャ！　ナイスネイチャ凄い末脚だ。ツインターボを見事差し切ってゴールイン！』

ゴールしたネイチャがスタンドに向かって手を振る。その後ろからツインターボが話しかけてきた。

「ぜぇ……はぁ……さすがネイチャ。ターボのライバルなだけはあるな」
「あははは、ありがと。てか大丈夫？」
「大丈夫！　次はターボが勝つからな！　次は……えっと、有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念で勝～～～つ！」
「……そうね。じゃあ、有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念で勝負だ！　ターボ！」
「おっしゃ～！　顔を洗って待ってろよ～！」
そう言ってツインターボは駆けて行った。
「顔じゃなくて首でしょ。相変わらずしまらないなぁ。でも有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念か。選ばれるかなぁ、あたし」
今回のレース、マークはそれほどキツくなかった。自分がフロック（まぐれ）でダービーを勝ったと噂されていることは、無関係ではないだろう。言っているのは一部のマスコミと過激なテイオーファンだけだということも知ってはいる。
それでも、全く気にしないでいられるほど、ネイチャの精神（こころ）は強くなかった。
（勝ち続けないとなぁ。みんなを納得させられるくらいに）
勝ちたいという気持ちが強くなっていく。
次のレースは、有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念。

第１５話　メジロの貴婦人

風が吹いた。その涼風が艶やかな葦毛の髪を撫でつける。

メジロ家の別荘で謹慎していたマックイーンは、屋敷からしばらく歩いたところにあるトレーニングコースを走っていた。

身体を動かしていないと不安ばかりが募ってくるのだ。

自分は許されないことをした。故意かそうでないかは問題ではない。結局、謹慎を選んだのも学園という衆目の下から逃げ出したに過ぎない。

立ち止まり、空を見上げる。自分の心を映し出したような曇天だった。ため息を落とし、その後に大きく深呼吸をする。

再度走り出そうとしたとき、横手から涼やかな声が聞こえてきた。

「あまり無理をするものじゃない」

聞こえてきた方向に視線を向ける。瞳に飛び込んできたのは意外なウマ娘だった。長い黒髪を風にさらわれて、宝玉のような眼差しでこちらを見据えている従姉が、そこにいた。知らずのうちに、マックイーンの表情が緩んでいく。

「随分と、久しぶりですこと」

「今日は調子が良くてね、ここまで足を延ばしてみたんだ」
それが優しい嘘であることは、すぐに気づいた。彼女はコース脇にあるベンチに腰掛けると、自分の隣をポンポンと叩いた。
座れということだろう。マックイーンはおとなしく彼女の指示に従った。
「お戻りになる決心がつきましたの？」
「またそれかい？　言っただろう。私は実績が足りていないのだと」
「何をおっしゃいますの。お姉さまはパーフェクトティアラを……」
「勝ってない」
マックイーンの言葉を遮って、彼女は告げた。
「私は天皇賞を勝っていない。挑んですらいない。だからお婆さまが何と言おうと、私自身が納得できないのさ」
メジロ家において天皇賞の楯は特別な意味を持つ。それはメジロ家の悲願であり宿願であり、冀望なのだ。故に、その屋敷に住まうことを許されるのは、結果を出した者と、挑戦者に限られる。
その因習に彼女も影響を受けている。確かにかつてのメジロ家は陛下から寵愛を受けていた。だが今ではそれも薄らいでいる。形骸化しているとまでは言わないが、ＵＲＡが組織立って大きくなったことで、メジロ家の影響も小さくなってきたのだ。

秋の天皇賞の距離が短縮されたことも、それを物語っている。

「まあ、私のことはいいさ。調子は……悪くはなさそうだね」

マックイーンのトモに触れながら、小さくつぶやく。元より怪我で休養しているわけではない。とはいえ、精神的な問題から体調を崩すことはままあることだ。彼女が心配しているのはそこもあるだろう。

正直、最初の頃はマックイーンも参っていた。

もし自分が勝っていたら、どうなっていただろうか。そう考えてしまう。テイオーならば、まだいい。何度もＧＩレースを勝っている彼女なら、その中に不本意な勝利がひとつ追加されるだけだ。十年後には、笑い話になっているかもしれない。

だがもし、もしＧＩ未勝利のウマ娘が繰り上げ優勝という事態になっていたら。そう考えて、マックイーンは身体を震わせた。

初めてのＧＩ勝利というのは感慨深いものだ。自分も当時のことを鮮明に覚えている。抑えきれぬ高揚感と達成感。レース内容はもちろん、その後に行われたウイニングライブの細部に至るまではっきりと。

それが汚されるのだ。

敗北が勝利に書き換えられる。納得のできない勝利。それは祝福ではなく呪いだ。そんな悪夢を想起し、マックイーンは己の脚を殴りつけたい衝動に駆られた。

その変化を敏感に感じ取ったのか、マックイーンの手に嫋やかな手が重ねられた。
「キミは罰を受けた。それですべてが許されるわけではないが、必要以上に自分を責めるべきではないと私は思うよ。生真面目なキミは引退も考えたかもしれないが、それは違う。キミが成すべきことは、勝つことだよ」
「勝つこと……ですか？」
「そうだ。あんなことがなくても、不利を受けなくても、勝てなかった。そう納得させることだ。だからキミは勝ち続けなければならない」
「勝ち続ける……」
それがどんなに困難で過酷なことか、彼女が知らないはずはない。
「そのためには、とらわれてはいけない」
昔を思い出したのだろうか。いつも整って崩れることのない表情が、わずかに揺らいだ。
「キミは先のレースで、トウカイテイオーにとらわれたな。故に冷静な判断ができなくなった。本来ならするはずのないミスを犯してしまった」
その通りだった。マックイーンはスタート前からテイオーを意識しており、それにとらわれて、ほんのわずかにスタートが遅れた。その一瞬を取り返そうと、無理な進路変更を余儀なくされた。それが故意ではなかったとしても、自らの焦りが生んだ悲劇だっ

た。

「ライバルは、いいものよ。自分を更なる高みへと導いてくれる。でもとらわれてはダメ。自分を見失ってしまう」

彼女の言葉はいちいちもっともで、マックイーンの心に突き刺さった。それでも苦痛を感じないのは、彼女の言葉にトゲがないからであろう。むしろ慈愛にあふれているようにすら感じる。それは彼女の人柄によるものに違いない。

その吸い込まれそうな瞳に、マックイーンはしばし魅入っていた。

それに気づかれまいと、マックイーンは小さく咳払いした。

「以前にお会いした頃に比べて、お言葉が乱れてますわね」

「本家から離れればこうもなるさ。生来の性分だよ、たぶんね」

彼女は自嘲するように小さく笑った。それでもマックイーンは彼女の評価をいささかも下げようとは思わなかった。

強く気高く美しく。

嫉妬すら追いつかない、憧れすら届かない。見る者すべてを魅了するほどの魔性。

幼き頃に目指した、遥かなる頂き。

雲間から差し込んだ天使のはしごがふたりを優しく包み込む。濡羽色の長髪が、宝石をちりばめた額冠のように輝いていた。

心の中にあったモヤモヤが晴れていくのを感じて、マックイーンは立ち上がった。
復帰戦は、連覇のかかった春の天皇賞。メジロ家の本命レース。それに勝つ。
ただ勝つのではない。圧勝する。そんな決意を秘めて、マックイーンは駆け出した。

第１６話　ネイチャと皇帝

ネイチャは日本ダービーで体験した不思議な感覚を忘れられずにいた。それにこだわりすぎて菊花賞では不覚を取った。自分でも知らずのうちにあてにしていたのだろう。それが致命の隙となって負けた。

トレーナーである西条はダービーのことは忘れろと言った。西条はその感覚について心当たりはあったが、今のネイチャには足かせにしかならないと判断した。

だがネイチャは諦めきれなかった。いつまでもモヤモヤとした気持ちが残り、ついにはその感覚について調査を始めた。

（忘れろと言われた手前、トレーナーさんには相談できないしなぁ）

まずは身近でその感覚を知っていそうなウマ娘、スペシャルウィークに訊いてみた。

「知ってるよ。私もね、ダービーが初めてだったんだ。身体がギャンって熱くなってグワーって力が出て、ギューンって走れたんだよね！」

いまいち要領を得ない回答なうえ、ネイチャが体験したものとは微妙に違う。スペシャルウィークは身体が熱くなったと言ったが、ネイチャはその逆、周囲の温度が下がったような感覚だった。

頭の中がクリアになり、スッと視界が開けた。世界から雑音（ノイズ）が消えて、自分にとって必要な音だけが残る。そんな感じだった。

次にネイチャはオグリキャップに同様の問いを投げかけた。

「うん。その感覚は、私にもある。私は有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念が最初だったな。だがすまない。私には上手く説明できない。だから、あの人に訊ねるといい」

そう促され、ネイチャは荘厳な扉の前に立っていた。

確かに彼女なら、レースのことで知らないことなどないだろう。むしろ、彼女の知らないことを、他のウマ娘が知っているとは思えない。

（でもさすがに緊張するなぁ）

彼女はすべての生徒たちに、悩みがあればいつでも相談してほしい、と広く門戸を開いている。

とはいえ、やはりこの部屋に踏み入るには少しばかり勇気が必要だった。

大きく深呼吸を一回。ネイチャは覚悟を決めて、ノックをしようと右手を胸の高さまで上げた。

と、その時――

「生徒会に何か用かな？」

「はひゃぁ!?」
ネイチャは飛び上がらんばかりに仰天し、声の主に視線を向けた。
そこにはこの部屋の主で、この学園で2番目の、ことによっては最も高い権威を持つウマ娘だった。
絶対の体現者。蓋世不抜のウマ娘。”皇帝”シンボリルドルフ。
「えーっと、その、何と言いますか、ですね」
「ふむ。まあ入り給え。用件は中で聞こう」
そう言って、シンボリルドルフは部屋の扉を開けた。
彼女はネイチャに座るように促すと、手慣れた様子で2人分の紅茶の用意を始めた。片方をネイチャの前に置き、残りを手に持ってネイチャの正面に腰かける。
優雅な仕草で紅茶を一口すると、彼女は問いかけた。
「では、話を聞こうか。ナイスネイチャ」
自分の名前を知られていることは意外ではあったが、皇帝は一度覚えた名前と顔は絶対に忘れない、という噂を思い出した。
（いや、あたしだってダービーウマ娘だし。会長なら知ってるよね）
わずかに矜持を自覚して、ネイチャはシンボリルドルフにあの感覚について問いかけた。それを聞いて、シンボリルドルフは特に困惑した様子もなく、むしろようやくかと

いった感じでネイチャに向ける視線を鋭くした。
「まず最初に言っておくが、あれは限界以上の力を引き出すといったような、そんな都合の良い力ではない」
「精神が肉体を超える的な力だと思ってましたが……」
「ただの言葉遊びだな。かつて大本営が全滅を玉砕と言い換えたように、耳当たりの良い言葉に変換したにすぎない」
シンボリルドルフはバッサリと切り捨てた。その口調から、彼女がその言葉に好意的でないことがうかがい知れた。
「私は好かんよ。その先に待っているのは破滅だ。限界を超えた歪(ひず)みで故障するか、精神(こころ)と肉体(からだ)の折り合いがつかず、コントロールを誤って転倒するか。どちらに転んでも不幸だ」
ウマ娘と故障は切っても切り離せない関係にある。人間のアスリートだって怪我無しで現役を引退できるのは稀だ。
「あの感覚は、もっと現実的なものだよ。理想と現実の合致、とでもいうべきか。ボディイメージという言葉を知っているかな?」
「……いえ、不勉強で申し訳ありません」
「例えば、水たまりがあったとしよう。自分にそれを飛び越えるだけの能力があるか。

脚の長さ、助走の加速力、そこから生まれる跳躍力。そういった自分の身体や運動能力をイメージする力だ。そのイメージと実際の力が一切の乖離なく発揮できる。それがあの感覚だよ。ざっくり言えば『１００％中の１００％』の力を引き出している、ということだな」

スポーツにおいて、よく本番では練習の８０％の力しか発揮できないと言われる。それがスポーツの常だ。普通に考えて、練習でできなかったことがいきなり本番でできるようになることはまずない。

限界以上の力を引き出すのではなく、限界まで力を引き出す。それがあの感覚の正体だと分かった。

「ではあの世界に入るための条件、みたいなものはあるんですか？」

「トレーナーには相談したのかな？」

「……あの感覚は忘れろ、と」

ネイチャはごまかさずにそう言った。元より、下手な嘘やごまかしが通用する相手とも思えなかったし、こちらは教えを乞う立場なのだ。

「その通りだと思うよ。先ほども言ったが、あれは限界以上の力を引き出すものではない。ならば地力を鍛えるのが一番だろう。遠回りこそ近道だよ。これ以上は聞かない方がいい。私とキミ、おそらく条件は違うはずだ。妙な固定観念や先入観を持たせたく

はない。私としては、そんな不確かな力に頼るよりも、常に１００％の地力を出せるように鍛錬することをお勧めするよ」

ネイチャは続けて”音”についても質問した。世界から雑音（ノイズ）が消えて、自分にとって必要な音だけが残る。そんなことがあり得るのか。

シンボリルドルフはそれを、カクテルパーティー効果（意識）の拡張だと答えた。騒音の中でも自分の名前を自然と聞き取れるように、無意識のうちに必要な音とそうでない音を聞き分けていたのだと。

「自分の精神（こころ）と肉体（からだ）を完全に支配する。だがこの感覚に縋（すが）りすぎると、溺れることになる」

「……溺れる？」

「こんなものじゃない、本気じゃなかった、次のレースでは本気を出す、などと言い訳ばかりを並び立てるようになる。敗北を認められなくなれば、それ以上の成長はないよ。努々（ゆめゆめ）忘れぬようにな」

シンボリルドルフの説明は堂に入ったものだった。まるで何度も同じことを繰り返してきたように。

退室するネイチャを見送った後、彼女はソファに背を預けて天井を見上げた。

「ナイスネイチャ、キミはまだ可能性の表層を覗き見ただけにすぎない。真に覚醒する

資質がキミにあるのか。ふふっ、胸が躍る」

後輩の成長に、皇帝は小さく笑みを零した。

紅茶の残りを飲み干し、窓からトレーニングコースを眺める。そこでは多くのウマ娘たちが汗を流してしていた。

いつもの光景。皇帝の好む光景だった。

その端っこの方で、竹刀（しない）を握って対峙している葦毛のウマ娘と男性トレーナーがいた。

「うおおお！　デビルバットゴースト！　からの！　絶・天狼抜刀牙ッ！」

「チィィ！　狼虎滅却・無双天威ッ！」

黄金の斬光と白き剣閃が絡み合う。

皇帝は嘆息して頭を抱えた。

第17話　チーム結成

西条はいま理事長室にいた。この部屋に入るのは2度目である。1度目はトレーナーとして就任した挨拶の時。それ以来、幸か不幸か縁のない部屋であった。

西条の前には二人の女性がいる。このトレセン学園の理事長、秋川やよいとその秘書、駿川たづなだ。

その一人、秋川やよいが《歓喜》と書かれた扇子をバッと広げた。

「まずはおめでとうと言わせてもらおう。最初に担当したウマ娘がダービーを制覇するのは偉業であるッ！」

「ありがとうございます」

西条は慇懃に礼を言った。

「先に行われた有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念も、惜しくはあったが3着は立派な成績だ」

「……どうも」

年末に行われたグランプリレース、ネイチャは問題なく出走ウマ娘に選出された。彼女の自称ライバルであるツインターボは、投票では選ばれなかったものの、ＵＲＡの推

薦を受けて有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念に出走を果たした。
要するに「このメンバーじゃ盛り上がりに欠けるから、得意の大逃げで盛り上げてね」とのことだろう。
（テイオーはともかく、マックイーンを出走停止にしたのはあんたらだろうに）
と西条は心中で吐き捨てた。眼前の女性、秋川やよいはトレセン学園の理事長であると同時に、ＵＲＡの役員でもあるのだ。だが彼女はウマ娘よりの考えであることは西条も承知している。ＵＲＡも一枚岩ではないということだろう。
本命不在と揶揄された有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念を優勝したのは意外なウマ娘だった。
予告通り大逃げしたツインターボだったが、さすがに２５００メートルは長すぎた。最終コーナー手前でスタミナが尽きて失速した。
それをかわして先頭に躍り出たナイスネイチャだったが、まったくマークしていなかったダイサンゲンに差されてしまう。そこでバタついて、追随してきたプリクラースナにも抜かれて３着でゴール。詰めの甘さが露呈したレースでもあった。
「それで、私に何か御用とのことですが？」
「うむッ！　実はキミにチームを結成してほしい」
秋川やよいは扇子をバッと裏返した。そこには《要望》と書かれてある。西条はその

提案に眉根を寄せた。
「チームですか。しかし新人トレーナーはサブか専属でやるのが定例だと伺いましたが？」
「確かにッ！　普通はそうだ。たづなッ！」
「はい。理事長」
傍に控えていた女性秘書、駿川たづなが一歩前に出る。
「西条さんは最初のウマ娘をダービーウマ娘に育てました。それは大変な偉業で、過去に何人もいません。最近だと東条さんくらいです」
「おためごかしは結構です。どこかから圧力があったのでしょう？」
西条がそう言った瞬間、たづなの柳眉がピクリと動いた。やよいに至ってはあからさまにオロオロとしている。
「テイオーの邪魔をした、という不満の声は私も承知しています。厄介な輩をあなた方が弾いてくださっていることも。それについては感謝しております」
テイオーが菊花賞を取ったことが決定的だった。そして有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念を逃したことで、ネイチャの能力、というよりは西条の能力を疑問視する声が上がったのだろう。
つまり、もう何人かウマ娘を担当させてみようという意見が上がった。

「――と愚考しましたが、どうでしょうか？」
「ふぅ。はい、それで合っていますよ」
「た、たづなッ!?」
　あっさりと認めたたづなに対してやよいが驚愕の声を上げる。
「チームを組むのはやぶさかではありません。色々とお世話になっていますからね。しかしいきなり5人というのは勘弁していただきたい」
「はい。それはさすがに考慮しますよ。代わりと言ってはなんですが、彼女のことはご存知でしょうか？」
　たづなはあるウマ娘の資料を西条に手渡した。
「……噂程度には。しかし彼女は引く手あまたと聞いておりますが？」
「はい。ですが折り合いがつかないようです。彼女はクラシック三冠を目指していますが、大方のトレーナーは彼女を短距離走者（スプリンター）だと認識しています。１６００メートル（マイル）が限界であろう、と。事実彼女の母、祖母ともに短距離～マイルで活躍したウマ娘です」
「なるほど。距離の壁ですか」
　距離の壁。ウマ娘としての限界距離。それは遺伝によるものが大きいと考えられている。統計的にもおおよその部分で正しいとの意見もある。
（生まれながらの適正距離か）

西条は以前にネイチャと話した内容を思い出していた。
「無理強いはしません。ですが、面談だけでもお願いできませんか？」
「承知しました。では明日の放課後、彼女にトレーナー室へ来るよう伝えてもらえますか？」
「え、ええ。かしこまりました」
西条があっさりと了承したことで、今度はたづなが慌ててしまった。
「感謝ッ！　いや実はトレセン学園としてもありがたいのだ。トレーナー不足は思いのほか深刻な問題でな。優秀なトレーナーには複数のウマ娘の面倒を見てもらいたいのだ」
「ぶっちゃけましたね」
「信頼の証だと受け取ってほしい」
「まだ彼女を引き受けるとは言ってませんよ？」
「いやッ！　キミならば必ず彼女を三冠ウマ娘に導いてくれるだろう。そう確信しているッ！」
「……期待に応えられるように、微力を尽くします」
西条は小さくため息を落として、部屋を後にした。

◇

「――というわけで、チームを結成することになった」
「チームかぁ。トレーナーさんも出世したねぇ」
ネイチャがにこやかに笑う。西条は裏事情を話さなかった。ただトレーナーとしての手腕を認められたからチームの設立を打診されたとだけ語った。
「で、これから面談なんだが、どうする？」
「う～ん。これからチームメイトになるかも知れないんでしょ。同席させてもらってもいい？」
「ああ、構わんよ――っと、来たようだな」
トレーナー室の扉がノックされ、西条が「どうぞ」と言う前に勢いよく開け放たれた。
「御用改めだ！　神妙にしろぃ！」
と、葦毛のウマ娘が強引に押し入ってきた。西条は無言で立ち上がると、その闖入者を室外へ押し出そうと試みる。が、ダメ。単純な力比べで人間がウマ娘に勝てるはずはなかった。

「すまんがおまえと遊んでやれる時間はない。今から大事な用があるんだ。明日なら付き合ってやるから、今日のところはおとなしく帰ってくれ」
「分かってるって。これからメンバーの面接だろ？　だからこのゴルシちゃんが面接官として一肌脱いでやろうってんじゃねぇか」
「……どこで聞いたんだ？　昨日の今日だぞ」
「ゴルシイヤーは地獄耳ってな。この学園の噂は逐一入ってくるのさ」
そう言ってゴールドシップはソファに腰を下ろした。西条がどうしたものかと思案していると、開け放たれたままだった扉の先から、赤みがかった栗毛のウマ娘がこちらを窺っている様子が目に入った。
「情報と一致。貴方が西条トレーナーですね。私はミホノブルボン。要求に従い推参しました」
「ああ、わざわざ足を運んでもらってすまないな。そこに座ってくれ」
「了解しました」
西条はゴールドシップのことは諦め、改めてミホノブルボンに向き直った。
構図としてはソファの真ん中にゴールドシップが座り、その左右に西条とネイチャ。そして対面にミホノブルボンが座っている。
見方によっては圧迫面接のようにも見えるが、彼女は気にした風もなかった。

「経歴は見させてもらった。トレーナー不在で朝日杯優勝は大したものだ」
「恐縮です」
　トレーナーがいなくてはレースに出走できないと思われがちだが、実はそうではない。そもそもウマ娘の総数に対してトレーナーの数が少なすぎるのだ。現実的に考えて、全てのウマ娘にトレーナーがつくのは不可能である。
　ではどうするか。教官に頼むのだ。それでレースには出走できる。だが教官は全体トレーニングなどが主な仕事で、ウマ娘の個性や特性に合わせた個別トレーニングなどはしない。
　だからウマ娘は自分を、自分だけを見てくれるトレーナーを欲する。
「トレーニングは自己流か？」
「父がトレーナーでした。幼少期よりトレーニングを続けています。その延長です」
「ふむ。クラシック三冠が目標というのは変わりないか？」
「肯定。クラシック三冠は私の夢です」
　ミホノブルボンははっきりと告げた。
　メイクデビュー（１０００ｍ）に続いて朝日杯（１６００ｍ）も圧勝したことで、彼女はまた評価を上げた。それと同時に、やはりスプリンターやマイラーとして彼女をスカウトするトレーナーも増えた。だがそんな誘い文句は、彼女の琴線に触れることはなかった。

西条はその瞳に断固たる決意を、鉄の意志と鋼の強さを感じ取った。
「クラシック三冠ってのは、そう簡単に取れるもんじゃねぇ。天賦の才と血反吐はくような努力と、運命をねじ伏せるほどの豪運がなきゃ達成できない偉業だ。おまえにその覚悟があんのかよ」
あたかも三冠を取ったような口ぶりで語り始めたのはゴールドシップだった。念のために言っておくと、彼女が取ったのは皐月賞と菊花賞だけで、ダービーは取っていない。
「覚悟は、あります。どんな過酷なトレーニングにも耐えてみせます。夢をかなえるためならば」
「その言葉が聞きたかった」
「ＢＪかよ――っと、ナゲットを投げるな！」
眼前に飛んできた物体は、ゴールドシップが弾いたチキンナゲットだった。どこからか取り出したチキンナゲットをむしゃむしゃと口に頬張っている。
「ま、クラシック三冠はとてつもねぇ偉業ってことだ。アタシも3回チャレンジしたがダメだったしな」
（なに言ってんだこいつ……？　いや、こいつなら時間遡行術や時の巻き戻る目覚まし時計を持っていても……待て待て、何を真面目に考えてるんだ、俺は。疲れてるな）

西条はこめかみと目頭を軽くマッサージして気持ちを落ち着ける。
そして、改めてミホノブルボンの瞳を見つめ返した。
「スタミナは鍛錬で克服できる、という考えには懐疑的だ。距離の壁というのは厳然としてある」
西条がそう言うと、ミホノブルボンの耳がペタンと萎れた。
「だが、菊花賞ならギリギリ届く距離だとも考えている」
菊花賞（3000m）は長距離、春の天皇賞（3200m）は超長距離と言われている。その差はたった２００メートルだが、それは途轍もなく大きな壁でもある。
一流のウマ娘たちが鎬を削り合う最後の２００メートルは、単純なスタミナ勝負ではなく、ステイヤーとしての資質が問われる。
「僕で良ければ、キミの夢を応援させてくれないか？」
「それは……私とトレーナー契約を結びたいということでしょうか？」
「ああ。一緒に三冠ウマ娘を目指そう」
ミホノブルボンはしばし黙考した後、答えを出した。
「よろしくお願いします。マスター」
こうして、ミホノブルボンは西条に師事することとなった。
「イイハナシダナー」

「おまえはさっさと帰れ」

第１８話　激突の春

年が明けて、マックイーンがトレセン学園に戻ってきた。それと機を同じくしてテイオーがリギルからスピカに移籍した。

本人は誤魔化していたが、マックイーンを心配しているであろうことは一目瞭然だった。

もちろん東条ハナは快く承諾した。

その頃、西条たちは春シーズンのローテーションについて話し合っていた。

「まずブルボンだが、皐月賞に直行しようと思う」

「トライアルは挟まないんだ」

「ああ、優先出走権がなくても皐月賞には出られそうだからな。それでどうだ？　ブルボン」

「問題ありません。マスターの指示に従います」

ブルボンは畏まった姿勢で頷いた。

「次にネイチャだが、大目標からだな。大阪杯かＮＨＫマイルＣか。どうする？」

「やっぱり天皇賞はなしなんだ」

「僕が長距離に否定的なのは知ってるだろ？　どうしても春の楯が欲しいというなら考えるが」

長距離は故障のリスクが大きいことに加え、レース自体が少ない。レースの主役はやはり中距離なのだ。ならば中距離に絞ってトレーニングを重ねた方が効率という意味では正しい。

メジロ家のように春の楯に特段の拘りがあるのなら話は別だが、そういうものがないのであれば、無理に固執する必要はない。

特に近年では菊花賞（3000m）を蹴って秋の天皇賞（2000m）やマイルチャンピオンシップ（1600m）を勧めるトレーナーも増えてきていると聞く。

ＵＲＡも長距離の地位低下を危惧して、格付け（グレード）や賞金額のアップ、新たなレースの設立などを画策しているようだが、上手くいっているという話は聞こえてこない。

歯に衣着せぬ言い方をすれば、長距離はダルいのだ。長距離の楽しみ方は駆け引きや探り合いなどの妙であるが、言ってみればそれは玄人志向である。

ファン心理としてはもっと派手で分かりやすい勝負を望んでいる。ボクシングで例えるならインファイトでの殴り合いのような試合だ。

レースならば短距離でのぶつかり合いがそれに相当するが、それではスピードに才がある者の独壇場になってしまう。

ある程度の戦略を必要とし、どのウマ娘にもチャンスがあり、エンターテインメントとしても成立する中距離がメインになるのは、ある種の必然ではあった。
「テイオーはどのレースに出ると思う？」
「可能性が高いのは大阪杯だな」
「なら、あたしもそれに出る」
「敢えていばらの道を選ぶか。なら弾みをつけるために、再来週の日経新春杯に出る。いいか？」
「オッケー。待ってろよ、テイオー！」
ネイチャは意気揚々と拳を突き上げた。

◇

『――さあナイスネイチャが上がってきた。１番人気の期待に応えられるか!?　伸びる伸びる！　凄い末脚だ！　先頭のカミヤクラシオンをかわしてゴールイン！　ダービーウマ娘の貫禄を見せつけました！』

『――第3コーナーを回って先頭はイクノディクタス。その後ろにナイスネイチャ。トウカイテイオーは3番手。グランプリウマ娘のダイサンゲンもきているぞ。最終コーナーを抜けて最後の直線。トウカイテイオーとナイスネイチャがほぼ同時にスパートをかける。イクノディクタスをかわした！　だが阪神はここから坂がある。トウカイテイオー、ナイスネイチャが駆け上がる。脚色は衰えない。内からナイスネイチャ！　外からトウカイテイオー！　並んで並んで、あーっとわずかに外か！　トウカイテイオーだ！　1着はトウカイテイオー！』

こうしてナイスネイチャの春シーズン2戦は幕を閉じた。初戦の日経新春杯は優勝できたものの、2戦目の大阪杯はテイオーに競り負けての2着。

戦績だけ見ればそう悪いものではないが、ネイチャは悔しさをあらわにしていた。

◇

ポカポカとした陽気、桜の蕾が開きそうな春先に、西条は久方ぶりのウマ娘と出会った。

「およよ？　こうして話すのは、なんだか久しぶりだね、西条トレーナー」

「テイオーか。そう言われれば、そうだな」

今年に入ってから、スピカとの距離は遠ざかっていた。チームとして認められ、チームルームの供与や施設の使用申請が出せるようになってからは、次第に絡む機会が減っていったのだ。

ネイチャの情報を渡したくないという西条の思惑も多少あったが。

「……なあテイオー。春の天皇賞だが、止めないか？」

「やめる？　どゆこと？」

テイオーはきょとんとして西条を見つめた。本来なら、彼女のトレーナーでもない西条がこんなことをいう筋合いはない。だがどうにも抑えきれなかった。

「関節の柔らかさはキミの長所でもあり短所でもある。その連動性が爆発的な加速を生み出しているが、リスクもある。キミの脚は長距離を走るには繊細すぎる。成長期を越えて骨が固まってきたとはいえ……はっきりと言えば、キミは骨折しやすい体質なんだ。長距離レースは止めた方がいい。マックイーンと戦いたいだけなら、宝塚記念でもいいだろう？」

「……実はね、それおハナさんにも言われたんだ。筋疲労が極限まで高まる長距離レースはリスクが高すぎるって」
「ならば……」
「でもね、前はボクの得意距離（秋の天皇賞）でボクが勝った。だから今度は、マックイーン（春の天皇賞）の得意距離で勝つんだ。そうしないと意味がない」
テイオーに回避する意思は無さそうだった。西条はそれ以上は何も言えず、ただ一言「無理はするな」とだけ言ってその場を離れた。
「無理しなきゃ勝てないよ」という小さい呟きは誰の耳にも届くことはなかった。

春の天皇賞は予想以上の注目を集めた。マックイーンが勝てば春の連覇。テイオーが勝てば春秋制覇。どちらも偉大な記録である。
半年ぶりのレースにも拘わらず、パドックで見る限りマックイーンの調子は良さそうであった。それはテイオーも同様で、アナウンサーもどちらが勝つか全く分からないと言った。
レースはスタート直後から逃げたメジロパーマーが引っ張る形となり、マックイーンは中団前目の位置に落ち着いた。テイオーはそれをマークするように右後ろを追走。第3コーナーに入るとマックイーンはスパートをかけ、メジロパーマーをかわして独走

態勢に入った。テイオーもマックイーンを追いかけるものの、その脚はまったく精彩を欠いていた。

テイオーはこのレースで初めて連対を外した。

そして翌日の新聞でテイオーの剥離骨折が発表された。

またマックイーンもレース後のトレーニング中に負った骨折で長期休養することになる。

第１９話　夏合宿

西条はまずブルボンに精密検査を受けさせた。自己流で、しかも聞けばかなり無茶なトレーニングを続けていたらしく、どこか身体に異常があってもおかしくはなかった。

だが西条の心配は杞憂であり、ブルボンの身体は健康そのものだった。

「だからといって無茶は許可しない。坂路は今までの半分程度でいい」

「無茶をしなければ三冠は達成できません」

「坂路はダービー以降で良い。筋肉には上限値がある。それはどうやったって覆らない。まずはスタート練習を徹底的にやる。１００回やって１００回成功する精度でなければいかん。重要なのは集中力だ。ゲートが開く前の音を感じ取れ」

「了解。ミッションを開始します」

「皐月賞は文句のない出来だった。これからは徐々にスタミナ訓練を始める。パワーアンクルの重りも増やしていくぞ。プールも積極的に使っていく。そしてコーナーだ。コーナーは直線以上にスタミナと脚を使う。コーナーの曲がり方を徹底的に詰めていく」

「了解。ミッションを開始します」

「ネイチャ。メジロパーマーの限界値は分かったな。速すぎるか遅すぎるか、あるいは平均ペースか。その見極めさえできれば負ける要素はない。だが、油断するな。テイオーもマックイーンもいないとはいえ、伏兵はいつだってはいると思え」

「りょ～かい。後輩が二冠取ったからね。あたしも結構キラキラしてるってとこを見せとかないと！」

ブルボンは二冠を達成し、ネイチャはダービーウマ娘に続いてグランプリウマ娘の称号を手に入れた。

西条が２年連続でダービーウマ娘を育てたことは一時話題になったが、ことさらに誇ることはなかった。

その西条たちだが、現在は夏合宿中である。高い競争率を誇る合宿の参加権は通常くじ引きで決定するのだが、西条はチーム設立時の交渉で、理事長の推薦により参加できていた。

「せっかくの海だし、まずは泳ぐか」

「イェーイ、トレーナーさんは話が分かるね！」

「あの島まで行って戻って来るぞ」
「……ええ？　それってもはや遠泳じゃない？」
快哉を叫んだネイチャだったが、一瞬にして耳がペタンと萎れてしまう。
「良い鍛錬になりそうです」
「念のため一瞬で膨らむ浮き輪も持ってきたから安心しろ。じゃあ行くぞ」
「ちょいちょい！　まさかトレーナーさんも泳ぐの？」
先頭で海に入っていく西条を見てネイチャは慌てて制止した。
「走りじゃ敵わないが、泳ぎなら負けんぞ。さあ競争だ」
そう言って西条は小島に向かって泳ぎ始めた。
海とプールの違いは、まず波があることだろう。流されまいと姿勢を矯正するので筋肉と体力を使う。
水泳は全身運動だ。つまり全身の筋肉をバランス良く鍛えることに向いている。特に陸上での筋トレでは鍛えにくいインナーマッスルの鍛錬や、関節可動域の向上という目的もある。
勢いよく先頭（ハナ）を切った西条だったが、ふたりもウマ娘としての意地がある。スイスイと西条を追い抜いた。
だが普段使わない箇所の筋肉を使ったらしく、復路では息が荒くなっていた。最後尾

の西条にせっつかれる形で、なんとかふたりはゴールを果たした。
「はぁ……はぁ……思ってたより、ずっとキツい」
「肯定。坂路とは……違った疲労を……感じます」
「ちゃんと水分補給はするように。休憩が終わったら砂浜でジョギング＆ダッシュだ」
それを聞いて、ネイチャは悲鳴のように息をひきつらせた。

◇

西条は昔の、とあるトレーナーの言葉を思い出していた。
ウマ娘は平等ではない。生まれつき足の速い者、美しい者、親が貧しい者、病弱な身体を持つ者、生まれも育ちも才能も、ウマ娘は皆違っておるのだ。
そう、ウマ娘は差別されるためにある。だからこそウマ娘は争い、競い合い、そこに進化が生まれる。
不平等は悪ではない。平等こそが悪なのだ。
この言葉は多くの反感を買ったが、全く否定されたわけでもなかった。

今ほどウマ娘が解明されていなかった時代、それでも持っている者と持っていない者は如実に分かれていた。

ジュニア級でコースレコードを出す者。1勝もできずにターフを去る者。努力だけでは届かないものがある。それを才能の一言で切って捨てるのは残酷かもしれない。だが事実でもある。

クラシック三冠という称号がもて囃されるのは、当然それだけの価値があるからだ。エリートが集うトレセン学園の長い歴史でも、それを達成した猛者は指折るほどに少ない。

ましてや無敗の三冠ともなれば、過去に一人しか達成者のいない偉業である。故に彼女は”皇帝”と呼ばれているのだ。

西条は考える。この脚に３０００メートルを駆け抜ける力があるのか。いつも以上に酷使させた脚を入念にマッサージする。

すでにマッサージを終えたネイチャは、隣でスゥスゥを寝息を立てている。現在進行形でマッサージを受けているブルボンの目蓋も下がり気味だ。

「眠れブルボン。人間もウマ娘も同じだ。鍛えている時に強くなるんじゃない。休息している時に強くなるんだ」

逃げは王道ではないといったのは誰だったか。

近年で有名なウマ娘といえばマルゼンスキーやサイレンススズカといったところだろう。だが彼女たちは３０００メートル以上のレースを走ったことはない。

もう一人、狂気の逃げウマ娘の異名で呼ばれたウマ娘がいるが、あれは範疇には収まらない。彼女の走りは彼女にしかできないものだ。

（確か菊花賞前に深爪をして断念したんだったな。見たかったな、彼女の菊花賞……）

西条はひとりのウマ娘の名前を思い浮かべ、マッサージを終えた。

第２０話　最後の冠

約３週間の合宿を終えて、西条たちはトレセン学園に帰ってきた。
菊花賞まで約２ヵ月。最終的な作戦を決めるブリーフィングを始める。
「策は２つある。まず１つ目だが、前半１０００メートルを５９秒６、中間の１０００メートルで６４秒３と一気にペースを落とし、２周目の坂の下りから早めのスパートを仕掛けて、セーフティーリードを保ったまま最後の１０００メートルを５９秒３で駆け抜ける」
西条の指示を聞き、ブルボンは目を閉じてシミュレーションを始めた。そしてネイチャはあることに気づいたのか、西条に視線を向ける。
「気づいたか？　これはセイウンスカイが菊花賞を勝ったときの戦略だ。勝ち時計は３分３秒２の世界レコード。芸術的なレースだった」
「確かに世界レコードなら負けないでしょうけど……」
「そう。ネタが割れている。あれから３年経っているが、レース中に気づくやつが出てきてもおかしくはない」
ブルボンはアドリブで策を再構築できるような器用な性格ではない。ネタが割れれ

ば破綻する可能性もある。
「２つ目の策は、１ハロン１２秒３を淡々と刻んでいくペースだ。これでタイムは３分４秒５。若干タイムは落ちるが十分に速いペースだ」
「けど、レースに絶対はない」
「ああ。ライスシャワーやマチカネタンホイザ。皐月賞より距離が伸びたダービーの方が差を詰められている。それが懸念材料でもある。それ以上に……」
　ここで西条は改めてブルボンの目を見据えた。
「ミホノブルボンに逃げさせたらヤバいというのは、もはや共通認識になっている。なにがなんでも先頭を取りに来るウマ娘がいてもおかしくないだろう」
「ブルボンの加速についてこれるかしら？　先頭を取って終わりじゃないのよ。それを維持しなきゃならない」
「そうだな。一か八かだ。策とも呼べない策だが、可能性があるならやってくるだろう。それに……」
　厳しい声音で西条は続ける。
「まともにやって勝てないなら、まともじゃない手段を選ぶしかない。そこにわずかでも勝機があるなら、候補のひとつにはなるだろう」
「……確かに、そうかもね」

「ともかく、楽に先頭が取れるとは思わない方がいい。そうなった場合どうするか。意地でも先頭を取りに行くのか、あるいは譲るか。キミはどうしたい？」

西条はブルボンに水を向ける。

「私は、先頭に特別拘りがあるわけではありません。マスターの指示とあれば、先行でも差しでも追い込みでも、ミッションを遂行するだけです」

「……なるほど」

ブルボンは自信満々にそう言ったが、彼女はすべてのレースで逃げを打っている。メイクデビューでは出遅れて先頭を譲ったが、大きく崩れた様子はなかった。

「無理に張り合ってペースが崩れれば本末転倒だ。先頭は譲っていい。そして、それは忘れろ。後ろに付く必要もない。先頭を走っているのは自分だと思いこめ」

ただの言葉遊び、詐術のような言い分だが、ブルボンにはそれを聞き分ける素直さがあった。

「起こりうる可能性を全て想定しよう。そのケースに直面したら適宜判断しろ」

ブルボンは静かに頷いた。それからは対策、訓練、休息を繰り返し、作戦も詰めに詰めた。2ヵ月という時間はあっという間に過ぎ去った。

◇

『晴天に恵まれました京都レース場。本日のバ場は良との発表です。注目はやはり三冠のかかったミホノブルボンでしょう。調子は良さそうです』

ブルボンは4枠7番となかなか良い枠順を引き当てた。その隣に潜む小さな黒い影は、機運というべきだろうか、ダービーでぞわりとした悪寒を感じさせたウマ娘だった。

生粋のステイヤー、天性のステイヤー。本来ならば、ブルボンと彼女が同じ距離（フィールド）で戦うことはなかっただろう。精々が年末に行われるお祭り騒ぎのレースくらいだ。

ならば勝つ為には――レコードで勝つしかない。相手の思惑を超える走りをするしかない。

菊花賞――問われるのは肉体の強さだけではなく、精神の強さ。

菊花賞――勝つのは真に強いウマ娘。

『18人のゲートインが終わりました。さあ、スタートです』

決戦の火ぶたが切られた。

『ミホノブルボン好スタート。その外から嚆矢が走る。アーバレストがミホノブルボンをかわして先頭に立ちました。アーバレストが先頭です！』

先頭から3バ身ほど離されて、ブルボンは2番手でレースを進めた。スタンドではどよめきが起こっていたが、ブルボンは冷静だった。先頭を行くウマ娘を意識の外に押しやり、確実にペースを刻んでいく。

隊列は縦長になった。スタンド前を駆け抜けて、2つのコーナーを回り向こう正面に入る。アーバレストはまだ粘っている。辛うじて先頭を維持している。走っているというよりも、ブルボンに走らされているといった方がいいだろう。文字通り逃げるようにゴールへと向かう。

ブルボンはアーバレストの斜め後ろを走っていた。これは何か深い考えがあったわけではない。そうしろと言われたからそうしているだけだ。

普通ならアーバレストを風除けに使う。発生するスリップストリームを活用して体力を温存する。だがそれにより、アーバレストの視界からブルボンは消えてしまう。

西条が選んだのは、見えない恐怖よりも見える脅威だった。

視界の端にチラリチラリとブルボンが映る。ひとたび先頭を譲れば、そのまま押し切られる。アーバレストの作戦は至極単純で、先頭を奪い、そのままゴールまで駆け抜けることだった。それがどんなに至難の業だとしても。

ベストパフォーマンスを発揮しても難しいというのに、視界の端に映るブルボンの姿が、アーバレストの集中力を奪い、プレッシャーを与える。

３コーナーに向かう坂を駆け上がっていく。もはやアーバレストは気力と根性だけで走っていた。目は虚ろで、思考も上手く働いていない。それでも勝利への執念がそうさせるのか、アーバレストは内ラチギリギリに進路をとった。

だが京都レース場の４コーナーは外回りと内回りが合流する最大の難所だ。下り坂でついた勢い（スピード）を殺さずに回り切る技量（テクニック）が問われる。わずかに膨らんだアーバレストのさらに内を突いて、ブルボンは先頭に躍り出た。

『最終コーナーを抜けて最後の直線に入ります。先頭はミホノブルボン。アーバレストは一杯になった。ライスシャワーとマチカネタンホイザが上がってきた！』

ゴールまで残り３００メール。ようやくブルボンが先頭に立った。だが終わりではない。ここからが始まり。レースでもっとも苦しい時間。ブルボンにとっての正念場。

まとわりついてくる。襲い掛かってくる。叩きつけてくる。茨の園が容赦なくブルボンの自由（スタミナ）を奪いに来る。

無視することはできない。ブルボンは意識の槍を飛ばし、迫り来る蒼薔薇の茨棘を払い落とす。

その光景を見て、西条は冷たい汗を流していた。もちろん西条にはふたりの攻防は見えない。だが分かることはある。ライスシャワーの速度が増し、ブルボンの集中が乱されている。

漆黒の勝負服（ドレス）から抜き放たれた懐剣が、ブルボンの喉元に突きつけられる。
世界レコードのペースで走っているブルボンを、ライスシャワーは遂に捉えた。
『先頭はミホノブルボン。外から黒い帽子のライスシャワー。青い帽子はマチカネタンホイザ。あーっとライスシャワーかわしたか！　マチカネタンホイザもきているぞ！　ライスシャワーだ！　ライスシャワーがここで先頭に立った！』
スタンドから悲鳴が上がる。レースは残り１００メートルを切った。ここでの先頭交代は致命的である。
このままでは勝てない。世界レコードのペースでは勝てない。世界レコードを更新するペースでなければ。
（まだ、想定内。ミッションをアップデート。プランＢへと移行します。さすがですライス、ライスシャワー！　ここから先は、私とあなたの根性勝負。ミホノブルボン、発進します！）
『差が――詰まっている！　ライスシャワー突き放せない！　ブルボン追いすがる！　並んだ並んだ！　ふたり並んで！　今！　ゴールイン！　３着にマチカネタンホイザが入ります！』
黒白（こくびゃく）の風が駆け抜ける。決着は写真判定となった。
判定の時間は長かった。十分、二十分が経過し、ようやく電光掲示板に結果が発表さ

れた。
スタンドから2度目の悲鳴が上がった。

◇

レースで3着までに入賞したウマ娘にはウイニングライブの権利が貰える。ライブ開始までの休憩時間、西条は控え室でブルボンの脚をチェックしていた。
「……うん、異常はないな。熱を持っていたからどうかと思ったが、大丈夫そうだ。ウイニングライブは問題ないだろう。違和感とかはないか？」
「はい。自己診断（セルフチェック）でも異常は確認されません」
「そうか」
西条の声には陰鬱なものが混じっていた。
「もっと上手い方法があったかもしれない」
西条は怪我をさせない限界ギリギリのラインでトレーニングプランを組んでいたつもりだった。それでも最後に覆された。もっと効率の良い方法があったかもしれない。

そんな思いが心の底にこびりついていた。
「いえ、ライスは強敵でした。あの１ｃｍの差がライスの執念で、底力なのだと思います。私は持てる力の全てを引き出せました。ライスはその上をいった。世界レコードで負けては、言い訳もできません」
「……ならばなぜ泣いている？」
ブルボンはハッとなって自分の頬に手を当てた。そして、彼女は涙の溜まった瞳で西条を見上げた。
「クラシック三冠は関係ありません。これは、単純に負けたことが悔しい、ということです」
「そういえば、負けるのは初めてだったな」
「はい。私は、自分が思っているよりもずっと負けず嫌いだったようです」
「……這い上がろう。負けたことがあるというのが、いつか大きな財産になる」
ブルボンの涙を拭い、西条は彼女をステージへと送り出した。その後、ネイチャと合流してライブ会場へと向かう。そして、そこに足を踏み入れた瞬間、西条は何か異質な雰囲気を感じ取った。
（なんだ？　いつもの雰囲気とは……違う？）
その違和感の正体は、ライブが始まるまで分からなかった。分かったのは、ライブが

始まってしばらくの時間が経ってからだった。
ブルボンに声援が飛ぶ。
『ブルボン次がんばれ！』
『三冠ウマ娘見たかったけどよくやった！』
『また応援するね！　ブルボン大好きー！』
その言葉はトレーナーとしては嬉しいものだった。だが言葉の裏に隠されたものに、西条は怖気（おぞけ）を感じた。
マチカネタンホイザにも声援はある。だがライスシャワーにはそういった言葉はなかった。
罵倒するでもなく、非難するでもなく、嘲笑うわけでもない。ただ見ていないだけだ。見えていないだけだ。
ネイチャがダービーを勝った時も、ある程度は覚悟していたが、西条の予想は良い意味で裏切られた。
（だがこれは……こんな……違う。レースは……ライブはもっと……美しく……尊いもので……）
ダービー（2戦目）と菊花賞（3戦目）でここまで違うものか。
改めて、シンボリルドルフ以来の無敗の三冠ウマ娘という期待を思い知った。自分

が、存外に夢想家でロマンチストであったということも。

西条は強烈な吐き気を催して、トイレへと駆け込んだ。

第２１話　秋シーズン（前）

菊花賞が終われば、次は秋の天皇賞が始まる。バトンはブルボンからネイチャへと渡った。

控え室にて、西条はネイチャと最後のブリーフィングを行っていた。

「今回のキモはメジロパーマーだ」

「逃げにつられないようにするってことでしょ。宝塚記念の時も聞いたって」

その言葉に、西条は何となく引っ掛かりを覚えた。ネイチャはメジロパーマーを甘く見ているのではないかと。

確かに、宝塚記念ではネイチャがメジロパーマーの上を行った。だが彼女とてあの時のままではない。慢心して勝てる相手ではないのだ。

「改めて言っておくが、メジロパーマーは強いウマ娘だ。誤解を恐れずに言えば、彼女はツインターボの上位互換だ」

「ターボの上位互換……」

「換言するなら賢いツインターボだ」

「それはもうターボじゃないのでは？」

賢いターボというのが想像できず、ネイチャは微妙な表情を浮かべた。だが西条は気にせず話を続ける。メジロパーマーはジュニア期、クラシック期は迷走していた節が見えるが、シニア期になって本格化した。

頭を下げない特徴的な走行フォームに、逃げという脚質にもかかわらず、最後にひと伸びする驚異的なスタミナ。仕掛けどころを間違えば、悠々と逃げ切られる。

「だがダイタクヘリオスと一緒に出走した場合は、バカになる傾向がある」

「バカ逃げコンビってやつね」

共に逃げることで必要以上に張り切ってしまうのだと考えられる。ダイタクヘリオス風に言うのならば『テン上げでＧＯ！』というやつだ。結果ペース配分を間違ってしまう。

「それを警戒しつつ、今日は前目でレースを進めよう。メジロパーマーやダイタクヘリオスがオーバーペースで走る可能性は常に考慮しておくこと。もしそうなったら、それにはつられないように」

「了解」

ネイチャがビシッと敬礼してターフへと向かった。

西条はそれを見送って、いつもの定位置へと移動した。パドックが始まり、各ウマ娘の紹介が始まる。

テイオーが舞台に上がると、一層の歓声が沸き上がる。その歓声の中で、西条はテイオーの異常を感じ取った。

（あの顔の火照りは熱だな。上手く隠しているようだが、自慢のステップも披露しなかった。調子はかなり悪そうだ）

朝起きた時は身体がだるいな、くらいだったのだろう。だが時間が経つにつれて悪化していった。

（今からでも出走を取りやめにしたいくらいだが、トレーナーでもない俺にそんな権限はない。彼女のトレーナーに忠告するのも筋違いだろうしな）

テイオーは自分の意思で出走を決め、トレーナーはそれを許可した。ならば外野が騒ぎ立てるのは筋違いだろう。それに調子が悪くともテイオーだ。レースに絶対はない。

『さあ全ウマ娘のゲート入りが完了しました。スタートからの２コーナーまでが問題だ。秋の天皇賞、スタートしました』

前年のトラブルが頭をよぎったのか、アナウンサーが警句を発した。

先頭を取ったのは大方の予想通り、メジロパーマーとダイタクヘリオス。ふたりが併せるように進んでいく。その後ろにテイオーがつき、テイオーの後ろにネイチャがついた。

『先頭はメジロパーマー。続いてダイタクヘリオス。トウカイテイオーはその後ろにつけます。トウカイテイオー素晴らしい足取り！』

（違うな。あれは熱で身体がふわふわしているだけだ。いずれ落ちてくる）

西条は冷静にそう分析した。事実、熱に浮かされたテイオーは冷静な判断力を失っていた。

『さあ１８人が向こう正面を過ぎて３コーナーの坂を下って行く。先頭はダイタクヘリオスに変わったか。メジロパーマーは２番手。１０００メートルを通過してタイムは――なんと５７秒５！』

アナウンサーから驚愕の声が漏れる。それもそのはずで、これはメチャクチャに速いペース。殺人的なハイペースだ。それについて行っているテイオーは明らかに自分のペースを見失っている。

（ネイチャは現在１０番手くらい。隣はイクノディクタスか？　いいぞ、それでいい。あんな無茶なペースにつき合う必要はない）

『最終コーナーに入ります。トウカイテイオーは現在２番手。最終コーナーを回って最後の直線へ。先頭はダイタクヘリオス！　テイオーはまだか！　テイオーはまだか！　テイオーはまだ２番手！』

テイオーの表情は苦悶に歪んでいる。いつものような余裕のある表情ではない。東

京レース場の長い直線を駆ける体力は残されていないだろう。
『外から後続が一気にきた！　２番人気のナイスネイチャ！　そしてイクノディクタスが伸びる！　ナイスネイチャだ！　ナイスネイチャが一気にきた！』
（――あたしが先頭?!　でもテイオーはここから来る！　テイオーが……テイオーが……あれ?）
『ナイスネイチャが1着でゴールイン！　２着はイクノディクタス』
決着はあっけないものだった。レースには勝ったが、テイオーとの勝負は次に持ち越しといったところだろう。

◇

西条はトレーナー室で書類仕事をしていた。秋の天皇賞が終わり、次のジャパンカップに向けての調整を始めている。
ブルボンにもＵＲＡからジャパンカップの出走要請が来ていたが、疲労を理由に断った。それでもしつこく食らいついてきたが、いま無理をするとダメになる、有《ｆｏｎ

ｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念には出る、という交渉でまとめた。

トレーニングプランや各種申請書類を書き終え、西条はトレーナー室を出た。ドアの鍵を閉めたところで、足音が聞こえてきた。歩く音ではない。走る音だ。

「やあ、こんばんは」

「……ネイチャのトレーナー」

「今はブルボンのトレーナーでもあるけどね」

ジョギングをしていたテイオーは足を止めて西条に向き直った。西条がテイオーと言葉を交わすのは久しぶりだった。春の天皇賞以降の春シーズンは、ダービーと宝塚記念のプランを練っていたし、夏は合宿に行っていた。

テイオーも西条の忠告を無視して無理をしてしまった以上、なんとなく顔を合わせづらい雰囲気になっていた。

「寒い時期は怪我のリスクが高まるから注意した方がいい。特にウォーミングアップは時間をかけて行うことだ。身体が温まったと感じても、筋温はさほど上がってなかったりする。まあこんなことはキミのトレーナーも承知だろうが」

テイオーの所属するチームスピカのトレーナーは西条よりもトレーナー歴は長い。ベテランというほどの年ではないが、ＧＩウマ娘を育成できるだけの手腕はある。

「……また無理するなって話？」

テイオーはムッとした態度で返答する。だが西条は機嫌を損ねることなく、むしろ気遣うような口調で言葉を続けた。

「悩みがあるなら聞くぞ。チームメイトやトレーナーには話しづらいことでも、無関係の僕なら話せることもあるんじゃないか？」

「……ないよ。悩みなんか」

「無敗の三冠ウマ娘という夢を失って、マックイーン（ライバル）にも負けて骨折して、熱をおして出走したレースも自分のペースを作れずに惨敗。自分は何のために走ってるんだろう――ってところか？」

「――ッ!?」

テイオーは押し黙って口の端を噛みしめた。聞く人が聞けば贅沢な悩みだと思うだろう。本来ならＧＩレースに出走できるだけでも優秀であることの証左なのだ。このトレセン学園には1勝もできずに去って行くウマ娘の方が多いのだから。

だがそんなことを言っても慰めにはならない。

「最近、忘れてるんじゃないかと思ってな」

「……何をさ」

「自分がトウカイテイオーだってことをさ」

テイオーは虚を突かれたように茫然と視線を彷徨わせた。そして一瞬後に眉根を寄

せる。

「なにそれ？　ぜんもんどーってやつ？」

「自己の再確認だよ。キミはキミだ。シンボリルドルフにはなれないし、なる必要もない。トウカイテイオーはトウカイテイオーのまま、シンボリルドルフを超えればいい」

「カイチョーを……超える？」

それはかつてテイオー自身が目指したことだった。シンボリルドルフみたいなウマ娘になりたい。シンボリルドルフに追いつきたい。シンボリルドルフに勝ちたい。

それが薄れていったのはいつからだろうか。

シンボリルドルフとテイオーの才はまったく別のものだ。龍はどう頑張っても虎にはなれない。逆もまた然りだ。

龍には龍の強さがあり、虎には虎の強さがある。テイオーが「シンボリルドルフみたいになりたい」と思っているかぎり、彼女は皇帝には勝てないだろう。

西条はそれをテイオーに伝えたかった。

「そんなあやふやな状態で走っていたら、また怪我するぞ。マックイーンもいいが、もう一人のライバルのことも忘れないでくれよ」

そう言って、西条は一本のチューブをテイオーに投げ渡した。外国語で書かれた歯磨き粉のようなチューブを、テイオーは訝し気に見つめる。

「日本ではなかなか手に入らないマッサージ用のクリームだ。弱いテイオーに勝っても自慢にはならないからな」

西条はそう告げて踵（きびす）を返す。その背後でブルリと身震いするような音が聞こえた。

忘れかけていた何かを思い出す。

テイオーの心に小さな火が灯った。

第２２話　秋シーズン（後）

各国から強豪ウマ娘たちが集うジャパンカップ。パドックも終わり、西条とネイチャは最後の確認作業を行っていた。

「相手のデータは少ない。キッチリした作戦はなしにしよう。自分がすべきだと思ったことを即座に行うこと」

海外のレース映像を入手することは困難だ。西条にそういったコネでもあれば話は違ったのだろうが、あいにくとそんな伝手はない。

１番人気のインティメイトゥ。２番人気のナチュルメロディ。どちらも侮れない相手だ。

逆にトウカイテイオーの人気は低い。休養明けの天皇賞でいまいちな成績だったからか、今回も荷が重いと感じているのだろう。

「それと、テイオーにも気を配っておけ。前とは別物だぞ」

「……うん。あたしも感じてた」

観客の見立てとは逆に、西条はひと際テイオーを警戒していた。

テイオーの調子は明らかに良い。オーラさえ漂って見える。ネイチャもその気配を

ヒシヒシと感じていた。

（ちょっと塩を送りすぎたか？）

西条は少しばかり後悔した。

『今年から国際ＧＩレースに認定されましたジャパンカップ。この府中東京レース場には１６万人を超えるファンが詰めかけています。１番人気はヨーロッパの女傑、インティメイトゥ。天候は晴れ、バ場は重との発表です』

（芝は乾いているが、土にやや水分を含んでいるという感じか。ネイチャは……落ち着いてるな。話しているのはイクノディクタスか？　……ん？　あの子、先週のマイルチャンピオンシップにも出てたよな。その前の秋天にも出てたし、疲労が溜まらないタイプなのか？）

ＧＩレースは過酷で熾烈だ。レース後には数キロ痩せるウマ娘もいる。芝だと脚への負担も大きいし、あまりポンポンと出走させたくはない。イクノディクタスは丈夫なウマ娘なのだろう。

『さあ、全ウマ娘がゲートに収まりました。ジャパンカップ、スタートしました。まずは先頭争い、誰が行くのか。飛び出したのはレリックアース。レリックアースが先頭に立ちました』

（さすがに世界の強豪ぞろいだな。簡単に前へは行かせてくれんか）

テイオーは現在４番手。ネイチャは７番手あたりでレースを進めることになった。先頭はレリックアースで、中団では何度か入れ替わりがあったが、大きな動きはなかった。

（１０００メートルの通過タイムは６０秒３。平均ペース……いや重バ場だと考えればハイペースか。インティメイトゥは日本の芝に手こずっているようだ。これは伸びないかもしれんな）

ヨーロッパと日本では芝の質が違う。天然そのままに残るヨーロッパの芝は、何よりもパワーを必要とする。翻って日本の芝は綺麗に刈り揃えられている高速バ場だ。パワーよりもスピードが重視される。

かのブロワイエも、日本の芝に合わせることができずに、最後の直線では伸びを欠いた。

『最終コーナーでトウカイテイオーがインティメイトゥをかわして３番手。トウカイテイオーがぐんぐんきている！』

（さすがにレース勘が鋭い。後ろにイクノディクタス。ネイチャはその後ろか。悪くはないが……とどくか？）

『最後の直線に入ります。レリックアース逃げ切れるか。トウカイテイオーが来た。ナ

チュルメロディも良い位置だ。ナイスネイチャも上がってきたぞ！』
　レリックアースはもう一杯だった。残り２００メートルでゆるゆると後退を始め、残り１００メートル時点で先頭を譲った。
　レリックアースをかわしたテイオーがそのまま1着に入り、ナチュルメロディが2着、ネイチャは3着に終わった。
『トウカイテイオーが海外の強力ウマ娘をねじ伏せました！　1着はトウカイテイオーです！』

◇

　レース終了後、西条はいつものように控え室でネイチャの脚を診ていた。
「ごめん。また負けちゃった」
「またって……秋天（前走）は勝っただろ？」
「……」
　ネイチャがそういう意味で言ったのではないことは、西条も察していた。ネイチャが

本当の意味でテイオーに勝ったことはダービー以来一度もない。
特に今日は、コース取りの関係で競り合うことなく負けた。
「さっき出たデータだがな、あがり3ハロンのタイムは、テイオーとほとんど差がなかったそうだ」
「……ホントに？」
「こんなことで嘘は言わんよ。ダービーだって、テイオーの前で仕掛けただろう？　次のレース、たぶん有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念か。テイオーより前でレースを進めよう」
「……勝てるかな」
「勝てるさ。勝つ為の、練習をしよう。だがまずはウイニングライブだ。行こう、笑顔でな」
西条はネイチャの髪を優しく撫でた。

◇

小柄なウマ娘は大成しない、などというトレーナー間の迷信みたいなものがある。だがそれはかつて葦毛のウマ娘は走らない、と言われていたような根拠のない妄言にすぎない。

実際、タマモクロスなどは小柄で葦毛なのだが、ＧＩをいくつも取った素晴らしいウマ娘だ。

（そんな都市伝説に踊らされているとはな。なんと料簡の狭い……）

菊花賞のウイニングライブは、西条の心に強いしこりを残していた。あんなにがんばったウマ娘が、あんなに素晴らしいレースをしたウマ娘が、正当に評価されないというのはどうにも納得ができない。

ライスシャワーにはトレーナーがいなかった。それはつまり自分一人でトレーニングを行い、ローテーションを決めているということだ。あの菊花賞でライスシャワーを再評価したトレーナーもいるだろうが、心意気だけは伝えたいと西条は思った。

「ライスシャワーをうちのチームにスカウトしたいと思う」

西条はネイチャとブルボンにそう告げた。

「いいんじゃない」

「私も賛成です」

西条の提案はあっさりと受け入れられた。ネイチャはあのライブで西条が気分を悪

くしたのは知っていたし、ブルボンもライブ中のライスシャワーの様子がおかしいことはなんとなく察していた。だがあの時は自分のことで手一杯だったのだ。

なぜならブルボンは、1着（センター）のダンスは完璧に習得していたが、2着3着（サイド）のダンスはあまり練習していなかった。そのせいで周りに気を配る余裕がなかったのだ。それを少し悔やんでいた。

「ありがとう。まあ、相手が受けてくれるかは分からないが」

まずはふたりが快く承諾してくれたことに、西条はほっと胸をなでおろす。

ジャパンカップが終わり、西条はライスシャワーのスカウトに動き出した。菊花賞が終わった頃、ライスシャワーは何人かのトレーナーからスカウトを受けた。だが契約には至らなかったと聞いている。

そして、菊花賞以降レースには出走していない。それはいい。ブルボンだってまだ疲労は抜けきっていない。怪我をしたとも聞いていないので、単純に休養期間なのだろう。

本人の希望により、ブルボンを連れ立ってライスシャワーの下へと向かう。だがトラックにライスシャワーの姿は見えなかった。

しばらく探し回って、ようやく見つけたのは夕暮れ時。ジョギングから帰ってきたらしいジャージ姿のライスシャワーだった。

「初めまして、トレーナーの西条です。ブルボンの紹介はいらないかな?」
「は、はい。あのライスは……わたしはライスシャワーです」
　少し怯えた様子でライスシャワーは返答した。西条は隣のブルボンに視線を送る。自分よりも同じウマ娘が誘う方が適任だと考えたのだ。
「ライス。私と一緒のチームに入りませんか?」
「え?　ブルボンさんのチームに?」
「ライス。私と一緒のチームに入りなさい」
「命令形!?」
　いまいち手ごたえがないと感じたのか、ブルボンはすぐに二の矢を放った。西条は仲介しようかとも考えたが、もう少し様子を見ることにした。
「ライス、私も朝日杯が終わるまでは独りでした。このトレーニングは正しいのか、私の夢は間違っているのか、そんな不安もありました。支えがないのは、辛いことだと思いました」
　ライスシャワーはただ黙してブルボンの独白を聞いている。
「何度もお父さんに電話しました。ですが、遠くにいるお父さんでは私の心は埋まりませんでした。その時に出会ったのです。私の夢を肯定してくれる人に」
　それが誰かは言うまでもなかった。ライスシャワーはちらりとブルボンのそばに立

つ西条に視線を向けた。
「そんな夢を……ライスは壊してしまいました。ライスが走るとみんなが不幸になる。ライスはただみんなに認めてほしかっただけなのに。だから一生懸命がんばったのに……ごめんなさい、ライスはもう走りません」
がんばって走った結果があのライブなら、確かにショックは大きいだろう。何のためにがんばったのか、分からなくなってもおかしくない。
ならばなぜ練習しているのか、キミの脚は走りたがっているのではないか、と西条は問いたかったが、やはりブルボンに任せようと判断した。
「確かに私の夢は終わりました。しかし、あなたを恨む気持ちはありません。悔しい、それ以上に清々しい気持ちでした。私の全てを出し切っても勝てなかった、唯一のウマ娘。それがあなたなのです」
「か、買い被りです。所詮ライスは悪役（ヒール）なんです。ライスが走ったら、みんなを不幸にする」
「私は、少なくとも私は不幸だなどとは思ってはいません。三冠という夢は失いましたが、新たな夢が生まれました。次は勝ちたい。今度は負けたくない。強いあなたと走りたい。そう、私はあなたと一緒に走りたいのです」
「ラ、ライスと一緒に……？」

茫然とライスシャワーがつぶやく。ブルボンは小さくうなずいて、言葉を続けた。
「悪役（ヒール）だなどと悲しいことを言わないでください。もう走らないなどと寂しいことを言わないでください。私はあなたと走りたい。強いあなたと一緒に走りたい」
「……ライス、走ってもいいのかな？」
「いいんです。誰も走るななどとは言ってません。一緒に走りましょう。私と、私たちと」
ブルボンはゆっくりとライスシャワーに近づき、右手を差し出した。ライスシャワーは目じりに涙を浮かべながら、その手を取った。

第２３話　冬の日々

紅葉の時期も終わり、強烈な寒さを実感するようになってきた。新たにライスシャワーをチームに向かえ、今日は最初のトレーニングだ。

３人の出走予定レースは年末に開催される有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念。

まだ確定ではないが、おそらく選ばれるだろう。

ブルボンの疲労も抜けて、ライスシャワーも問題ないように見える。ネイチャの意気も高い。調整は念入りにして、ベストコンディションで有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念に送り出したい。

そうして練習を終え、定例のマッサージとなったが、その時になってライスシャワーは困惑した。

３人の格好は短パンにスポーツブラというラフなものだ。これだけでもライスシャワーは気恥ずかしさを覚えている。

「やっぱり最初は躊躇うよね。あたしもそうだったもん」

「練習後のマッサージは重要です。お父さんもそう言っていました」

「そういやあんたは最初から全身許してたわね」
　最初の頃は脚だけだったネイチャに比べて、ブルボンは初日から全身マッサージを受け入れていた。聞けば実家では父に施術されていたとのこと。それ故に抵抗が少なかったのだろう。
「まあ、今日は軽めのトレーニングだったから無理にとは言わないが」
「ううん、ライスがんばる！」
「がんばる必要はないが、じゃあそこに仰向けになってくれ」
　寝そべったライスシャワーの右脚を自身の肩に乗せ、クリームを塗りこんでマッサージを始める。
「末端から心臓に向かって丹念にモミあげる」
「……あっ……あっ……んんっ」
　自分でやるマッサージとも、友人にしてもらうマッサージとも違う、理にかなった正しいマッサージ。ライスシャワーは初めて体感する心地良さに感銘を受けた。
「よし。次はうつ伏せになって」
　体勢を入れ替え、続けて肩、背中、腰をまんべんなくモミほぐしていく。そこで西条はふとした違和感を覚えた。
（背骨……腰骨か？　若干歪みがある……か？　それに筋肉のバランスも悪い。自己流

鍛錬の弊害だな）

人間と同じようにウマ娘にも利き腕、利き脚というものがある。使いやすい方の手足が必然的に鍛えられてしまうのだ。その結果、体軸がブレやすくなってしまうのだが――

（この状態でブルボンに勝ったのか。末恐ろしいな）

もしライスシャワーにきちんとしたトレーナーがついていたのなら、ダービーも危うかったかもしれない。

「――痛っ」

「すまん。大丈夫か？」

「う、うん。ライス平気だよ」

「トレーナーさん怖い顔してたよ。ライスに何かあった？」

ネイチャが訝しむように声を掛ける。筋肉のバランスはトレーニングで改善できるが、骨格の歪みはさすがに専門的すぎる。

「少し、骨格に歪みがあるかな。今すぐにどうこうというわけじゃないが、整体院で矯正した方がいいかもしれない。ただその場合、有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念は諦めることになると思う」

筋骨格が改善されれば、今のフォームには違和感を覚えるだろう。その矯正は一朝一

夕にとはいかない。
ライスシャワーは少し考えた後、答えを出した。
「悪いところは、早く治したほうがいい……よね」
「有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念はいいのか？」
「うん。仕方ないよ」
「そうか」
西条は頷き、整体院に予約を入れるべくスマホを取った。
（どうせライスが選ばれるわけないし……）
どこまでも自己評価の低いライスシャワーであった。

◇

師が走ると書いて師走。要するに忙しい月である。トレーナーもウマ娘も。
その例にもれず、西条も忙しい日々を送っていた。トレーニングメニューの作成はもちろん、今年はふたりも有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念に出走する。ラ

イスシャワーの治療についても色々と考えなければならない。

そしてウマ娘も忙しい。有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念という大レースに臨むのだ。トレーニングにも熱が入る。そんな中で、ネイチャはレースとは別のことを考えていた。クリスマスについてである。

（去年は微妙な空気だったからなぁ）

去年のクリスマスパーティーは、有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念の後に行われたので、西条が気を遣ってくれているのが分かった。

今年は有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念の前にクリスマスがあるのでその心配はないが、レース前に浮かれすぎるわけにはいかないという問題がある。

ささやかながらパーティーは開催するが、ネイチャはその際に用意するプレゼントについて悩んでいた。

そこでふと思いついたのがスーツである。

ネイチャがＧＩ戦線で戦うようになってから、西条がスーツを着る機会は増えた。具体的には記者会見などで。

だからこそスーツが候補に挙がったのだが、どんな感じのものが良いのかよく分からない。いっそのこと自分の勝負服（カラー）と同じ緑や赤ではどうだろうと思った。

「でもそれだとマーベラスな怪盗っぽくない？」

そう言われて少し想像してみる。緑のジャケット、赤のジャケット。確かに安っぽいコスプレのように見えなくもない。ならば緑と赤を合わせて……やめておこう。さすがに前衛的すぎる。

ネイチャは小さく首を振った。そして何となくペアルックみたいじゃんと思って頭を抱えた。

そもそもウマ娘（学生）がトレーナー（社会人）にスーツを贈るというのはどうなのだろう。ネイチャから見て、西条は既製服が合うような体型ではない。あれはアスリートの体型だ。

（絶対なにかやってたよね……）

以前にそう訊いたことがあった。返ってきた答えは――

「色々と手を出して、結局すべて中途半端に終わってしまったよ。だからひとつのことに打ち込んでいるウマ娘（キミたち）が眩しく見えた。そんなキミたちをサポートしたくて、僕はこの仕事を選んだんだ」

というものだった。

ともあれ、西条は既製服が合うような一般的な体型ではない。

長く愛用してもらうには、オーダーメイド以外ありえないわけだ。となればサプライズは中々厳しい。それにクリスマスまで間に合うのか。値段もオーダーメイドとなれば、二桁万円、あるいは三桁万円も視野に入れなければならない。

（プレゼントにそんな高価なもの……重い……重くない？）

今のネイチャならそのくらいの金額は右から左……ほどではないが、用意できない額ではない。だが西条は、気持ちだけ受け取っておくと言って普通に断りそうだ。というか良識ある大人ならそう対応する。

誰だってそうする。西条だってきっとそうする。

「ならマーベラスなネクタイはどう？」

天啓を得た。小物ならば向こうも気を遣わずに使えるだろう。ネクタイなら緑でも赤でも、そこまで奇抜なものではない。今の時期ならクリスマス（緑）カラー（赤）のネクタイだってあるかもしれない。３本買ったって、そう大きな出費じゃない。

「よし。ネクタイにしよう」

決意を声に出して、ネイチャは小さく拳を握った。

その様子を眺めながら、マーベラスなルームメイトは満面の笑みを浮かべた。

第２４話　光の中のライバル

有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念。

トゥインクル・シリーズで最も盛り上がるお祭りレース。前期の締めくくりに行われる宝塚記念と同じく、ファンの人気投票によって選ばれた優駿たちがぶつかり合うファン感謝祭のようなレースだ。

１番人気はトウカイテイオー。

ジャパンカップで圧巻の強さを見せつけ、トウカイテイオーここにありと世界に発した。

２番人気はナイスネイチャ。

宝塚記念の覇者で、この有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念を優勝すればグランプリ制覇となる。トウカイテイオーの陰に隠れがちだが、歴（れつき）としたダービーウマ娘である。

３番人気はミホノブルボン。

今年の皐月賞、ダービーを優勝した二冠のウマ娘。惜しくも三冠は逃したものの、その評価は高い。不安視されているのは相手が同年代ではなく、歴戦のシニアウマ娘たち

というところであろう。

場所はネイチャの控え室。西条はネイチャと向かい合って座っていた。西条が同じレースに担当のウマ娘を複数送り出すのは初めてのことだった。

ブルボンには自分のレースをしろと言い、ネイチャにも同様のことを言った。どちらにも勝たせたいという想いがあり、結果どちらにも贔屓しないというのが西条の出した結論だった。

「なんかね。信じられないって感じ」

ネイチャが小さくつぶやく。

「トレセン学園の入試に合格して、あたしもやれるんだって思ってた。でも周りはみんなキラキラしたウマ娘ばかりで、模擬レースでも1番にはなれなくて、なんだかなぁって感じで、意を決して選別レースに参加したの。その時に声を掛けてくれたのがトレーナーさん」

「懐かしいな」

もうずいぶんと昔のことに思える。ウマ娘特有のものか、その頃とネイチャの容貌は幾分も変わっていないように見える。

立ち上がり、ネイチャは西条の頬に向かって手を伸ばした。あと数センチで触れるところで手は止まり、彼女は咳払いをして手を下げた。

「トレーナーさんに出会わなかったら、あたしはくすぶっていたままだったんだろうなって。適当に勝って、適当に負けて、重賞も勝てたかもしれないけど、たぶんＧＩレースには勝てなかったと思う。たぶんね」

「そんなことはないだろう」

むしろ自分のような新人トレーナーではなく、実績のあるベテラントレーナーなら、更なる高みに昇れたのではないかと思うほどだ。

「去年はこんなに緊張しなかったのにな」

大番狂わせの起こった前年の有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念。その理由はテイオーがいなかったからだろう。ネイチャにとって、やはりテイオーは特別な存在なのだ。

「ねぇ、ギュっとして。そしたらあたし、頑張れる気がするの」

狭い控え室にか細い声が響いた。ネイチャの吐き出した小さな音。

西条はゆっくりと立ち上がり、そのたおやかな肩を抱き寄せた。

『お待たせいたしました。今年を締めくくるグランプリ有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念２５００メートル。１６人の出走メンバーを紹介していきます。まずは宝塚記念の覇者１番ナイスネイチャ』

ネイチャが観客席に向かって笑顔で手を振る。アナウンサーは出走ウマ娘たちの紹介を続けていく。

（テイオーは5番。ブルボンは大外の１６番か）

今回のレースは逃げウマ娘が多い。特に爆逃げ宣言をしているメジロパーマーとダイタクヘリオスをどう対処するかがブルボンの命題となるだろう。

『全ウマ娘のゲート入りが完了しました。さあ有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念２５００メートル、スタートしました。猛烈なダッシュで飛び出したのはメジロパーマー。１バ身から２バ身のリード』

飛び出したのは大方の予想通りメジロパーマー。ここで頭をよぎったのは秋の天皇賞で見せた破滅的な逃げ。ほかのウマ娘たちの脚がわずかに鈍る。

『さあ一周目スタンド前にかかってきました。とばします3番メジロパーマー、リードは５バ身となりました。２番手争いにレリックアースとダイタクヘリオス。少し下がってミホノブルボン。ミホノブルボンは４番手からのスタートです』

ブルボンの時計はネイチャも信頼するところである。現在ブルボンの後ろ、５番手に位置取ったネイチャはブルボンを壁にして脚を溜めていた。そのすぐ外にはテイオーがいる。

（仕掛けどころを間違うと閉じ込められる。ううん。焦っちゃだめ。まだ序盤よ）

『第2コーナーを回って向こう正面へ。先頭はメジロパーマー、リードは2バ身。2番手にダイタクヘリオス。3番手にミホノブルボンが上がってきました。その後ろにナイスネイチャ、トウカイテイオーと続きます』

（ブルボンが速度を上げた？　いや違う。前が下がったんだ）

今さらブルボンのラップ走法は疑わない。ブルボンは正確にラップを刻んでいるはずだ。つまり前が下がってきたのだ。これは、秋天のような破滅的な爆逃げペースではない。計算された逃げのペースだ。

『徐々に先頭との差が詰まります。最終コーナーを回ってメジロパーマーが先頭、続けてダイタクヘリオスとミホノブルボンが直線に入る』

最後の直線に突入し、ブルボンのスイッチが入った。ネイチャの視界からブルボンの背中が遠ざかっていく。だがそれよりも、ネイチャには気になることがあった。

（テイオーのリズムが速くなった。でもこれは助走だ。中山の直線ラスト２００メートル、ゴールまで一気に駆け上がる上り坂。そこをトップスピード（トップスピード）で駆け抜けるための……ならあたしは、先に仕掛ける！）

最高速度でテイオーに劣ることは認めざるを得ない。だが持久力（スタミナ）ではこちらに分がある。ブルボンに付き合って鍛え上げたトモと心肺機能は、テイオー相手でも劣っていないという自負がある。

一杯になって下がってきたダイタクヘリオスをかわし、前はあとふたり。メジロパーマーのスピードも鈍ってきている。おそらくは坂でかわせる。

問題はテイオーと、ブルボン。

（ブルボンの勝負根性は並みじゃない。競り合うよりも、最後の一瞬でかわす！）

上り坂でメジロパーマーの背中を捉えた。残り１００メートル。立ちはだかる強敵は、前ではなく外から来た。

陽光を反射して栗色の髪が神々しく光る。

ジャパンカップから続く絶好調は未だ維持されており、まったく隙の無い様相だった。

ネイチャはテイオーを見た。テイオーもネイチャを見た。

その瞬間、ネイチャはテイオーの威圧を肌で感じ取った。震えがくるほどにはっきりと。一瞬の交錯で、自分の見通しが甘かったことを悟る。

何度も見た、幾度となく研究した、テイオーがここぞというときに奏でる完璧なリズム。

――究極テイオーステップ

雷霆よりも烈（はげ）しく、流星よりも刹那的に、テイオーが駆ける。

（このままだと……負ける）

確信に近い予感がネイチャの身体を突き抜けた。フォームに間違いはない。何度も繰り返し確認した、一番自分の力を引き出せる最適化されたフォーム。それでもとどかないと悟り、そのギリギリの時間の中で、ネイチャはフォームを深化させた。

（それでもッ!!）

『速度の出し方――』

『坂の上り方――』

『安定しない――』

西条の教えが脳裏によみがえる。それらが順番に浮かんできたわけではない。すべてが一瞬で閃き、一瞬で消えた。

そして、いま自分がやるべきことを一瞬で理解した。必要なのはそれを実行する覚悟。だがネイチャは逡巡すらなく、即座にそれを実行した。

体軸をわずかにズラす。安定重視の走り方から、速度重視の走り方へ。

細緻の極限のさらに先へ。地獄の釜の縁（ふち）のさらに際（きわ）まで。少しでもバランスを崩せば奈落へ落ちる。

「だとしてもッ!!」

叫ぶ。

心の裡を吐露するように。決意を乗せて、絶叫する。

それが最後の呼び水となった。
歓声が消えていく。
景色が消えていく。
（今ならとどきそうな気がする。あの光の先へ。きっとその先へ…！）
天が消える。
地が消える。
人が消える。
自分以外の存在が消え、自分のためだけの世界が生まれた。
（……違う。あたしだけじゃない。テイオーが……いる）
宇宙をふたつの明星が貫いていく。
すぐ近くにテイオーがいる。この光が、この光こそが、ずっと追い続けた目映い光。
ネイチャの世界とテイオーの世界が繋がったという証し。
「あたしがッ！」
ウマ娘としての本能、勝ちたいという意志の発露が蒼炎となる。並び走る蒼き炎は残光となって決戦の軌跡を描いた。
この共有した領域の中で、ネイチャはようやく理解した。この瞬間が、この一瞬こそが、信念を貫き通す瞬きの時間だと。

「あたしたちがッ！」

ダービーで体感した領域よりも、更に研ぎ澄まされた領域。

今までで最速――テイオーと同等か、あるいは速い。その確信がある。

前へ。前へ。もっと前へ。

世界の先より訪れた、ネイチャの中の魂が叫ぶ。

「――勝つんだッ!!」

走る。ただひたすらに。ガムシャラに。

それしかできないから、それだけをやる。

一直線に光が疾風った。

『――――いま3人が並んでゴールイン。凄まじい追い上げでした！　ナイスネイチャとトウカイテイオー！　ミホノブルボンがわずかに残ったか。あるいはナイスネイチャ、トウカイテイオーが差したか！　ここからでは全く分かりません！　写真判定に入ります。確定までしばらくお待ちください』

ウマ娘は感覚的に自分が勝ったのは分かると言われているが、3人が3人とも自信と不安が入り混じったような表情だった。

永遠に続くかと思われた時間も、計ってみればわずかに5分だった。

3着に１６の数字が表示された。

ブルボンは小さくため息を落とし、コース上とスタンドにお辞儀をしてターフから立ち去った。

拍手から一転、またしても静寂が訪れた。

ナイスネイチャというウマ娘は特段に優れたウマ娘というわけでは、ない。テイオーを天才と評するならば、ネイチャは秀才にとどまるだろう。それは認めざるを得ない。

天才はいる。悔しいが。

だが勝負事は常に強者が勝つとは限らない。

あの”絶対”と評された皇帝に土をつけたウマ娘がいるように。

弱いから相手を研究する。理解する。尊敬する。

修練を積み、その差を埋めようとする。

ダービーで垣間見た”領域”、その入り口。本来なら、それがネイチャの限界点だった。その先に進めたのは、相手がテイオーだったからに他ならない。

テイオーに認められたい。テイオーの好敵手（ライバル）でありたい。テイオーに勝ちたい。

（テイオーと同じ世代であることを呪ったこともあった。でも今は違う。あんたはあたしにとって、やっぱり特別なんだ。あたしの最高の友達（ライバル）……あんたに出会えてよかった）

感慨深く、テイオーの横顔を眺める。

その執念（思い）が、ネイチャを更なる高みへと運んだ。テイオー以外の相手なら、おそらくネイチャはとどかなかっただろう。

才能（タレント）、感性（センス）、魅力（カリスマ）。どれもテイオーには及ばない。だが努力の量、努力の質、そしてレースに臨む覚悟。それらが劣っているとは思わない。なにより自分は、テイオーが得られなかったものを得た。

それは世界で最高の”杖”。

誰が何と言おうと、それだけは否定しない。諦めてしまいそうなとき、倒れてしまいそうなとき、いつだって支えてくれた人。

（だからあたしは最高の走りができた。胸を張ろう。勝っても、負けても）

レースは非情だ。だが時として、誰もが主役（キラキラ）になれる世界なのだということを教えてくれる。

電光掲示板に着順と確定のランプが灯った。

◇

「優勝おめでとう。ネイチャ」
西条の声を皮切りに、部室に拍手が鳴り響く。
「ブルボンもな。3着は上出来だよ。頑張ったな」
「ありがとうございます」
ブルボンは素直に礼を言ったが、どうにも微妙な笑顔だった。悔しいという気持ちが隠し切れないのだろう。
「最後の瞬間、ネイチャさんとテイオーさんがヌッと現れました」
「ヌッとか」
「はい。ヌッと」
ブルボンは独特の表現で言い表した。確かに西条から見ても、ネイチャとテイオーの追い上げは、ドドドドッというような豪脚ではなく、風に乗ったような軽やかな走りだった。
いきなりヌッと現れたというのも分からないでもない。
「ライスの施術も順調だ。春シーズンには間に合うだろう」
「う、うん。ライスがんばるよ」
「よし、じゃあ乾杯だ。今年もお疲れ様。来年も頑張ろう」
それぞれがニンジンジュースを片手にカチンとグラスを合わせる。忘年会を兼ねた

祝勝会は静かにスタートした。
テーブルの上に並べられた色とりどりの料理はみるみるうちに減少していった。
「ブルボンは高松宮杯。ネイチャは大阪杯。ライスは阪神大賞典から春の天皇賞。そしてみんなで宝塚記念だ」
自分の口から当たり前のようにＧⅠレースのタイトルが出てくることに違和感もなくなっていた。目の前の３人のウマ娘が、いずれも尋常ではない力を有していることに改めて気づかされる。
全ては予定でしかない。
それでも未来は明るいものだと思えた。
それから、扉を蹴破って闖入してきたゴールドシップ以下チームスピカのメンバーと、用意していた料理が彼女たちの胃袋に収まるまで宴会は続いた。
スピカが差し入れた料理も含めた全ての料理皿が空になり、ようやく解散となった。
手早く片付けを終え、みんなを送り出して最後に部室の鍵をかける。外にはネイチャが空を見上げながら静かに佇んでいた。
「先に帰ってよかったんだぞ」
「それもね、なんだかなーって」
「そうか。まあ送って行こう」

冬の陽は早い。すでに辺りは濃い闇に包まれており、常夜灯と星の瞬きだけがわずかに闇を照らしていた。

ふたりで並んで歩く。しばらくは無言の時間が続いた。だがどちらもそれを不快とは思わなかった。

ネイチャの所属する寮が見え始め、西条はようやく口を開く。

「なぁ、ネイチャ」

「ん～？　なに？」

「月が綺麗ですね」

「……そうね。あたし死んでもいいわ」

ネイチャは満面の笑みでそう返した。

希望を持ち続けることは難しい。絶望しないことと同じくらいに。

けれどこの人と一緒ならば、少なくとも絶望はしないですむだろう。

ネイチャは心の底からそう思った。

第２５話　雨が降らなければ虹は出ない

今年も残すところあと3日。チーム総出で部室の大掃除をし、ミホノブルボンとライスシャワーは実家へと帰省した。

ネイチャはピカピカになった部室をひとしきり眺めて、ソファに腰を沈める。気が抜けたように天井を見上げていると、ドアの開く音が聞こえた。

「なんだ。まだ残っていたのか」

「お仕事はもう終わり？」

「ああ。まったく、書類が多くて面倒だ」

師走という言葉通り、この時期トレーナーの仕事は多い。担当がネイチャひとりだった去年と違い、必要な書類が3倍になったということもあるが。

ふたりの距離感は変わらずいつも通りだった。そもそもトレーナーとウマ娘の恋愛はご法度であり、西条もこれ以上踏み込むつもりはなかった。むしろ先日の告白じみたことも、気が逸ったゆえの失言だと反省していた。

ネイチャに至っては自分に都合の良い夢でも見たのかと錯覚したほどだった。

「今年は、いや今年もか。色々あったが、結果としては上々だな」

宝塚記念、天皇賞（秋）、有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念の三冠。文句のない結果だろう。もう誰もフロックのダービーウマ娘とは言わないはずだ。

「そうね。うん、そうなんだけど」

釈然としない様子でネイチャがつぶやく。引っ掛かっているのは有《ｆｏｎｔ：ｕｌ４０》馬《／ｆｏｎｔ》記念でのあの感覚。それを察したのか、西条は先んじて口を開いた。

「領域（ゾーン）……いわゆる超集中状態だな。スポーツでよく使われる用語だ。有名どころだと、野球で「球が止まって見える」といった選手がいたな」

「あ～、それ体育で野球やった時にマックイーンが言ってた」

「多才な子だな」

令嬢がバットを振り回している姿は想像しにくかったが、案外そういうものかもしれないと思い、西条は嘆息した。

「集中状態に入るスイッチは個人差が大きい。逃げウマ娘なら最も集中しているのはスタートだろう。中盤の駆け引きで頭をフル回転させるウマ娘もいる。だが最後の直線、最後の攻防で入るウマ娘が多いな」

どんな脚質（スタイル）にせよ、最後の直線では残されたすべての力を注ぎこむしかない。そこでやれることは限られている。

「発動条件みたいなのがある？」

ネイチャはシンボリルドルフとの会話を思い出して、ぼそりとつぶやいた。

「発動条件（トリガー）はそれぞれ違う。それが分かったとしても、他人には漏らさないだろうな。精々トレーナーと共有するくらいだ」

条件が割れれば、他のウマ娘は当然対策するだろう。というか、自分の条件すら分かっていないウマ娘は多い。ネイチャも分かっていないし、おそらくテイオーも分かっていない。

（ネイチャもテイオーも、最終直線で入るタイプだ。競り合うことで闘志を燃やす、劣勢の状況で入るタイプ）

未だに秘匿されているドリーム・シリーズへの昇格条件に、西条は”領域を確立させること”があると推測していた。

というのも、ドリーム・シリーズで戦うウマ娘たちは、いずれも入っているウマ娘だからだ。

そもそも西条は領域については聞きかじった程度の知識しか持ち合わせていない。数々の競技を経験してきたが、西条は一度も領域には入れなかった。それもそのはずで、西条は領域に入る前提条件すら満たせなかったからだ。

それは”その競技を愛し、一心不乱に打ちこんでいること”。

西条はどうしてもその条件を満たせなかった。
過去の経験から自分は超一流にはなれないという思い込みがあるため、諦観の念を捨て去ることができなかったのだ。
またある選手は”ゾーンは降りてくるもので入ろうとするものではない”とも言っている。
条件を認識し、それを満たしたからといって必ずしも入れるというものでもないのだ。
結局のところ、領域は身につけた技術（スキル）のひとつでしかない。縋るな、とらわれるな、流れに身を任せろ、というのが西条の結論だった。
（たぶん、それが真理だ。領域頼みのレースをすれば、菊花賞のようにしかならない）
西条は胸中で独りごちた。

◇

ウマ娘がいない。ただそれだけだというのに、トレーニングコースはとてつもなく広

大に見えた。いや、全くいないというわけではない。年の瀬も年の瀬だというのに、チラホラと鍛錬に励むウマ娘たちの姿が見える。

そのコース脇のベンチに、見知った顔を見つけた。棒キャンディーを咥え、茫洋とトレーニングコースを眺めている男。

その近くにスピカのメンバーは見えない。

見つけてしまったからには挨拶くらいはすべきだろう。そう思い、西条は石段を降りていった。

「なにをしているんですか？」

とりあえず、最初の疑問をぶつけた。

「……ああ、キミか。この場所にお礼を言ってたのさ。今年一年、世話になったからな」

（随分とセンチメンタリズムな……いや、人のことは言えないか）

「スピカの子たちは全員帰省ですか？」

「ん。まあそうだな。たぶん」

何とも歯切れの悪い返答だった。スペシャルウィークとゴールドシップはサマードリームトロフィーに出走したので、今冬は余裕のあるスケジュールのはずだ。

（ああ、ゴールドシップか）

あれほど読めないウマ娘も中々いない。出身はゴルゴル星と言って憚らないし、ゴル

ゴルの実を食べた能力者らしいが、今は能力を封印されているといったり。そんな虚言の中で偶に核心を突いた発言をするから侮れない。

取得した資格は１００を下らないらしく、基本的に何でもできる。つかみどころがなく、破天荒、歩く理不尽、まあゴルシだし……と大体こんな評判である。

「おまえら、今ゴルシちゃんのこと考えてただろ？」

大の大人ふたりが肩をビクッと震わせた。うわさをすれば影がさす。言葉に出したわけでもなく、胸中で思っただけだというのに。

「お、おう。ゴルシ。最近見なかったが、どこかに行ってたのか？」

「ちょいと未来から来たサイボーグウマ娘とバトっててな。心配するな。ヤツはキッチリ溶鉱炉に沈めてきた」

「なんだそりゃ。まあいいや」

スピカのトレーナーは早々に解読を諦めたようだが、そろそろゴールドシップとのつき合いも長い西条は、なんとなくだが彼女の言ったことを推察した。

サイボーグはブルボンの隠喩。つまり逃げウマ娘。未来（先）から来たということは、ブルボンより先輩。かつゴールドシップと交友関係のあるウマ娘。

となるとかなり絞られてくる。まず最初に思い浮かんだのは、チームスピカに所属していて、現在はアメリカ遠征中であるサイレンススズカ。

溶鉱炉は洋行路、沈めるは静める。
ホームシックにかかった彼女を宥めるために渡米し、励ましてきたといったところだろうか。西条はそう考えた。
実際はどうだか分からない。もしかしたら、本当に未来から来たサイボーグウマ娘と戦っていたのかもしれない。訊いたところでまともな答えは返ってこないだろうが。
「んで、男ふたりでこの寒空の下、何やってんだ？」
「あ～、そうだな」
「まあどうでもいいや。それよりチャンコ鍋食おうぜ。ただし西条、テメーはダメだ。これでも食ってろ」
投げ渡された菓子箱を受け取る。包装紙には「メジロ銘菓　メジロ饅頭　メロン味」と書かれていた。左下には看板娘よろしく、まんまる顔のデフォルメマックイーンが「やめられませんわ！　とまりませんわ！　パクパクですわ！」と美味しさをアピールしていた。
（メロンチョコやメロン大福があるんだから、メロン饅頭くらいあるか。さすがメジロ家だ。この多才や多角経営が名家を支えているのかもしれん）
とりあえず礼は言っておこう、と西条が目線を上げると、見えたのはスピカトレーナーを引きずりながら去って行くゴールドシップの後ろ姿だった。

苦笑し、改めてトレーニングコースを振り返る。
血と汗と涙を流し、夢と現実を教えてくれた場所。
その場所に一礼して、西条はきびすを返した。

◇

トレーナーという職業は高給取りで社会的地位も高く、子供たちのあこがれの職業だった。しかしトレーナーライセンスの取得は国家資格の中でも屈指の難易度を誇る。
いくら時代がトレーナー不足で喘いでいても、そこを妥協することはない。またライセンスを取得し、晴れてトレーナーになっても、そこがゴールではない。そこからがスタートなのだ。
中央のライセンスを取得したトレーナーのほとんどは、その所属をトレセン学園に帰属する。そこで自分のパートナーとなるウマ娘を見い出すのだ。
首尾よくトレーナー契約を結ぶことができれば、そのウマ娘とは一蓮托生となる。ないにせトレーナーとしての実績や収入のほぼすべてが担当したウマ娘の成績に左右され

るのだから。

だからこそトレーナーも成長しなければならない。そのウマ娘にあったトレーニングを模索し、ライバルの調査や、日々変化するレース事情、新しい論文などにも目を向ける。

新しい論文は常に発表され、古いものは淘汰された。その中で、面白いサイトを見つけた。レースやトレーニング法などとは関係ないが、ウマ娘の発祥についての論文だった。

論文とは言えないような書きなぐりの文章だったが。

ウマ娘については未だに謎が多く、その進化についても色々な説があった。最も有力とされているのが、人間が猿から進化したように、その過程で何かが起こり、ウマ娘に進化するルートへと分岐したのではないか、というものだ。

外見が人間と酷似しているのもそのためだろうと。

しかし、その何かは未だ特定には至っていない。

遺跡などの壁画を見るかぎり、人間が文明らしきものを手に入れた時点でウマ娘の存在は確認されている。

それからしばらくは人間とウマ娘は良い関係を築けていた。その関係が崩れたのは、ウマ娘の生態に関係がある。

遺伝子的に近いウマ娘と人間の間には問題なく混血が可能だった。だがウマ娘が出産するのは、ウマ娘だけだったのだ。ウマ娘が人間を出産したことは一例として確認されなかった。

これが何を意味するのか。

ウマ娘が生物として不完全であるということだ。

そして、ウマ娘がウマ娘しか産めないのなら、最初のウマ娘はどこから現れたのか。

ウマ娘のイヴはどこから来たのか。未だに謎に包まれている。

人間と変わらぬ知性を持ち、人間を超越する身体能力を誇る。しかし彼女たちは人間の男がいなければ繁栄できない、不完全な種族だった。

だから彼女たちは、その高い身体能力を武力としてではなく、人間の役に立つことに使ったのではないか。

ようするに彼女たちは、愛されたかったのだ。自分たちの存在を認知してもらい、寵愛を欲したのだ。

だがそれは、人間女性との対立を生んだ。

人間女性は声高に「やつらは私たちに取って代わろうとしている」と叫んだ。当然ウマ娘たちは「誤解だ」と弁明する。

しかし一度火が付いてしまえば、燃え上がるのに時はかからなかった。当時の王族や

貴族たちのほとんどが人間女性を伴侶にしていたからだ。
ウマ娘の優れた身体能力は、青き血の者たちには不要だったのだ。
そして対立は顕著となりウマ娘は冷遇されることになる。いくらウマ娘が人間に比べて高い身体能力を有していても、数の差は覆せない。
しかし、少し落ち着いて考えてみれば分かることだが、ウマ娘からはウマ娘しか産まれない。つまり、人間女性がいなくなってしまえば、いずれ人類もウマ娘も絶滅してしまうことを意味している。
それでも、激昂した女性たちはまるで意に介さない。ようするに彼女たちは、ウマ娘が自分たちよりも上位に立つことが許せなかったのだ。
そして魔女狩りのようなことが始まり、ウマ娘の数は一時激減したこともあった。いわゆる暗黒時代のことについては、ここでは省かせていただく。本筋からそれることではあるし、陰鬱な内容になることは否めないからだ。
その時代に逃れたウマ娘たちが、ウマ娘だけの集落を作り、繁殖用の男を攫って種族を維持したという事例も確認されている。
それから時が経ち、紆余曲折を経て、人間とウマ娘の融和はなった。その憲章なるものも作られたが、内容を正確に把握している者は少ない。それくらい、人間とウマ娘の距離は近くなった。

それでも、この世界の主役は間違いなく人間で、ウマ娘は副次的な存在であることは確かだ。

中世から貴族の遊びとして始まったレース。それが今では、世界に広がり、世界的なエンターテインメントとなっている。

ウマ娘とは違う、今なお続く、走ることに特化した”競走”ウマ娘の誕生である。

速いということが愛されるための手段だと、長い歴史の中で彼女たちの遺伝子に刻まれたのかもしれない。

速いから愛されるのか。愛されるから速いのか。

世界は何故、ウマ娘という存在を生み出したのか。

そんな疑問は、人間の傲慢かもしれないが。

ウマ娘。

世界で最も？栄したかもしれない種族。

彼女たちが生物として完成していたならば、人間とウマ娘の立場は逆だったかもしれない。

ウマ娘とは、なんだ？

解はどこにあるのか。